

亜人ちゃんに伝えたい

まむれ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

見守るだけでは抑えられないこのときめき

※アニメとの相違点等はDVDを購入するまでそのままにしておくことにしました。

原作も買おう（ダイマ）

目 次

日下部春明は相談したい	——	——
日下部春明は出会い	——	——
似たもの同士	——	——
日下部同士のちよつとしたお話	——	——
デュラハンちゃんとちよつとだけ	21	14
27	7	1
雪女さんは意地つ張り	——	——
保健室の亜人	——	——
日下部春明と生物教師	——	——
小鳥遊びまりには勝てない	——	——
野郎共は語りたい	——	——
デミちゃんは誰が可愛いのか	——	——
61	55	50
44	38	33

小鳥遊ひかりと話せない	——	——
日下部春明は盗み聞きする	——	——
日下部春明は恋愛相談する	——	——
佐竹裕介は遊びたい	——	——
日下部春明の買い物付き添い	——	——
小鳥遊ひかりを話したい	——	——
小鳥遊浩二は突っ込みすぎる	——	——
【幕間】小鳥遊家は語りたい	——	——
亜人好き教師と語りたい	——	——
佐竹裕介は舞い上がる	——	——
二人はなかよし	——	——
小鳥遊ひかりはやり返したい	——	——
日下部春明は懐かれる？	——	——
137	131	124
118	113	107
100	94	88
83	78	72
67		

放課後は語りたい

野郎共の試験明け

日下部春明は力になりたい

日下部春明と雨

小鳥遊びまりをからかいたい

人間たちは語りたい

高橋鉄男に当たりたい

日下部春明の校舎裏

小鳥遊びかりの渡り廊下

小鳥遊びかりに伝えたい

221 211 202 190 182 175 168 161 154 147

【エピローグ】日下部春明は共にしたい

日下部春明は相談したい

まあ何と言うか、俺が彼女に惚れたのは例の一件が決め手だと断言する。

元々件の女の子に関しては入学式の日に見て可愛いなーぐらいには思つてて、彼女は星のように光つていた。つまりその時にはもう好感度ゲージが伸び始めていたのでアレがあつてもなくとも好感度MAXの到達は遠い日ではなかつた。

「せんせー……」

「人間の方の日下部、どうした」

「その呼び方は酷くないっすか」

「男なんだから我慢してやれ、それがもう一人への思いやりつてもんだ」

「理不尽過ぎる」

ただ俺の好きな女の子はちょっと特殊と言うかなんと言うか、いやほんと文字通りと
言うか。

「それよりせんせー、テツせんせー」

時は放課後、例の一件から数日後の夕方。一人になつた高橋鉄男先生（目下最大の敵）
を捕まえて連れ込んだところである。

苦渋の決断ではあるが俺はこの先生を頼ることにした。遠い道のりの中で一番の壁になるのは確信を持つて言えるが、それでもこの先生の知識は俺にとつて学校の先生など遙かに及ばぬ、どころかあの諭吉先生をもつてしても入手できない至高のお宝なのだ。

おうどうした、といつも通りのぼけっとした表情を向ける先生に俺はいよいよもつて心中を打ち明けるのである。

「いやその、なんというか……」

「おう……」

いや待つてこれ恥ずかしい、誰かに恋愛相談とかクソみみたいに恥ずかしい、堅苦しく用意しても駄目だこれは。

「…………」

「…………」

そして流れる沈黙の時間、野郎二人が放課後にこれとは死にたくなつてくる……ええい、覚悟を決めろ俺！ 今ここで言えなかつたら将来も言えないだろ！！

「…………くっ！！ はあ……」

「で、なんだ日下部 春明」

「何故フルネームなのかはおいときますけども、俺、恋しちやいましたわ、どうしましょ

う

「お、おう」

「いやそんな鳩が拳銃突きつけられたような顔されましても」

「まあそんな相談を生徒から受けけるとは思わなくてな、オレおっさんだし、先生だし」
「お前友達いるよな？」と確かめるような表情の先生にやるせない気持ちになる。

確かに普通は先生とかじやなくて男友達とか女友達とかそつちに相談する。例えからかいの材料となつたとしても。俺の友達はそんなことしないと思うが、いやしないと信じさせてくれ。

「オレに相談したということはあれか」

「えつ」

「いや、三人の誰なんだと思つてな」

「……小鳥遊 ひかりさんです」

「そつかーひかりかー……いやすまん、そんな顔しないでくれ」

「うんすまない、先生という立場で女生徒を名前で呼んでるなんてけしからんと思うんだ。ああいいなあ……羨ましいなあつて……ちくしょーめ。」

それはさておき、好きな女の子 小鳥遊さんを名前で呼んでいるという点を除けば、テツ先生はとても良い先生である。察しもいいし（ここ重要）

だから恋愛相談を持ちかけられればどういうことかわかるのだろう。

「どうすりやあいつすかねー……」

「どうするも何もな、特に何も気にしなくていいだろう」

「でも俺は小鳥遊さんのこと知らないんですよ、いや知つてはいますけど、それでも大切な部分は知らないわけです、そう言うことで嫌われたくないんですよね」

「なるほど」

そう、小鳥遊ひかりは可愛い。性格は明るく常に周囲と騒いだりして喜怒哀楽の哀の部分を他に変換してるんじゃないかつてレベル。それなのに妙なところで気が利くというか他人の心に敏感なのだ。距離感を掴むのが上手いというか。しかしそれを全然感じさせない、気付いてるのは本人と俺と、数人くらいじやないだろうか。あと先生たち。

ちなみにチャームポイントはちらりと見える控えめな八重歯だと思います。

ただしこれだけならほんとに友達内で済むのだ。別にテツ先生に相談を持ち掛ける必要性は0。ただそう、本当に次の要因が大事なのだ。

「教えてください先生、亜人……亜人と呼ばれる特殊な人たちのことを」

あじん

デミ

小鳥遊 ひかりは亜人あじんである。

亜人あじんつて言うのは、簡単に説明するならば昔話や神話に出てくる妖怪やらなんやらのモチーフになつた人、かな。昔はそりやあ大変だつたみたいだけど今は色々制度とかも出来て大分改善されたらしい。

あとこれは本当に恥ずかしい事なんだけど、デュラハンの亜人あじんを見た時はやっぱり怖いとかうわあとが負の感情は出ちやつたよ。今はそうでもないんだけどね。

「教えるのは吝かではない」

「おお……流石先生です」

「が、やはり同じ男としてはどうしてそうなつたのか気になつちやうな」

「一瞬前の尊敬を返せ中年親父」

「その呼び方は酷くないか日下部」

この先生はやっぱダメ教師だ。今そう思つた。

でもそれを伝えることで代わりに亜人あじんのこと教えてもらえるなら話そうと思う。

恥ずかしさでつつかえたりするだろうけども、そこは我慢してもらおうかな。

「うーんとりあえず入学式からでいいですか？」

「そこからか……」

「いやほんと大事ですから」

「生徒の惚氣を聞くことを了承した覚えはないんだが」
「ちやうねん先生、やっぱ初対面の思い出つて大事だと思うんですよ。と言うか入学式
の日に会わなければ、話さなければ今こうしていることもなかつたと思うんです。」

「亜人デミに惚れたかー」

「はい」

「頑張つて思いを伝えなきやいけないな?」

「……」

「……そう、ですね」

「それは簡単そうに見えてとても難しいことだつた。好きな人に好きと伝えるのは難
しい。それは人間も亜人デミも同じこと、だと思う。」

「それでも俺は、日下部 春明は伝えたい。」

「亜人デミちゃんと伝えたい。」

日下部春明は出会いう

—4月 柴崎高等学校

俺は日下部 春明。15歳

この春入学した、と言うかまさに今日入学式を終えて顔合わせを済ました新鮮な高校生である。中学では何事もなく過ごし、問題も起こさずたまに級友の佐竹とバカな騒ぎをしてはクラスの連中に笑われる日々を過ごした。

なんだかんだ頭の出来は似たようなものだったので佐竹と俺は同じ高校を選び、周りに色々（主に勉強とか勉強とか勉強とか）助けられながら受験と言う苦難の道を乗り越えて今ここにいる。

「あー、なんかドキドキするわやつぱり」

ちなみに佐竹とは無事同じクラスになれた。一緒に帰るかとお誘い申ししたもの、あいつは他クラスの女の子を見に行くと言つて消えて行つた。相変わらずだつた。

しようがないので校門前で壁に寄りかかりながら待機中である。佐竹も馬鹿な奴だな、校門なら帰りに皆が通るから女の子もチェックし放題だと言うのに、あとは特徴を

抑えて翌日以降に男子に聞き込みすればいいのだ。

俺といよいよ高校生へ突入した健全な男子学生。中学ではそんなイベントはなかつたが進学した今、俺は彼女が欲しい。

「…………」

「…………何か？」

と言う訳で下校する生徒を眺めていたところ、一人の少女がこちらに振り向いてじーっと視線を向けている。なんなのだろうと声をかけることにした。ほら、可愛いいその子。

「ねえねえ、何やつてるの？」

「友達を待つてるところだけど」

「へー、その割には女の子ばかりじろじろ見てたみたいだけど
「……気のせいじゃない？」

「私、そう言う視線とか気になるタイプなんだ」

別にそこまでガツツリ見てたわけじゃないし、ついでに言えばこの子を見ていたわけではない。しかしその女の子は得意げに腕を組むと俺への口撃を始める。俺が君に何をしたというのか。

携帯に視線を向けながらさりげなく女の子を見るのは狡賢いとか入学初日から一体何をしているんだとか散々な言われよう。もう一度言うが俺が何をしたって言うのか。「わかつたわかつた。で、君は何でそう俺に絡んでくるんだ……」

「いやー、暇だつたから

「は？」

「んー、妹を待つててね。そしたらなんか女子に如何わしい視線を向ける変な人が！ そう言うのよくないよ！ つてね」

なんと正義感に溢れる女の子なのだろう。冗談はその左右にツノみたいなデツパリがある髪型だけにしてほしい。

いや可愛い女の子と喋れるのは結構なことだ。俺も佐竹が来るまでの暇を潰せる。ただ文明の利器である携帯がある以上女の子の方はわざわざ俺を暇つぶしにしなくても良さそうなものだが。

「ま、そーゆー訳だから。えーっと名前は？」

「日下部、日下部 春明。クラスはAだ。そつちは？」

「小鳥遊 ひかりだよ！」

私はB組なんだ。」

名前はわかつた、次はお互いの紹介を済ませたところで気になつていたことを聞いてみる。

「そう言えば妹って？」

「あー、うん。双子なんだ私。妹はひまりつて言うんだけどね」

「へえ」

姉の私がいないとダメなんだよねー、とからから笑う小鳥遊さんに俺はうさん臭そうな視線を向けるしかなかつたのである。ブレザーの下から白いシャツが見える小鳥遊さんを見ればそれは十人中九人が同意することだろう。ちなみに残り一人は大穴狙い。妹が人見知りな性格で姉に頼るような小動物系の妹で姉は面倒見が良いという可能性の大穴である。

「にしてもやつぱりデミつて珍しいんだね。中学の時もそうだつたんだけど

「ん？ デミ？」

「あ、亜人のこと。私達くらいの人は皆亜人つて言うんだけど知らなかつた？」

「知らなかつた」

亜人なんて見たことなかつたから仕方ないだろうそれは。

神話やおとぎ話の中に出でてくる存在をモチーフとした人間とはちょっとだけ違う性質を持つ人たちを総称して亜人と言うくらいは世間一般常識であるがそれと同時にその亜人は少数で子供の狭い世界ではせいぜいテレビの向こう側でちらりと見るくらいである。有名なのはサキュバスとか。あと人魚の亜人も水泳の大会がどうのとか。

それくらいなら俺でもわかる。ただ、それが何故唐突に出てくるのかがわからない。

「で、それがどうしたんだ？　俺も小中で亜人アメニンは見なかつたし、そんなもんだと思うんだけど」

「そうだけどお……」

煮え切らない表情だった。左右に目線を走らせ、言うか言うまいかと悩んでいる姿にこう、うさん臭さと言うか不審者と言うか。

「お姉ちゃんお待たせ……つてもう友達作ったの？」

微妙な空気が流れる中、それは後ろからやつてきた第三者によつて霧散する。

どうやら小鳥遊さんの妹さんが来たようだ。そちらを向けばなるほど、小鳥遊さんとほとんど同じ顔だが明るい茶色の髪を左右で結んでいて、制服は姉と違いちやんとしたままで。これは小鳥遊さんの大ホラの可能性が高くなつてきた。

「私が友達作れないみたいな言い方はよしてよ～」

「一週間は友達作りどころじゃないだろうな、なんて私に愚痴つてたのはお姉ちゃんじゃない！　その割には私より早く校門にいるし！」

「妹が待つてるからつて後回しにしちゃいました。えへへ」

「まつたく……そちらの方もすみません、姉がご迷惑をおかけしました」

「あ、ああ俺も友達待ちだつたし大丈夫だよ」

「そう言つてくれると気が楽になります」

まさか女の子の子觀察してたらそれを咎められました、なんて正直に言う訳にはいくまい。小鳥遊さん？ まあ、そう、だねうん。

しかし礼儀正しいな。小鳥遊びまりでと軽くお辞儀する少女に自分も気後れしつ返す。この姉妹の差はどこから生まれたんだ。

「あ、そういう

？」

「さつき亜人^{デミ}の話をしたのはね？」

「私も亜人^{デミ}だからなんだ」

「お、おお？」

「吸血鬼^{バンパイア}の亜人^{デミ}なの！」

口の端を指で持ち上げ、ほらほらと笑顔で八重歯を見せてくれる小鳥遊さんに一瞬見惚れながらまさか小鳥遊さんが亜人^{デミ}だつたなんてと驚きを隠せない。話しててどこにもうかなんて思える要素がなかつたから完璧に人間だと思つてた。と言うか普通亜人^{デミ}かどうかじやーねー日下部君」

「お先に失礼します」「お、おうさいならー」

かろうじて挨拶だけを返すと二人の背中を後目に校門によりかかる。うわーまじかー、亜人デミと会話してたー。これ佐竹に自慢できるかななんてね。

帰つたらちよつと吸血鬼バンパイアのことを調べてみよう。あと亜人のことも調べておかないと。

そんな俺の思いを他所に佐竹はその三十分後にやつてきた。とりあえず頭叩いて一緒に帰つた。

似たもの同士

——翌日

「おはよーす」

「おう」

寝過ぎすどころか早朝と言える時間に目が覚めてしまつた俺は中学時代から考へると早めに家を出て、早めに学校に着いて教室でだらけていた。

それから少しづつから何とも意外なことに佐竹の奴がやつてきた。なんと、遅くに来る訳ではないが少なくともこんな早くに来る奴ではなかつたのだが。

ふと教室内の時計に目を向ければ時刻は七時四十分。ううむ、こいつ中学んときは大体八時くらいにクラスに入つてくるんだけど……

「珍しいなこんな時間に来るなんて」

「あー、まあちょっとな」

茶化すように言えば佐竹は歯切れが悪そうな顔。そう言えば昨日の結果を帰り道聞いてなかつたが、もしや芳しくなくて今度はクラス内をと思つたのだろうか。良さげな女の子がいれば自分から話しかけるくらいのこと、佐竹なら普通にやる。

「なんというか、二日目つてのが緊張してよ」

「お前は俺か」

「これには思わず苦笑い。まあ昨日はほとんど入学式で終わって教室に戻った俺達は黒板に描かれた通りに座つて、そこで担任の先生から挨拶があつてその後解散したのだ。クラスメイトの自己紹介は翌日の一時間目に、と綺麗な予告も貰っている。内容なんて考えてないよう……なんて。

どうせ特に何か言うでもあるまい。出身中学を言つてちょっとこんなのが好きですよみたいなこと言えば終わりである。

「あ、日下部くーん！ やつほー！」

「ん？ ……あれ、小鳥遊さん、だつたつけ。やほー」

さてどんな話をして時間を潰そうか、幸い佐竹がいるから携帯を覗いてポチポチするよりは楽しく過ごせるだろう——と思ったところで教室の外側から声がかかる。

昨日と同じ左右に謎のでっぱりは立派な目印になりそうだ。快活な表情を浮かべて片手をぶんぶんと振るのは昨日の正義感溢れる美少女、吸血鬼の亜人バンパイア_{デミ}である小鳥遊びかり、ちょこんと控えめに頭を下げているのはその妹である小鳥遊びまり。その両名。

どうやら彼女たちも早く来てしまった組らしい。二日目なのだからまずは各々のクラスで交友を広げた方がいいんじゃないと思うのだけど。

「おい」

「あ」

肩をガツシリと掴まれる。そんなことをする奴はもちろん一人。そして今さら気付いたのであるが俺はそいつに待つて居の出来事など伝えていなかつた。

振りむけばそこには説明してくれるよな? と言わんばかりの佐竹の顔。めんどくさいって言うのが感想です。

「いやお呼びは俺だけみたいなんで?」

「おい」

「ホントごめんな」

「笑つてゐるのをごまかせてねーから、今のお前最高に変な顔してゐるぜ」

「あんまり女性待たせると怒られるつて聞いたんで」

「昼休みは覚えておけよ」

「ごめんだけどその頃には忘れてると思う。」

「や、おまたせ」

「いえ、お友達と会話してましたけど良かつたんですか?」
「もちろん」

ひまりさんが申し訳なさそうに佐竹の様子を伺つてゐるがあいつはあいつでなんとかなるだろう。ほら、暇そなうな奴一人捕まえて話し始めてる。昼休みは捕まつた奴と話せばごまかせるだろう。

「いやー、学校が楽しみすぎて！」

「お姉ちゃんにしては珍しく、本当に珍しくこんな時間に登校できるくらいの時間に起きたんです」

「ひまり、酷い！」

「実は俺と佐竹も同じクチだ。と言つてもクラス内の自己紹介とか高校生活始まった緊張とかあるからなんだけど」

どうやら俺達は意外と似たところもあるようだ。小鳥遊さんはさもありなん、昨日からして女生徒を凝視する人間に話しかけるくらいには楽しかったのだろう。俺としては樂しみすぎて寝れないような小学生みたいな一面を持つ人かなとも思つたんだけど、むしろ疲れて寝てしまつた結果早朝に起きてしまつたのだろうか。

と、ふとここで俺は強烈な違和感を覚えた。小鳥遊さんは、まあわかる。いや昨日知り合つたばかりだろと言われればそうなのだがそれでも彼女はそんな人なんだなあみたいなイメージがある。

だが待つてほしい、情けない姉にしつかり者の妹と言うこの姉妹の妹の方がそんなに

早く起きるのだろうか、と。家が近い可能性に無きにしも非ずだが……

「あ、私はいつも起きるのが早いんです」

「なんと」

「お姉ちゃんは遅いんですけど遅刻しそうになるのを何度も見るうちに自分だけはど」

「それは、小鳥遊さんサマサマだね」

「ひまりつたら本当に遅刻しそうな時は容赦なく置いてくからねー！ 血も涙もない妹なの……」

それは遅刻しそうになるやつが悪いだけなのでは。流石に俺も遅刻しかけたりしたのを他人のせいにしたことはない。電車が遅延すればそれのせいに出来るが生憎と俺は自転車通学である、無念。

「そう言えば昨日の事なんだけど」

「？」

「いやそんな顔されても、ほら亞人デミだつてお話」

結局あれからちよつとは調べてみたのだがあまり遅くまでやれば寝坊するんじやといふ懸念（経験則からの勘とも言う）があつたので深くは調べ切れていない。

いやもうほんと基礎的なことくらいしかわからんかった。あと亞人と呼ぶように

なつたのは割と最近だつたとか。

「俺つて亜人デミと友達になるの初めてでさ」

「そもそも学校に一人いるだけで珍しいくらいだしねー！」

「佐竹とかもそうなんだけど、多分」

あいつなら知らないところで亜人デミと知り合つてもおかしくない……いやさすがにそれはないか

まあ何が言いたいかつてーと、だ。

「これから先気に障つたこと言つたらごめんねつて思つて」

「それは言うの前提なの……？」

「俺らではなんともないと思つたことももしかしたら亜人デミにはいらつときたりかもそれないし」

「それは無い訳じやないけどほんと気にしないよ？ 気にしたら言うし」

そんなもんなのかな。でもこれはどちらかと言うと俺のためでしかない。予防線、と言ふ奴だ。

「小鳥遊さんがそうならそつちは安心かな？ 遠慮はいらないよそう言うことがあつたらガンガン言つてほしい。今後お付き合いがあるかはわからぬけど」「ひどい！」

「小鳥遊さんはB組だし妹さんはC組でクラス違うし、お互のクラスでの人付き合いもあるじゃん?」

ほんとはそんなことにはなつてほしくないのだけれど、と言うかデュラハンの子もいるしどちらかと言えばそっちの方に行きそうだ。

ひまりさんはむしろ俺と佐竹を戒める係りになりそう、一緒のクラスになつてたら間違いないよく怒られるようになるだろうなあ。

「あの、日下部さんがこちらに会いに来たりとかしてもいいんですよ?」

「それは……」

「それは?」

「なんか、言い寄つてるように見えないかな?」

そこらへんのさじ加減がわからない。まさか面と向かつて二人は結構可愛いし、なんて言える訳がないし言えたら中学時代に彼女の一人くらいで来ていたに違いない。

「小学生か!!」

二人とも結構辛辣だった。

日下部同士のちよつとしたお話

偶然と言うものは中々にあるらしい。

「日下部 春明です。そこの佐竹つて奴と出身中学は同じなので詳しく述べるはそいつの話を聞いてやつてください、趣味は……特にないのでこれから増やして行けたらなと思います」

そういうえば俺つて佐竹達と馬鹿やつてたからあまり趣味らしい趣味はない。強いていうならサッカー？ 遊びでやるくらいだから上手いわけではない。

つまらねーなーとヤジを飛ばしてくるそこの佐竹、俺は良いが先生から睨まれてるからな。目をつけられても俺は知らないぞ。

とりあえず難局を乗り越えたのでリラックスして背もたれに体重を預ける。預けすぎるが背中が曲がつて後ろの人迷惑をかけてしまうので注意が必要だ。
もつとも、すぐに俺は背もたれとお別れすることになるのだが。

「日下部 雪です。上京してきました、その、よろしく、お願ひします」

なんと、まさか同じ苗字を持つ人がいるとは。

雪と言つた少女は言葉少なにそれだけ言うと座つてしまふ。ちよつとした間もあつ

たがすぐに後ろの人が立つて続きを受け取つて微妙な空氣になることはなかつた。

その少女をちらりと盗み見してみればこれまた中々可愛い。やや首を垂れているうえにこちらも盗み見態勢なので顔を全て見えるわけではないが。

髪は……そう、結構特徴的であつた。何がと言うと色が。春に見る薄い色の葉っぱを人の髪の毛にしたらこんな感じかなつて色。伝わりにくくてすまない。ただし彼女の名譽のために言えばどこの吸血鬼バンパイアとは違ひヘンテコな髪の纏め方はしていない。

本当は今すぐにでも話したかったのだが流石に今は授業中だし、ゆっくり話せるかどうかはさておきまあ昼休みくらいに話しかけてみよう。だからな、熱烈な視線を向けるのはやめてさしあげる佐竹。

ちなみに件の佐竹は気合の入つた自己紹介をした結果、担任からうるせーと熱烈な評価をいただいた。良い奴ではあるが加減くらいは覚えたらどうか。もちろんクラスが笑い声で満たされたのは言うまでもない。そして佐竹が朝に絡んでいたのは太田、とう名前らしかつた。

「や、日下部さん」

「……えつと、日下部君つて呼んだ方がいいかな？」

一瞬の間の後、日下部さんはこちらに顔を向けた。あ、これは普通に可愛い。

時刻は既に昼休み。乱雑な係りやら委員会やらを決めてあとちよつと色々やればあつという間だ。時間が早く感じるのは最初の一週間だけなんだろうなあとしみじみしつつも目的を忘れない。

一応佐竹には話を通しておいた。あいつも思うところはあつたのか快くそれに応えてくれた。「ファーストコンタクトはお前に譲つてやるぜ」じゃねーよ有難いけど何キメた顔で言つてんだ。

「うーん……結構難しい問題だ」

「です、ね。同じ苗字ですとこんがらがっちゃいます」

とは言え名前で呼ぶかと言われると俺達は今初めて喋つたわけだし馴れ馴れしい。そこは細心の注意を払うということで結局お互い苗字呼びにすることにした。

残念ながらじやあ名前で呼ぶ? と言える程俺はレベルが高いわけではなかつた。

「そう言えば地元はどこなの?」

「け、結構寒いところなんです」

「へえ……ゆ、雪とかも降つてたり?」

雪という単語でつつかえたのは許してほしい。だつて雪つて日下部さんの名前じやん! なんか女の子の名前呼んでるみたいでちよつとアレなんだつて!!

向こうにもその動搖がちょっと伝わったのか肩をびくんと揺らして一瞬だけこちらに目線を合わせてきた。なんかごめん。

「そ、そうですね。結構積もつて、学校ではよく雪かきしました」

雪かき、都民にはまつたくもつて縁のない話である。東京は寒いだけで雪が降るなんて稀だしなあ。積もらずには消えちやうことだつてあるくらいだし。

うーん、となると大丈夫だろうか。ほら、

「夏とかは気を付けてね?」

「つ！」

「夏は大分暑いからさ、水分補給とかね。無理すると倒れちゃうかもしれないし」「あ、そう、ですね……」

雪の結構積もるともなれば夏はそこまで暑くなさそうな地域（偏見） そうだし、上京してきたとなれば都会の夏を味わうのはこれからが初めてだろう。照り返しとあつついコンクリートはまさに身体が溶ける感覚。あれは都会生まれ都会育ちの人間だつて慣れないのだから割と心配である。

「つと、ご飯の邪魔しちゃつてたね」

「いえ……」

「また暇があつたら話そうね日下部さん」

つと、あんまり長話をしてはせつかくの休み時間が台無しだろう。初対面の男と一緒に休まるものも休まるまい。落ち着かなそうに視線があちこちに動いているし。先ほどからお弁当の中身はあまり減つていなく箸が進んでいないのは明白だ。

そういうところの加減はいくら俺でも知っている。地道に話していくこうかな。せつかく同じ苗字なんて共通点あるんだし。

と言うことで教室の外に出て、俺はとある人物の頭に容赦なく平手を叩き込む。

「あでっ！」

「ばかたれ」

この佐竹と言う奴は加減を知らない男だった。夏とはまた違った熱さの視線を向けてたのだからほんとにこいつはもうな。

「日下部さん、可愛いな」

「なんかぞわつとするからやめろ」

「お前に言つてんじやねーぞ」

「言わんでもわかるからなおさらやめろ」

同じ苗字の弊害はこんなところにも波及していたのだった。頭が痛い。

「私は小鳥遊 ひ……くしゅつ！ た、小鳥遊びかりです……！ 一番最初に言つてお
きたいのは——」

どこぞの吸血鬼パンパイアは運悪く自己紹介中にくしやみをしてしまつたとかなんとか。
彼女を知る人間はあまり多くない。妹か昨日知り合つた男か、どちらかが噂してこう
なつたのだ、と割と本気で考えていて密かに仕返しを決意しているのは別のお話。

デユラハンちゃんとちょっとだけ

「えー……」

「まあそこをなんとか、ちょっと会話してみたいんだけど」「自分で話しかければいいーじゃん」

「まあそうなんだけど」

小鳥遊さんからの指摘に全くもつてその通りと地面へ視線を向ける。だがどうして
もここは小鳥遊さんの力が欲しいのである。

今回だけは別、どうしても小鳥遊さんに間を取り持つて欲しかった。そう言うお話。
「私もあんまり喋つてないし〜? でも頑張つてあげる。貸しイチねつ」
「ぐぬう……」

—

「小鳥遊さんいますかー?」

「お、きたきた! マツチー、この人がさつき言つてた人」

授業が終わって適当に片づけたあと、A組を出て徒歩10秒。そこに小鳥遊さんと件の女子生徒が俺を待っている。と言えば聞こえは良いが本当のところただの顔合わせなのは言うまでもない。

あんまり喋つていないと言う割には遠慮なさそうに会話している二人は亜人同士だからだろう。

ほらほらと小鳥遊さんが俺と女子生徒を交互に見ながらこちらへやつてくる。あとなんかB組内から視線貰いまくつてるのは気のせいですか。

「小鳥遊さんありがとうございます。しかしこれが……」

「あの、どうも町^{まち}京子^{きょうこ}って言います。貴方は……」

「つど^{つど}めんごめん、日下部春明、だよ。これがデュラハンかあ」

短く切り揃えられた髪、快活そうなその顔は同じ亜人^{アジン}の小鳥遊さんと比べても劣らない別方向の可愛さを持っている。あまり初対面の人に思いつくべきではないだろうがスタイルも良さそうだ。

特に目を引くのが本来あるべき場所にない頭と、首があるはずの部分から噴き出る正体不明の煙だろう。そして頭はと言うと町さんご本人がしつかりと手で持つている。

首と胴が繋がっていないデュラハンと言う存在の亜人^{アジン}、昨日調べた限りでは世界に三

人しかいないうちの一人が町さんだつた。

「入学式の時は見なかつたけど……」

「その、風邪で休んでいたんです。実は今日初めて学校来たんですよ」

「あ、なるほど。もう大丈夫なの?」

「はい、なんとか」

幸先が悪いというかなんというか、季節の変わり目だからそれにやられてしまつたんだろうなあ。

「登校の時とか大丈夫? ここつてショルダーバッグだし両手塞がつちやうから」「あ、それは私も思つてるんです。そのうちお父さんが一緒に話し合いしようつて言つてました」

「マツチーは転ぶと大変だもんね、だから雨の日とか特にさ」

なんとなく視線を落とした先、学校指定の手持ちバッグが目に入つて何気なしに尋ねる。何せ頭持ちである、片手で頭を持ち、片手にカバンを持つ。もし手を滑らせて頭を落としたらとか、躓いて転びそうになつたらとかを考えると町さんが使うには向いてないような気が……と、ここまで考えて無神経だつたかなと頭を搔く。

しかし二人は特に何かアクションを起こしもせず笑つてゐる。表情に出してないだけかもしけないけど……」こは甘えどころかな、ごめんね。

「あ、雨の日は付き添つてもらつてるんですよ。自分で良いつて思つたんですけどやつぱり不安だつたみたいで」

「へえ、良い両親じやん！」

「はい！」

良い話だなあ。やつぱり頭が離れてる時点で色々苦労することがあるんだろう。三人しかいないデュラハンでは生活の知恵みたいなのも調べるのは難しいだろうし、ある意味生活が戦いで親子の仲も深まつたんだろうか。

登校ですら危険が付きまとうくらいだし。うーんなるほど、ちょっと話しただけで色々考えさせられる。

「にしても、その炎みたいなの触つてみたい……」

仲良く喋る二人にぼそりとずっと気になつてたことを呟いてしまう。いや触つてみたいけどそれを口にするつもりはなかつた、思わず口から漏れてしまつた。案の定小鳥遊さんは変な目を向けてるし！

「セクハラはいけないとと思うなー」

「ぐぬ……」

あれがどうなつてるかはともかく一応町さんの首から噴き出でるから身体の一部と言えなくもない。それを触りたいなんてまあ、不可抗力だとして攻められるのはしょ

うがない。しようがない、が得意げに小鳥遊さんに言われるとイラつく。

この吸血鬼、その頭にあるでっぱりを鷺掴みにしてやろうか、引っ張つたら面白い反応をくれそうだ。

「あの、別に触つてもいいですけど……？」

「なぬ!」

まさかの本人からオーケー。

おつかなびつくりで手を伸ばし、まさにそれに触れるか触れないかのところで思い出したかのように町さんが補足を加えてきた。

「ただなんて言うんですかね、神経を強い力で押さえられるみたいな感じがして辛いのでちょっとだけつてなりますけど」

「……気持ちだけ受け取つておく。ありがとう」

流石にそんなことを聞いてから触ろうと思う程俺は無神経ではない。伸ばしていた手を引つ込めてお礼を伝える。

いやほんとそう言う事なら断つて全然オーケーだし。そもそも本気じやなかつたからね? なんで小鳥遊さんはその人を蔑むような目を止めような。

「マッチーの優しさに付け込むなんて日下部君つて思つてたより……」

「いやいやちゃんと引いただろ!」

「今は廊下でいっぱい人いるから、きっと放課後になつて誰もいない教室に連れ込んでマツチーの炎を滅茶苦茶にするんでしょ！」

「町さんに俺の間違つた認識を植えようとするのはやめてくれないか!?」「えっと、仲が良いんですねお二人は」

中々町さんは恐ろしいことを言う。確かに良いか悪いかで言えば悪くはない、なんだかんだ毎日会話するようになつたし。けど仲が良いかは別の話。この吸血鬼はちよつと遠慮するとめつためにてくるのを俺は一回経験したんだ。おかげで現在小鳥遊さんの妹に睨まれるハメになつていて。八重歯もう一回見せてと言つただけなのに翌日に妹さんから「姉に迫つたとはどういうことですか」と詰問されるとは思わなかつた。おのれ吸血鬼。

「小鳥遊さんに遠慮したら負けかなと思つている」

「当たりが強すぎて一回話し合いをしたほうがいいかなつて思い始めたわ」

「(はく……楽しそうでいいなあ)」

本人達がわいのわいのと勝手に盛り上がり始めた結果、置いてけぼりをくらつたデュラハンちゃんは二人を羨ましそうに見るのであつた。

雪女さんは意地つ張り

「——と言つことが昨日あつた」

「んで俺を混ぜなかつたしょー、俺も話してみたかつたんだけどなー」

四月にしては気温が高い今日、雲一つないために太陽も容赦なくいじめにかかる。そんな中で体育があるとか殺意を感じるね。

昨日の報告を面白半分に佐竹に言つてみればおつとこいつからも殺意を送られるとは俺の味方はどこにもいらないらしい。

「あはは、でもほんと小鳥遊さんだつけ? と仲が良いよねー」

「何て言うかウマが合つたと言うか、楽に話せる」

「の割には小鳥遊『さん』つてつけてんだな」

「外すタイミングを見失つただけなんだ」

いやマジで。毎日話してゐし同級生だし。ただなんとなくずっと小鳥遊さん小鳥遊さんつて言つてたから改めて小鳥遊なんて言うの恥ずかしいんだよな。

田も混じつていよいよ俺と佐竹の三人で固まることが増えたと思う。俺はちよくちよく小鳥遊さんに呼ばれたり行つたりしてゐるけど。

だからサッカーのチーム分けも俺らは同じチームで固まっている。太田はボールカットが上手かつた。だがその全てを俺に回そうとするのはやめような。途中から俺へのマーク厳しくなつてた。

今は授業の終わり間近で余つた時間を先生の好意で休憩となり、それを消化しているとこだ。各々が自由に過ごしている。

「デュラハンは不思議だつたね。亜人の神秘だな^{デミ}」

「一目でわかるもんねー、あの子」

「……」

「つて佐竹？」

「あれ」

佐竹の声と指が向けた場所はグラウンドの片隅、ちょうど校舎の影になるその場所に顔を伏せて蹲る生徒がそこにいた。と言うかあれは……もしかして日下部さんか？二人とアイコンタクトをすれば領いたのはほぼ同時、佐竹はともかく太田までもタイミングが完璧なのはよつと笑う。

「おい、大丈夫か？」

まずは佐竹。俺と太田はそのよつと後ろに備えて出番待ち。男三人で行くのはちょっと威圧感があるのでどの配慮だ。

佐竹はなんだかんだけちよくちよく日下部さんと話してると、いうのと佐竹のため的な下心も込みだつたりする。最近の佐竹はお熱なんだ。

「えつと、うん平氣」

「いやでもよ……」

平氣と言う割には表情も悪く、立ち上がつたは良いがそのままフラフラとして危うい。佐竹も難しい顔してゐるし、うーんこれやせ我慢なんだろうなあ。なんで我慢してるのがかは知らないけど。

結局そのまま座り込んだ彼女に佐竹も言わんこつちやないと言わんばかりに近くにいた別の女子生徒を呼び寄せた。

「こいつ体調悪いみてーだから、保健室連れてこーと思うんだが」

「わかつたー、日下部さんいこつか」

佐竹もとりあえず着いていくのか日下部さんに手を伸ばした女子生徒の横で腰に手を当てながら二人を見ている。

と、その女子生徒の手が触れるか触れないかの距離で聞こえてきたのは拒絶の言葉をだつた。

「私！」

「雪女だから、冷やせば、大丈夫だから……」

その声の大きさに思わず俺らまでビックリしてしまう。近くで聞いていた二人も当然一切の動作を止めていた。顔を見合わせ、どうすりやいいかわからなって感じ。

と言うか雪女と言うのは……比喩だとしたら面白いが字面まんまと受け取るならば……亜人アミつてことになるが……えー、三人目？

まあとりあえず助け舟は出しておこう、このまま放置して倒れられても困る。

「校庭じやあ冷やすものもないから、大人しく保健室行こうか。うーんと、動くのは辛そうだから……太田！ 担架持ってきて！」

「うん、じゃあひとつ走りで取つてくるよ」

「あの……」

「立つてふらついたんだから大人しくしどけ、日下部の方が正しい」

「それじやあどつちかわからなによー！」

「男の方な」

まさかの当事者置き去りで話は進む。いや、あるいは当事者が大丈夫と言い張るので放置したが正しいのかもしれない。女子生徒もノリノリな辺りこのクラスは良いクラスに間違いない。

その後数分して担架を持つてくる太田は「もう教室の場所覚えたし」とドヤ顔で宣つたのでなんとなく担架の後ろの部分を持たせることにした。俺と女子生徒は横、佐竹は

前。楽な部分を率先してやるのは当たり前だよねえ？

「えつと……大丈夫ですから……わわつ！ 触らないでください！」

「保健室は体調不良の時だけ行く場所じやねーからいいだろ」

「佐竹はなあ、中学最後の方はちよくちよく保健室にサボリに行きやがったからな」

「それは、なんて言うか……佐竹は駄目だつたんだね」

担架に乗せる役目は女子生徒が背後からの襲撃で無事達成。うわーかるーい！とか体温低いんだねーとか。結構言葉も体も抵抗してたけどどこ吹く風、あれこやつもしかして相当図太いのでは。図らずもクラスメイトの新しい一面を垣間見た瞬間だった。

しかしそうか、雪女つて体温低いのか……夏とか凄い触りたくなる……触らせてもらえないかなあ？

「せんせー一日下部さんの体調よろしくないんで保健室連れて行きますねー」

「おう、帰つてくるころには授業が終わつてそุดだからそのまま着替えていいぞお前ら」

「あざーつす！」

「佐竹は言葉遣いしつかりしろー、態度もよくないし頭冷やせよ！」

「余計なお世話だ！ ……お世話です！」

えつちらほつちら、一度乗せてしまえば危ないのを理解してるのが特に抵抗することなく輸送はスムーズに行うことができた、一名様ご案内でーす。

保健室の亜人

「しかし雪女の亜人か
隠しててごめんなさい」

さてさて、保健室に辿りつくと女子生徒は友達とお話の途中だつたらしく「お大事にね」と一言残すと居座ることなく戻つて行つた。今この場にいるのは佐竹、保険室の主こと八千草先生と、二人の日下部の四人である。太田？　俺らと違つて眞面目だから女の子と一緒に戻つたよ。俺達も見習うべきなんだけどね。

シーツで口元を隠す日下部さんに俺と佐竹は揃つてどうしたものかと顔を見合わせる。

「いやそれはいいんだがよ、ほんとに冷やせば大丈夫だつたのか？」

「あ、それは、はい。冷やさなくとも涼しいところにいれば大丈夫なんです……今日はちょっと熱くて日差しも強かつたからそれで……」

「自己紹介の日に無理するなと言つたんだけどねえ……？」

残念ながら俺の忠告は意味をなさなかつたわけだ。今はまだ春ではあるものの、まさか日下部さんが雪女だとあの頃は想像していなかつた。

確かに今日は四月にしてはちょっと熱いし雲も風も一つないもんだからグラウンドは陽射しがきつかった。俺ですらそう思つたのだから日下部さんはそれ以上だつたらう、しかもその条件下で運動したもんね、うん、そら体調崩すわ。

「う……」

「お前はあんまいじめんなつつーの、体験談的にお前の説教は心にクル」

「おお……佐竹ですら心にクるなんて言うとは……ごめんね日下部さん、責めてるわけじゃないんだ、無理はよくないよって言うだけで」

「お前の中での俺はなんなんだよおい」

なんなんだって何度も言つてもバカ繰り返すんだから何とも思つてない鋼鉄の精神を持つてるかと。先生が不憫で仕方なかつたよ……

「先生！ 私1年B組のバンパイアですけどデュラハンちゃんの頭だけ持つてきましたー！」

「なんでそうなつたの!?」

「うおわ!?」

「ヒツ！」

そろそろ俺らも戻りますかねと佐竹と保健室から去るべきドアに手をかけた瞬間だつた、奴がやつてきたのは。

一人は小鳥遊ひかり、説明するまでもなく俺の友達（一応）、そしてもう一人は首だけの町さん。いやホラーだろこれ！ ドアの向こうからいきなり現れたら腰抜かすわ！

日下部さんなんか俺らの声にも驚いて町さん見て体縮こませてるじゃないか！ うん、半分は俺らのせいだね、ほんとごめん。

八千草先生なんかほんと理解追いついてないじやないか……

「ま、町さんか……驚いた」

「す、すげえどうなつてんだこれ」

「佐竹、お前も話くらいは知ってるだろ、デュラハンの亜人デミ、町さんだよ」

「お、おお……えーと、すまん、いやごめんなさい」

「あ、驚かれるのには慣れてるんで大丈夫ですよ」

ううむ、町さんの懐が深い。自分も驚いたから正当化するわけではないが、やつぱり頭だけ持ってきた小鳥遊さんが悪い、悪いたら悪い。

八千草先生はどうしたものかと悩んだ末とりあえず空いてるベッドに町さんを置くことにしたようだ。色々聞いているっぽいが盗み聞きする限りではちよつと体調を崩してしまつたらしくて休んでれば治るらしい（本人談）。

治つたと言つてた風邪がぶり返したのか、油断してたのかな？

「じゃ、私はマッチーの身体の部分をなんとか持つてくるために誰か先生捕まえてきま

す！」

「あ、俺も行こうか？」

「いーよ、日下部君は男子だし、何するかわかんないもん」

「お前の中での俺は本当にどうなつてるんだろうな……」

「なあ、俺もう行つていいか？」

流石に昨日知り合つたばかりの女の子にそんなことしないとする気すら起きないよ……だから町さんも微妙な視線を俺に投げかけるのをやめてくれ、それは俺の心にくる。

そしてお前は帰るのか佐竹よ……、いや俺サツカーしたいしじやねーよ、お前の大好きな可愛い女の子が一人消えてもあと二人もいるんだぞ……

「日下部君は、お二人と知り合いなんですか？」

「ん？ まあさつきの首運んできた女の子、小鳥遊さんって言うんだけどね、入学式の日にちよつと話して以降良く喋るようになつたんだ」

「私は、昨日お友達になつたばかりなんです。あ、すみません私は町京子つて、見ればわかると思うんですけど亜人デミです、デュラハンの」

「あ、私は……日下部雪つて言つて……その……」

掛け布団を両手に持ち、首から上だけを出した日下部さんが伺つてくる。そこから始まるのは亜人二人の顔合わせ、である。

日下部さんの名前を聞いた時に町さんがちらりとこちらを伺うような目を向けてくるが大丈夫だ。

「言いたいことはなんとなくわかるけど町さんや、同姓なだけだよ。あと言いよどんでるのは……」

と言うか日下部さん程の可愛い妹がいたら俺はシスコンになつてゐるに違ひない。

そしてこればかりは俺が言う訳にもいかないだろう、日下部さんが隠してきただし俺から言うのは駄目つてくらいはわかる。と思つてたら日下部さんはさらりと亜人であることを言つていた。もうバレちゃつたし隠すことはないってことなのかな?

「私も、亜人なんです、雪女の」

「え……? じ、じゃあこの学校には三人も亜人が……?」

「とすることになるな、なあ、亜人つて絶対数が少なくて凄い珍しい、んだよなあ……?」

「三人……?」

これは驚き桃の木、と言う訳だ。そしてその三人とお知り合いになつたつて人生解らないものだなあ。入学式の日に小鳥遊さんに話しかけられなければそんなこともなかつただろうに。

あ、もう一人つてさつきの小鳥遊さんね、日下部さんは知らなかつたつけか、あいつ
も吸血鬼の亜人なんよ。

そう伝えれば流石の日下部さんも絶句である、うん、亜人側から見てもほんと珍しい
のねこれ。

日下部春明と生物教師

「と言う訳で持つてきてもらつた！」

「物みたいに言うのやめーや」

それからほぼ間を置かずして小鳥遊さんが後ろに先生を従えて帰ってきた。冴えない雰囲気を漂わせているがよくよく見るとガツシリした体躯、服の上に白衣を纏つてゐるということは……科学の教師かな？

その先生は八千草先生と一言二言交わしてベッドへ町さんの体を降ろすと一足先に保健室から出ていつてしまつた、うん、丁度良いから俺もお外に出よう。

「……えーっと、先生？」

「んお、お前は」

「日下部です、一年の」

「あー、新入生か……」

その先生は丁度保健室の前でしゃがんでいて、なんと言ひかぐつたりしていた。何があつたんだ……

聞けば今まで亜人に会いたかったのだがそれが出来ず、今日立て続けに亜人に会うこ

とが出来て複雑な気分だそうで。やっぱ三人もいるのは珍しいんだな。

「と言うことは亞人について詳しいんですか？」

「詳しい、とまでは言わないが色々知っていることにはなるな。日下部は仲良さそうにしていたが

「入学式に小鳥遊さんに絡まれて友達になりました」

「お、おうそうか……」

「その言い方は酷くない？」

「大体、校門のどこで女の子を熱心に観察してたところを止めた方が良いよって言つただけじゃん！」

うぐつ……そ、そんなこともあつたようないような……

そう言えば彼女欲しいって言つて可愛い子探してたのにあれからまつたく女の子探ししてないな、うーん佐竹と協力して探そうかなあ。

ふと、そこで小鳥遊さんへ視線を向けてみる。可愛いけど、うん。もうちょっと女の子っぽいところがあればなつて。

「日下部……お前つて奴は」

「ちやうねん先生」

「何がだ……ああ、おまえらに訊きたかつたんだがあんま驚かないのな、亞人、珍しいだ

ろ？」

先生の訝し気と言うよりは純粹に気になつたような表情の質問に俺は小鳥遊さんと顔を見合わせ首をかしげる。

まあ確かに珍しいけれどね、小鳥遊さんと仲良くなつてそのあと町さん見て日下部さん見て亜人デミ人はもう三人見てるから、慣れたよね。

「俺はさつきも言いましたけども町さんとは顔合わせ済んでますし？」と言うか、あれ？ 小鳥遊さん言つてないの？」

「あ、うううん……そう言えば言つてなかつたかも」

「？」

「だつて、私も亜人だし。吸血鬼バンパイアだし」

「そ、そ、うか……まさか三人も亜人と会うとはなあ……人生どう転ぶかわからんもんだ」「先生もそう思いますか、吸血鬼バンパイア、雪女にデュラハンもいますもんねえ」

亜人を求めていた先生も二人はともかく三人となると反応に困るらしい、がしがしと頭を搔いて立ち上がつて……そこで止まつた。

「えつ！」

「えつ？」

あれ？ 何かおかしなことを言つただろうか。小鳥遊さんまでこつちを向いて……

ん？ そう言えば日下部さんから話聞いた時に小鳥遊さんいたつけ……？

あ、やらかしたと思った時には流石の俺でも血の気が引いた。しかし今更嘘ですって言つてごまかせるわけでもないし、うん、日下部さんごめんね……

「あ、その、さつきもう一人女の子いたじゃないですか、雪女の亜人らしくて」

「へー、雪女ちゃんもいるんだ……」

「…………」

「先生、三人つて言つてたのに知らなかつたつてどういうことですか？」

「今日から新しい数学の先生が来たんだがな、それが、亜人なんだよ」

おーまいーがー……。と言うことは何か、この学校に四人も亜人が集まつたつて言うのか？

先生も心の底から出したと思われる溜息を隠すことなく吐きだし、小鳥遊さんは凄く面白そうに会つてみたーいと興味を抑えきれないご様子。三人ですらうわーつて気持ちだつたから俺もその気持ちはよくわかる。

「二人そろつて辛氣臭い顔しちやつて」

「いやいや小鳥遊さん、コメントに困るもん四人いるつて」

「亜人つて意外と会えるんだなつて思うとショックと言うかなんと言つうか……」

「この先生、昔亜人に会いたかつたけど会えなかつたらしくて、それでこうなつてるん

じゃないかな」

小鳥遊さんの目が鋭くなつたのを見かねた俺は思わず先生をフオロー。町さんの体を嫌な顔せず持つてきてくれたし亜人デミのことは色々と知つてると言うか会いたいなんて言うくらいだからきつと理解もしてくれるんだろうし、そう言う先生だつたなら俺も色々教えてもらいたいと考えている。

先生も小鳥遊さんの様子に紛らわしい言い方をしたとわかつたのか慌てて「亜人は好きだぞ」と付け加えていた。他人とどう関わって、どのように日常を過ごしているのかに興味があるとかなんとか。

「そう言えばさつきから気になつてたんだけど」

「？」

「センセーって私達みたいなのを亜人つて呼ぶでしょ？」

「ああ」

「私も、と言うか私と日下部君もそれに合わせてたけど」

そこでチラツつと俺に視線を向ける。まあ流石にいきなりデミつて言う訳にも行かないしな、最初からずつと亜人つて言つてたから知らないんだろう。追々教えればいいかなつて。

どうしろと、と言うニュアンスを込めて肩を軽くあげるとノリが悪いと言いたげに眉

を讐めるとそのまましそうがなさそうに続けた。

「そもそも言い方が古い！」

「古いのか!?」

「あと可愛くない！ 教科書みたいな響きだし！」

「まんまつて感じですか、女性の受けはよくなさそうですよね」

「だから若い子とか女子高生の間ではね！」

「亜人^{デミ}って言うの！」

「…………へえ！ 亜人^{デミ}、か」

決まつた！ と言う副音声が聞こえてくるのではないかと思わんばかりの決め台詞、先生は興味深そうに小鳥遊さんを見ていて。

そして俺はと言えば、うん、正直に言おう。見惚れていた。一生の不覚である。

前のめりの体勢でウインクをしながら、人差し指を立てて楽しそうに笑つて先生にそれを教える小鳥遊さんの姿がとても、可愛かつた。

小鳥遊ひまりには勝てない

最近、小鳥遊さんとお喋りする時間が減った。

と言つてもお喋りしない日はないし、なんだかんだ暇な日の放課後は佐竹やら日下部さんやらを交えてわいのわいのしてる、してるんだがたまーにふらりとどこかへ消えているのだ。

「どう思いますひまりさん」

「それを私に訊きに来ますか？ 姉妹だからって全てを知つてゐわけじゃないんですけど……」

気まぐれに入つた図書室にて、伝承系の本を読みふけるひまりさんを見て話しかけてみた。至極眞面目な生徒である彼女は馬鹿騒ぎしてゐからなのかあまり俺に対してもいい顔はしていらない。もちろんその場にいればちゃんと言葉はやりとりしてくれるし、変な言動をすれば窘めてくれる。

仲が悪い訳ではない。なんと言うか、壁みたいなものがあるのだ。まあまだ四月だしき、滅茶苦茶遠慮がなくなつてゐ俺と小鳥遊さんがおかしいだけなのかも知れないけど。

ほんつとうに仕方なさそうに目を閉じ、息を吐いたひまりさんは読んでいた本を閉じた。

「うーん、最近はよく理科準備室に行つてゐたいです。クラスだと日当たりが強いからつて」

「やつぱあんまり日の光は好きじゃないんだ?」

「ええ、少しぐらいならいいんですけどやはりずっと陽射しを貰うのは流石に辛いらしくて」

ふうんと俺は生返事を返して考え込む。これもきっと吸血鬼の一因なのだろう。と言ふことはこれからはもつと大変だ。何せ夏、陽射しと共に気温も高くなるし……

「流石に授業中辛くなつたらいつでもカーテンを閉めてもいいみたいですが、姉は変なところで遠慮と言うかなんと言ふか」

「そんなの気にする人つているんだろうか」

「さあ……」

真実はクラスのみが知る。

ところでこれもいい機会なのでひまりさんともつとお話しをしてみたいと思う。仲の良い相手の妹とも仲良くなつて楽しくしたいのは友人として当然の心得、この真面目そうな妹を姉と一緒に困らせたいという邪な気持ちがないわけでもない。

だが仲を深めようと会話をしたくとも話題らしい話題と言えばひかりちゃんぐらいた
もので、こういう時自分の話題の無さを恨む。

「そう言えば」

会話が途切れた時、ひまりさんが思い出したかのように声を吐きだした。

「最近よく先生の名前が出るようになりましたね」

その声は不思議とよく通つて自分の耳に聞こえてきた。

「へえ……？」

「高橋先生でしたっけ、とても私の事を理解してくれると」

その名前には聞き覚えがあつた。日下部さんが亞人デミだとわかつて、町さんが体調崩して、小鳥遊さんのドヤ顔に不覚にも見惚れた日。

そこで町さんの頭だけ持つて行つた小鳥遊さんの代わりに身体の方を届けてくれた先生がそれである。亞人デミに会いたくてだのなんだのと言つていた。嬉しさよりも一気に亞人に会えて色々考えちゃつたとも。

なるほど、確かに亞人に会いたいと思うならば亞人デミのことを詳しく知つてもおかしくはない。けれどもなんと言うか、小鳥遊さんがここまで言うほどなのかもと思う。

「それはちょっと……羨ましいなあ」

「え？」

「俺は、きっと小鳥遊さんの事理解してあげられてないと思うんだ」

「それは……」

「ぱろりと零れる言葉、それは紛れもなく俺の本心だった。呆気に取られてるひまりさんを後目に言葉を続ける。

「同じ亜人の町さんや日下部さんはあだ名で呼ばれてるのに俺は未だに日下部君だしなあ……俺も小鳥遊さんって呼んでるから相子なのかかもしれない。けれど小鳥遊さんつてあだ名とかつけたら勝手にそう呼ぶから、それがされてないってことはほんとにただの友達なんだなあって」

「ふふ、面白いですね、まるでその先を望んでるみたいで」

向こうが俺に対してもう言葉をしてくれれば俺だって敬称なんてつけないんだけどなあ……そこまで呴いて改めてひまりさんを見れば、手を口に当てて小刻みに身体を揺らして必死に笑いをこらえようとして——堪え切れない笑みが零れて声になつていた。

そんなに笑う事かな、と思つたがよくよく自分の発言を思い返してみれば確かにひまりさんの言う通りである。これは誤解を解かねばなるまい。

「いやいや！ そういう事じやないから！ ……あ、すみません」

そしてあまりに慌て過ぎてここがどこか忘れていた俺はちよつと声が大きすぎたよ

うで、多方面から視線を集めて頭を下げることとなつた。

「とにかく、そうじやなくてね」

「ええ、わかつていますから」

「全然わかつてないよね？」

「いえいえ、ですが一つアドバイスをするならば……」

読んでいた本を持ち、俺の対面に座っていたひまりさんは椅子から立ち上がりつてから一言だけ残した。

「姉は身内から見てもとても魅力的な人ですから、否定しなくともいいんですよ？」

「ぜつてーわかつてないよね！」

このひまりさん、ノリノリである。そして舌の根も乾かない内に再び大声を出してしまつた俺は周囲の非難めいた視線に居心地悪く図書室を後にするのだった。
人間、日当たりは強くても平気だが風当たりが強いのは嫌なのである。

野郎共は語りたい

「しかし佐藤先生だっけ、凄いねえ」

休み時間、廊下で真っ先に口を開いたのは驚くべきことに太田だつた。太田は俺や佐竹と違つて女性にキヤー・キヤー言わないと思つたのだけど。

「あーわかるツ！ 美人な数学教師！ これはたまらねーよ！ なあ！」

両手に拳を作り、身体を縮ませて歓喜を表す佐竹がそれに続き、ボールを投げられた俺はと言えば――

「んー、いや特には何も……」

特にコメントすることがないので興味なさそうにそれを見送つた。

「ああ、それで日下部はビックリしなかつたんだね」

「はあ？」と信じられないものを見るような顔で見られた俺は事前に佐藤先生が赴任することと亞人デミであることを知つてたのだと伝えると二人はなるほどと頷いた。

そもそもからして既に三人の亞人デミを知つてているのだから、そんなに驚く必要はない

思うんだけど、それは俺だけなのだろうか。

「いや、どつちかつつーとよーまた亜人かよ!!

つてどこだな、悪い事じやねーぞ？」

ああ、言いたいことはわかる。ほんとに亜人つてこの狭い学校に四人もいる程絶対数は多くないからなあ。

それが何をどう間違ったのか生徒に三人、そこに先生が後からもう一人とやつてきたのだからきつと亜人アメニ好き人間が見れば羨ましくてどうにかなってしまうんじやないかな。

「んー、でもそれだけじゃないよね？」春明は

ふと、太田がそんなことを言つたのがきつかけとなつた。日下部さんがいることもあり二人は既に俺に対して呼び方を苗字から名前へと変えている。俺もその方が間違えなくて済むので楽である。

「は？」

「ああ、確かにおめーは佐藤先生で騒ぐ前にいい相手がいるもんなあ？」

「そうそう」

「隣のクラスに、いーい感じの相手がよー？」

……オーケイ理解した。目の前の二人は俺が小鳥遊さんにそう言う気持ちを抱いて

ると、そう言いたいんだな？

楽しそうに口の端を上げた二人には少しわからせてあげなければなるまい。両手をグーにかたどつて、太田と佐竹に一発ずつ軽い一撃を落とす。

殴ることはないとの抗議も聞き流し、努めて優しい声で子供に言い聞かせるように話しかける。それに、俺をそう言うネタでいじくると言うならば俺は佐竹に対しても反撃出来るんだからな。

「友達だよ友達、二人の下衆な勘ぐりは的外れってわけだ。ところでそんな話題を出すつてことは太田はともかくとして佐竹は反撃にあつても文句は言えないよな?」

「なんのことだよ?」

「日下部さんがいるじゃあないか、ええ? 最近ずいぶん積極的じやないか」

そうやつてカウンターを食らわせると佐竹は目に見えて狼狽し——いやいやあんだけお近づきになろうと奮闘してゐるのにそこ狼狽えるところじやないだろう。太田もそんな佐竹の姿がおかしいのかやれやれと首を振つていた。

いいやいやそんなつもりは一切ねーからとは彼の言だがつつかえながら言つたソレに説得力などあるわけもなく。いいから吐いちまえと二人の共同攻撃に耐えられず、やがて単純に仲良くしたいだけなのだと語つた。

「日下部は亜人デミだつたら? ちよつと余所余所しいのが気になつてたからよー、だからこれからはかんけーねーつて誘つてやろうかなと」

「ふうん……」

「ま、ほどほどにね佐竹」

何か事情があるかもしれないからねと注意だけ飛ばす。太田の言う通りだと俺もそれに頷く。まあ好きにやればいいとは思う。やりすぎればそりや駄目だけどな。

「ま、日下部さん泣かせてみろ、その時は俺と太田で……こうだぜ！」

「そうだね、佐竹より日下部さんの味方をする方が男だし」

「おいおい脅かすなって……」

軽く腕を振りかぶつて佐竹に殴りかかるモーションを取る。それに太田も加わり佐竹は一步、二歩と後ずさる。なお俺らはノリノリで止める気がない模様。

三、四、五、六……やがて曲がり角に到達し……

「やべつ、止まれ佐竹！」

「ん？　おつ」

「あつ」

気付いたものの警告は間に合わなかつたようで、運悪く曲がり角の先から出てきた人物と軽くぶつかつてしまふ。

謝ろうと思つたもののぶつかつた瞬間、佐竹が凄い勢いでそちらへ振り向きそのまま数秒が経つ。やがて沈黙に耐えきれなかつたかのように相手が

歩いていくと、その後ろ姿を見つめた佐竹がポツリと零す。

「なんかめっちゃエロい人に当たつた気がしたんだが……気のせいか」

「何だその具体的な感覚！」

おまえらコントしてる場合か。とは言え、その感想はとても正しいものだろう。上下ともにジヤージを着用し、髪は後ろにしばつてそのまま垂らしているその人はつい先ほど話題にしていた美人な数学教師の佐藤先生その人である。

さて、感想は正しいと言つたけどその理由を教えよう。

「ああ、佐藤先生はサキュバスの亜人デミだからなあ、地味な格好してるのはそのためだつて話だ」

「ああなるほど」

「こ、これがサキュバスか……すげーな……」

サキュバス。

女性の夢魔を指し示すとされるとそれは悪魔の一つでその性質からなのか美男美女が多く、そのくせ自分を着飾つてしまふと無意識に誘惑してしまふのだとか。着飾つてそれなのだから直接触れてしまつたらどうなるか……と言うのは佐竹がたつた今証明しちゃかりだ。

それらの特性故に色々と問題もあるようなので佐藤先生を知つてからなんとも言え

ない気持ちになる。教師になるまでどれほど苦労したのかなど考えも及ばない。

「浮気が佐竹」

「いやいやいや、日下部とはなんもないって言つたよな!? ……いや佐藤先生めっちゃ美人だけどきつとドキドキしすぎて精神もたねーってあれは」

ちょっと茶化すと割と生々しい答えが返ってきて一人そろつて沈黙することとなつた。

そんな感想を貰つてもコメントに困るわ!!

デミちゃんは誰が可愛いのか

亜人デミが四人もいる、と言うこの学校。

そろそろ学校に慣れてきた今ではその四人へと目を向け始め、ちょくちょくではあるが話題に上がり始める頃合いだ。俺らも先日佐藤先生に関して話していくたし、ちよつと耳を傾ければ一日一回は誰かの名前を聞くこともある。四人は容姿も良いので特に男子は目が離せないのでないだろうか。

「亜人デミってみんなあんなに顔整ってんのかなー」

「まあ整つてもおかしくはないね……」

ちなみに今日も三人で集まつては話題は亜人デミのことである。しようがないね、話題性に富んでるし。

「いや～……亜人と言えば町もいいよな～!! ボーカルシチュな見た目と裏腹に乙女!
頭に目が行きがちだけどスタイルもいい！」
「うんうんわかる」

毎日喋れば話題もなくなるだろう。だがそれは少し先の話であり今日はまだその時ではない、何が言いたいかと言うと誰が一番可愛いかと言う話になつた。

こういう時の佐竹はとても生き生きとしている。虚空へと視線を走らせ、手を握つたり解いたりしては大げさな身振りと共に台詞を吐く。これを別のところで活かせればなあと思わなくもない。

「でもやっぱり佐藤ちゃんかなー！ 隠れファン急増中！ 亂れた姿を是非拝んでみたい！」

「そつちもいいよねー！」

あとはこう、もうちょっと欲望を抑えてくれればいいのだけど。とは言え健全な男子高校生である俺らも口には出さないだけで佐竹の言うことに否定を唱えることはできない。すっげーわかるからだ。佐藤先生を佐藤ちゃんなどと呼んでるのはこの際置いて、ちょっと触れ合つただけでの有様なのだからいやあほんとその先となるどうなるか想像もつかない。

「さつきから頷いてるだけだけど太田はどうなんだよ」

「え、僕？」

「そーそー、俺や春明ばつか語らせといておめーは全然言わねーじゃん」

「うーん、でもほんとに今はそんな二人を喜ばせる話はもつてないよ、なんせ女子とあんまり話せてないしね、二人が早いだけ」

ちよくちよく日下部さんを運んだ時に一緒だつた女子生徒と話してゐるのを見かけてるんだからな、それだけで俺らが喜ぶ話になるんだぞ。

もちろん俺はそれを口にすることはない。ちょっと話してゐるからつてすぐに恋愛ごとに結び付けるのは小学生のことだからだ。この間そんな小学生じみた真似を俺はされたけどな。

「ねーねー何の話してんの一?」

おつと、渦中の亜人(デミ)である一人の御登場だ。小鳥遊さんは楽しそうに俺達の顔を見て、ほらほら話しちゃいなよーと肘でつついてくる。

「ん? ああ学校にいる亜人の魅力について話してたところだ」

「ほくほく、ねえねえ! わたしはわたしはほくほく!」

多分この瞬間の三人の意見は一致したと思う。両手でピースしてそれを横向けに構えながら前かがみで返事を催促するその様は俺だつてうわあ……と思うくらいなのだから他二人は推さずとも知れる。

見ろ、佐竹の先ほどまでの輝いていた目が今ではだるそうに鈍くなつてゐるではないか。手をシツシツと追い払う様に振るうと、

「ごめん、話逸らさないでくれる? 今真面目な話してゐるからよ、空氣読んで?」「話題変えたつもりはないんだけど……」

思わず同情する程ばっさりと切り捨てた。うん、どんまい。

さきほどまでの勢いはどこへやら、肩を落とした小鳥遊さんだけどそのまま返すのもアレなのでちょっとくらいフォローはしておこうと思う。

「まあまあ佐竹、小鳥遊さんだって充分可愛いじやあないか」

「お、おう……」

こいつはいきなり何を言い出すんだと言わんばかりの佐竹の反応は軽くスルーしておく。一度口を開けば、するすると言葉が出てくるのが自分にとつても意外だった。

「四人の中で一番明るい性格、笑うと少し見える八重歯、金の糸とも言うべきさらさらな髪、他三人に劣らないんじゃないか、な、あ……？」

「…………」

うん、こういう時どんな顔をすればいいかわからないの。

太田も佐竹も溜息ついてるし、小鳥遊さんは固まってるし、え？ 何？ 僕何もして

ないよね？ ちょっと可哀想だったから思つた事言つただけだよ？

「さ」

「？」

「さ、さすがにそこまで面と向かつて褒められると照れる、かなあ……」

顔はこちらに向けているものの制服の袖で口元を隠し、顔を仄かに赤くしながら視線

だけ別方向へと向ける小鳥遊さんの反応に、うん？と首を捻りながら自分の発言を顧みる。

…………おつとお確かに思つてたことを述べただけだけどべた褒めだあ、これは周囲に人がいる時に言う事じやなかつたなー……なかつたね!!

「い、いやすまん！他意はなかつたんだ！」

「他意があつた方が私としては、うん……恥ずかしくなくて良かつたんだけど！」

「じゃあ他意があつたつてことにしといてくれ！くそつ！そこは小突いてくるところだろ!!」

何故フォローしただけでこんなに恥ずかしい思いをしなければならないのか、これがわからない。

ちらりと二人を見れば佐竹も太田も生暖かい目をしてるし、こいつらほんと他人事だからつていいよな。元はと言えば亜人アメニで誰が一番可愛いかなんて話しだした佐竹のせいだろうがよ……覚えてろよマジで。

「はいはいラブコメはそこまでにしようねー」

「してない!!」

「そろそろ授業始まっちゃうから、戻ろう」

いやこれもうしばらく小鳥遊さんの顔見れないでしょ。向こうもこつち見ようとし

ない——あ、今こつち見た。そうすると俺も小鳥遊さんを見ていた関係上視線は交錯する訳で。小鳥遊さんは一瞬だけ交錯した視線を慌てて地面へと落としていた。
いやほんとなんでこうなつたんだろうな……わからないわ、しばらく小鳥遊さんとともに話せなさそうだ。

小鳥遊びかりと話せない

さて、ここ数日ギクシャクしつぱなしである。

誰と、と言えばもちろん小鳥遊びかりと、である。フォローしようと口を開けば少々そのフォローが過ぎたようで、それから数日を経た今でも話そうとすれば目も合わせてくれないし言葉は途切れ途切れになるしでまともに会話にならない。日下部さんも町さんもひまりさんも当然ながら何があつたのかと——ひまりさんは何をやらかしたんだと表情の消えた顔で——問い合わせられ仕方なしに件の事件を白状した次第。

日下部さんや町さんは佐竹が俺に向けてきた生暖かい目を向けてきたし、ひまりさんは私はわかつてますよアピールなのか慈愛の笑みを浮かべるして弁明に終始することとなつた。

「それもこれも佐竹が悪いんだよ！」

「その言葉、何回目なんですか」

ガンッと壁を蹴りながら八つ当たりの言葉を吐く。そこまで強く蹴つてないので足の痛みはない。うん、俺の迂闊さが招いたことだからね。

にしても意外だつたのは数日も後を引くことであつた。いやあ小鳥遊さんの性格か

ら一日か二日経てばはいおしまいかと思つてたんだけどねえ。そこんところどう思うよひまりさん。

そう言えば彼女はとても難しそうな顔で考え込んだ。

「姉はあまり自分の容姿を褒められることに慣れてないんですよ」

「えつうつそだろ、まあ小学校の頃はともかくとして中学なんてほら、女子のグループとかさあ、あと男子だつて可愛い子を気にし始めるだろ?」

ちなみにソースは俺と佐竹。受験なんて地獄が始まる前はほんと誰々が可愛い、いや誰々の方がなんて話をしよつちゅうしてたものである。もちろん恋心などではなく単純に見たままの感想的な意味で。

「そうですけど、男子はそれを直接本人に言うことなんてほとんどしないでしよう?」

「うんまあそうだけど、小鳥遊さん程となると告白とかさあけつこうされたんじゃないの?」

「そのような話は少なくとも聞きませんでしたし、姉に彼氏が出来たなんて話もありませんでしたね」

「そりやまた……」

うーん、モテていたかどうかわからぬとは。仮に告白されてたとしてもフツたのかな? でもひまりさんすら知らないとなるとなー。わからない。

「ところでひまりさんはどうなのよ？」と言つてみればまあそこそこにはと何とも曖昧な返事を頂いた。そこのつてなんやねん。どうせ彼氏いないんでしょに。

「とにかく！」

「はい」

「そんなんだからまああんなストレートに言われてビッククリしてるんじやないですか？ああ見えて姉は言葉が本心かそうじやないか判りますから」

「そりやあまた、機嫌を損ねた時が大変だな……」

「ええ、それはもう」

何を思い出したのか知らないがうんざりした顔に苦労してるんだなあと同情する。

それよりはいつになつたら小鳥遊さんが戻るかが大事だ。いつまでもああなられるところちらが調子狂う。

「ふふ、でしたら姉に直接聞いては如何でしようか」

「それが出来る空気だつたら良かつただけどねえ？わかる？露骨に俺から視線逸らしてるんだよ小鳥遊さん」

しかも会話が長く続かないの。ちょっとしたらうん、だのそうねだのさつき聞いたからその言葉。

そんなんだから俺が他の亜人ちゃんやひまりさん達に事の発端を一から十まで説明

^{デミ}

するハメになつたんだよ。

「ですがその姉、後ろにいますけど」

「んふふふ、どうだつた？ どうだつた？ 流石に二日目からは演技だつたよー!!」

「こいつ……」

いつから俺の後ろにいやがつたんだ、と言いたくなるのはさておき悪戯大成功とこちらを嘲笑う小鳥遊さんはいつものウザいテンションを発揮、芸術のように俺のイライラを高めてくれる。

「ねーねー、ちゃんと話せなくて寂しかつた!? 寂しかつた!？」

「ひまりさん、こいつの頭ぐりぐりしていい?」

「ええどうぞ」

「お姉ちゃんを裏切らないで!? 痛い痛い!! あ、これ結構本気だ！ ゲメンなさい！」

こつちだつて割と真剣に悩んでたんだぞ馬鹿野郎め。小鳥遊さんの頭を握った両手でぐりぐりとしながらそんな恨みも乗せていく。俺のことをからかつた分くらいはやつちやつたつていいよね？ いやいいはずだ。

この際、ひまりさんの顔の方は見ないでおこう、絶対俺が突つ込みたくなる顔してくるから。

「反省した？」

「したした！ したからぐりぐりやめて！」

「よろしい」

「本当に、遠慮ないよね日下部君」

こちらを恨めしそうに見る小鳥遊さんには悪いけど、あんだけ綺麗にからかわれればやり返しを厳しくなるというものだ。恨むならば自分の行動を恨むがよい。

さて、無事解決したようだしそろそろお暇するとしますかねえ？ いや放課後だしね。帰つてゲームやりたい……

「じゃあ一緒に帰ろよー！」

「お、いいね。最近は誰かさんのせいと一緒にすることもなかつたし」

「ええ、姉の下らない仕返しのせいですね、わかりますよ」

「ちくちく攻撃してくるのはやめてくれないかな……？」

え？ 佐竹のせいじやなかつたのかつて？ いやいや何の話かわからないなー。

じゃあバッグ取つてくるー！ と小鳥遊さんが走り出せばこの場には俺とひまりさんの二人が残る。ああよかつたと安堵の息を吐けばひまりさんは意地の悪そうな笑みを浮かべて俺をからかってきた。

「良かつたですね？ 姉と元に戻れて」

「小鳥遊さんじやなくともわかるぞ、今のひまりさんからは他意しか感じられないわ」

日下部春明は盗み聞きする

「日下部！ よかつたら今度の休み遊びに行かね？」

「えつ？」

「あー、誘い方アレだけどどう？ 日下部さん」

気怠い午前の授業を終え、空腹状態から回復した昼休み。俺と太田を引き連れトリオと化した佐竹はその目で日下部さんを見つけ、休日のお誘いを試みていた。

見てる限りではとても成功しそうにないのだが、そんなことを佐竹が気付くわけもなくこと俺も申し訳程度の援護射撃に留める。

「い、いや……私はいいよそういうの……」

「いいじやんいいじやんたまにはさ！」

「ほんとに大丈夫だから私は」

保健室での一件以来、日下部さんはより一步距離を置くようになった。ちゃんと会話をするし、時には昼食を一緒に締めることもある。けれどそれは『クラスメイト』と交流するような感じで『友達』とわいわいがやがやするようではない感じなのだ。

佐竹はこの通り押しが強い。それは良い方向に働くことが多いが今の日下部さんに

はマイナスだろう。波風立てず断りたい日下部さんもどうしたものかと困っている。

「バ、バめんねー！」

結局、逃げるよう走つていった彼女に三人で顔を見合わす。うーん、だめかあ、と。ぐいぐい行き過ぎな佐竹を窘めようと口を開こうとして——軽い声と共に後頭部に軽い衝撃が走る。

「どうつ」

「あたつ」

「てつ」

「ぐえつ」

どこぞの誰だそんな事をしやがったのはと後ろを振り向けばそこには白衣を纏つた生物教師、テツ先生がファイルを肩に立てて何とも言えない表情で見下ろしていた。凶器はそのファイルで間違いないだろう。

短い沈黙と共に佐竹が不満そうにその所業へ至つた理由を聞くも先生から告げられた理由はとても理不尽なものだった。

「オレが日下部に話しかけようと思つたのに……まつたく」

「おい教師」

「そんな八つ当たりみたいな理由で……？」

「とんでもねえなこの人……」

「まったくだ。俺も思わず敬語が取れるくらいにはツッコミどころしかなかつた。けれどそれなら納得だ。テツ先生は亜人^{デミ}好き生物教師、過去には亜人と会いたくて色々模索したものの結局会えず、それが今年になつて一気に四人も教師として勤めている学校に現れたのだからショックが先行するくらいの人間。亜人^{デミ}だと発覚した日下部さんと雪女について話したいとなるのは当然のことだろう。にしたつて俺らを叩くことはないと思う。

「……いやな？ 実は何度か日下部に話しかけてたんだが悉く逃げられてしまつてな……」

「放送とかで呼び出したら流石にくるんじや……？」

スマンスマンと欠片も誠意の籠つてない謝罪を横に流しながら太田が言うも、個人的に聞きたいことで強制するのはなあと首を振つていた。うん、職権乱用だからねえ。あと放送で一個人が先生に呼び出し貰うなんて奇異の眼差しで見られるしなあ……日下部さんつてそういう視線苦手そうだし。

そのまま先生は何かを考えてるのか目を閉じ、うんうん唸つては時たま上下に首を振つて難しそうな顔でブツブツと独り言を呟いていた。なんなんだこの先生……

「なんかブツブツ言つてる……」

「テツ先生変わつてゐるよなー」

そこは二人も同じ意見だつたようだ。まあ嫌いじゃないけど、と付け加えた佐竹に俺も否定はしない。

なんだかんだ悪い先生ではないのだ。授業も解りやすいから楽しい、最近亜人デミに聞いて話をしたりするけど嫌な顔もしないし。そう言えば先生には亜人デミについて色々聞きたい事あるし、今日の放課後もちよつと訪ねてみようかなあ……

「んー、と、あの先生そもそもどこにいるんだ?」

午後の授業はあつという間である。ちよつと、うんほんとちよつとね? 夢の世界行つたりしたけどね?

そう言う訳でテツ先生を探そうと思つたのだけど、事前に何も言つてなかつたから理科準備室にいるかもわからぬ。あつちへふらふらこつちへふらふら。どこにも見当たらない。うーん帰るかね。

そう諦めた時、視界の端に白色が過る。それを目で追えば階段の向こう側へと見慣れ
た白衣が消えていく。うーん、テツ先生かな？ 違つたらまあいかとそれを追いかけ
ることにした。

階段を上りきり左へと消えた先生を追いかけ声をかけようとして——その歩みを止
める。

「ここからでも聞こえる怒声、その声には聞き覚えがあつた。

「アンタ達、他人の陰口ばっかり言つてるんでしょ！ やめなよそう言うの！」

ちらりと顔だけを壁から覗かせると先生と……日下部さん？ 二人がいて、小鳥遊さ
んの怒声。これだけでも察せる奴は察せる。

「確かにユツキーは亜人アメだけど！ 関係ない！ アンタ達に文句を言うのはアンタ達に
文句を言いたいからよ！」

小鳥遊さんが怒つている相手は、日下部さんの悪口を言つていたのだろう。それが先
生か小鳥遊さんか、日下部さん本人がたまたま聞いてしまつたんだ。それできつと、こ
うなつたのだろう。

相手は誰だかわからない。小鳥遊さんに気圧されてるのか、相手の大きな声はなく小
鳥遊さんの声だけが響く。

「相手を煽つて、はぐらかそうとするな！」

単純に凄いなと思った。あんな風に自分の気持ちを通すのは、俺には出来ない。波風立てず、俺が例えその時の現場にいて悪口を聞いてもなかつたことにするに違いない。断言出来る。それに反応して変な地雷を踏んで、学生生活が滅茶苦茶にされるのが俺は嫌なんだ。平凡でいいからいつも通り過ごしたいんだ。むしろ、逆らえない相手が悪口を言つていて同意を求められたら絶対頷く。本人がいない場なのだから大丈夫と上辺を取り繕つて。

だからこそ、次に聞こえてきた言葉は深く、俺の心を抉ることとなる。

『みんながやつてるから』なんて理屈……私は嫌い！』

そうしてちょっと間が空いてから、日下部さんがトイレの中へと歩みを進めて、小鳥遊さんが目元を赤くしながら出てきて。テツ先生が小鳥遊さんを追つて行つて。こつちへ来なかつたのは幸運だつた。どんな顔をすればいいか、ちょっとわからない。

そこから動けたのはその後日下部さんと二人の生徒が出てきてからだ。鉢合せしたらまずいと逃げるよう階段を下りた。

日下部春明は恋愛相談する

「えっと、ちょっと待て」

「はいなんでしよう」

「もう現在まで追いついているみたいだが……どこで本格的に惚れたんだ?」

「ははは、テツ先生、そのトイレでの一件に決まってるじゃないですか」

「全然そんな余裕なさそうだが!?」

回想御仕舞い。と大きく息を吐きだした俺に先生は容赦ないツツコミを炸裂させた。

「え? と思うも思い返してどこにも不思議な要素はない。

「だつてそんなインパクトある描写はなかつただろう」

「いやいや、『単純に凄いな』ってちやんと言いましたよ俺は」

「確かにそうは言っていたがお前……それだけじゃないだろう、ほらキビキビ吐け」

「やめて! 中年のおじさんが食い気味に前倒姿勢で顔を近づけないでください!」

「嬉しくない!」

それはさておき、この先生はお見通しだったようだ。無理があるかなあと自分でも

思つてたのだから仕方ない。決め手なのは確かにこの件だ。そして俺が吐いた心中も解決していなく、あれから数日の今でも俺はぎこちないままで、また何かあつたのかと怪しまれています。

「その、盗み聞きしてその後、帰つて色々考え込んでしまいました」

愛想笑いを浮かべて肯定も否定もしない。その場面を当事者に見られた時、そいつはどんな気持ちになつてしまふのだろうと、自分は肯定も否定もしてないから大丈夫なんて卑怯じやないのと小鳥遊さんに怒られる気がした。

小鳥遊さんとの関係はとても心地よいものだから、嫌われてしまつて口も利いてくれなくなつたら毎日つまらなくなるなどか、亜人達と仲良くなつたのにそれは嫌だとか小鳥遊さんの言う事ほんとごもつともだなどか。

「随分と悩んだんだな」

「そりやあもう寝れないくらいには。で、なんで嫌われたくないんだつて考えまして」

そもそも盗み聞きしてたことなんて誰も気付いてみたいだつたしね。あの一件をなかつたことにしていつも通りに接すれば波風立てず万事解決。悩みもなくなつて結果オーライ。なのだけど……

「その、小鳥遊さんには嫌われたくない、やま疚しい気持ちを抱きたくないって。隠し事なく対等に接したいんだなつてわかつたんですよ」

「ほう」

「あー、その、それでですねえ……」

「なんだろうこの羞恥プレイ、先生とは言えおっさんに向けてこんな心中を吐露するなんて経験したくなかった。

「それで、その、なんで嫌われたくないのかって考えるとですね……はい」

「くくく……お前も、青春してんだな」

とても愉快だと堪え切れない笑いを漏らす先生。それはとても面白くなく、おじさんめと憎まれ口を叩くしか反撃ができない。

来客用かと思われる黒い椅子の背もたれに背中を預けつつ、やつぱりこの教師に相談したのは間違いだったのではないかとの疑念が膨らむ。いやいや、でもそれを結論付けるにはまだ早い……

「まあなんだ、アドバイスをしたいと思うが……お前は亜人デミとどう接するべきだと思う？」

「え？ それは……そうですね、何かあつた時に亜人デミであることを理由に特別視しないようにする、とか？ 亜人は個性デミ、ですけど同じ人間などと考えようかなと」「ふむ……」

唐突な質問に俺は少し考える。答えを聞いて黙り込んだ先生に何か間違っていたの

だろうかと不安になつた。

やがて口を開いた先生は、どうにも言葉を選んでいるようだつた。誤解や勘違いをしないように注意してくれると言うべきか、お前の考えも間違つてはいないなと前提を置いたうえで。

「日下部、亜人は亜人だぞ。^{デミ}亜人であるからとさまざまに決めつけをするのは良くない。しかしながら、^{デミ}亜人だからこそ生じることもあるんだ」

「それは……」

「あいつらは確かに人間なんだ、そこに更に『亜人』^{デミ}という個性が入る。同じ人間だと考えていたら、^{デミ}亜人だからこそその悩みや理由に気付かないんだ」

「……」

「俺から言えるのはな、人間としての面だけじゃなく、^{デミ}亜人としての面からも考えろ、それをないがしろにしちゃあいけない。そこを気を付けろってことだけだ」

なるほど、一方向から見ても気づけないこともある。俺は今まで出来るだけ他の人と同じ様にと考えていたけれど……これからはその場その場でどう対応するか考えなければいけなくなつた。

「だけど先生、それってとても難しくないですかね？　俺達は亜人じやありませんし、^{デミ}亜人の苦労もわかりませんから」

「ま、そこは手さぐりだ。オレだつて全てを知つてゐるわけではないからな。大事なのは『わかりません』で終わるのではなく、そこから理解してどう生かすか、だ」

「こちらを真つすぐに見るテツ先生の目はとても真剣で、先ほどまでのおっさん臭い雰囲気など微塵も感じさせない真摯な空気を纏つていた。

理解する事、か。果たして俺はそれが出来るのだろうか。いや、出来るか出来ないかではない、やらないと俺はこの想いを伝えられないのだからやるんだ、絶対。

「ありがとうございます先生」

「何、教師の役目だからな、これくらいなんてことないさ」

「お礼に小鳥遊さんを名前呼びしてゐる事実には目を瞑りますね」

「余裕はなさそうだな……」

俺だつてほんとは名前で呼びたいのだ。しかしづつと名字で呼びっぱなしで、それを変えるのは自分の気持ちを自覚した今となつては恥ずかしいんだ。絶対素面じや言えない。つつかえて不自然になること請け合ひだ。

「ま、なんだ応援してゐよ。上手くいくといいな？」

「もし成就したら先生に一番先に報告しますね」

「ああ、来るのを楽しみにしてるよ」

取り急ぎ、ぎこちなくなつた態度をもとに戻さなきやね。

佐竹裕介は遊びたい

お前らに伝えたいことがある！ と意気込んで太田と佐竹に俺、小鳥遊さん好きだわーと伝えたら二人揃つて知つてたと綺麗にハモつた返しを頂いた。

「流石の俺でもわかんだよなー、バレてんじやねーか？」

おい冗談は止めてくれ佐竹。

「この間のほら、亜人アメニが可愛いって話の時とかね、あれはわかるでしょー」

ブルータス、太田もか。ははは、冗談だよね？ そう言えば二人はまた揃つて首を横に振る。嘘やん……

この分だと小鳥遊さんにはバレていないと祈つておくことにして、その妹であるひまりさんは察してると考えていいだろう。ただでさえこの前からかわれたばかりだと言うのに、これからどのような扱いを受けるか身体が震えてくる。

「ま、そんな宣言するつてことはよー、もういいのか？」

「へ？」

「いや、最近お前の態度ちょっとおかしかつたろ、さつきのことでの悩んでんのかと思つたんだが」

あ、あー……そうだね、でもそれについては割り切った。少なくとも露骨なまでの举动はもうしないだろう。

人間、一つのことの整理がつくと他の事もなんとかなつたりするんだなつて実感している。

「それに関しても大丈夫。お騒がせしましたって言つておくよ」

「そいつは何よりだぜー、これで俺も相談が出来る。日下部がな、俺の誘いにいつまでも乗つてくれない件についてなんだが」

「あんまりしつこい男は嫌われるよ佐竹……」

「い、いやこれでもな？ ちゃんと頻度は考へてるんだぞ？」

この佐竹、俺に氣を遣つていたらしい。

それを仇で返すような気がして悪いけど、そこは太田に同意しよう。頻度を考へてるつて言つたけど、何度も誘えばそれは鬱陶しく感じるんじゃないかな？

それとなく言つてみれば、そうなのかとがつくしと肩を落とす。そこまで落胆されると言つたほうが悪いみたいじやないか。

「佐竹、日下部さんは悪い人じやないから」

「それは知つてんぞ」

「あつはい」

間髪入れずに首肯するその姿は感動すら覚えた。

と、昨日テツ先生からアドバイスをもらつたそれは何も小鳥遊さんだけではない、
亜人デミに関して全てに言えることだつたのだから、それを佐竹に教えてしんぜよう。

「佐竹よー、もしかしたら俺らの遊びには気軽に応えられない悩みとかあるかもしね
いだろー? だからあんまりやるのはやめとけって」

「……」

「なんだよ」

「お前つてそんなキヤラだつたつけ?」

「そんなに、俺の拳が欲しいのか……」

「悪かった」

まあなんだ、俺が言いたいのは決して断つてる訳じやないよつてことだ。

多分、きっと。本当に嫌ならキッパリと断るタイプだろう、日下部さんは。

その理由まで推し量るのは流石に難しいが、ひよつとしたらひよつとするかもぐらい
の確率で亜人デミであることが関係しているかもしだれない。そうだとすると気軽にいいか
ら行こうぜと誘うのは、精神衛生上よくない。

そんなことを丁寧に言うと、考えていなかつたと頭を抱えていた。

「俺、嫌われてないよなー?」

「まあ会話はしてくれてるし大丈夫じゃないかな」

「うーん、佐竹に習う訳じやないけど、春明本当にどうしたの？」

「太田あ！……いやな、テツ先生に色々相談したらそういう風なこと言われたんだよ」
凄くためになることだつた、間違いないね。あの話を聞かなければ、きっとどこかで致命的な間違いをしてた気がしてならない。悪気のない一言だからこそ深くその人に傷を与えることだつてあるのだから。

「じゃあ何で悩んでるのか考えようぜ？」確かに日下部つて雪女だよな？」

「雪……うーん、冷たい、寒い？」

「一応漫画とかだとこう、ぶわああああつて口とか手から吹雪出してるけど……」

「日下部になら俺は凍らされてもいいかもしねーな」

ああでもないこうでもない三人で考えても答えは中々出てこない。遂には佐竹が世迷言を言うまでで、何の話をしているかわからなくなる。

とりあえず佐竹の頭を綺麗な音がなるくらいに叩いておくと、抗議の声を無視しつつ黙り込む。

「やっぱ何か体質の問題じやないかなあ？ それ以外に考えられないよ」

「ひよつとしたら男だけつてのが苦手なのかもしんねーな、次は小鳥遊とか一緒に誘つてみつかー」

やがてほぼ同時に二人が声をあげ、俺はその手があつたなと佐竹にしては冴えた考えに珍しく、あいつを褒めた。

うむ、佐竹は誘う時に他に誰にも誘つてなかつたもんない……少なくとも俺や太田のどちらかか両方を連れていた。俺らの見えないところで誘つてたりはしてたかもしないけれど、しかし頻度は抑えていると言つてたしあまりそれはなさそうだ。

「良く思いついた、お前の頭は足りないと常日頃から思つていたけどこういう時はほんと相手のことを考えて良い作戦を出すから憎めないな」

「褒めてるけどさらりと馬鹿にしてるのは俺でもわかるからな、拳が欲しいなら素直に言えよ」

「ま、まあまあ……」

テツ先生へ相談した翌日、その日の話がこれである。これ以降佐竹のお誘いはピタリと止み、小鳥遊さんが佐竹を心配し始めるのだが、それは別のお話だ。

日下部春明の買い物付き添い

「は？ 買い物？」

「そーなの！」

今日も今日とて世界は平和だ。目の前で親から買い物を託されてげんなりしてゐる小鳥遊さんを見ると心からそう思う。

おそらく買う物が書かれたであらうメモを片手でひらひらとさせてゐるが、ちらりと見れば、そこにはビツシリと文字の羅列があつて結構な荷物になることは想像できた。「ほんとはひまりと一緒に行く予定だつたんだけど、どうにもクラスの用事があるらしくて……」

「ああ……ひまりさんが学級委員の手伝いをしてるつて言つてたけど、それかな」「そーなの！ 普段はこんなことないんだけど、よっぽど忙しいんだねー」

……果たして本当にそのなのだろうか？ まだまだ短い付き合いだけど、ちらほらと姉想いの一面を見せるひまりさんがいくら学級委員の手伝いがあるからと言えど、おつかいを姉に任せつきりにするだろうか。

漠然とした疑問が浮かぶも、これは同時にチャンスでもあつた。ここで颯爽と名乗り

出る事によつて好感度を上げられる。好きな女の子と放課後を一緒に帰り、スーパーでメモを片手に荷物持ちをしつつ家まで送り届ける。

それに、損得勘定抜きにしてもここで小鳥遊さんを放置しては、それがひまりさんに露見した時どうなるかわからない。

「あ、じゃあ俺が」

「だから日下部君に手伝つてほしいなつて」

「もちろんです」

思わず即答した。

最後の方と返事が被るくらいには食い気味だつたため、小鳥遊さんが不思議そうな顔をしているのはまあ目を逸らそう。

それはさておき、やつたー！ と両手を挙げて喜んでいるので、相当憂鬱だつたのだろう。うん、一人で持つには本当に文字が詰まつていたもんね。

「あ、でも」

「ん？」

「日下部君は用事とかないの？ 無理に付き合わせても悪いし……」

「ないです」

申し訳なさそうにこちらを伺つているが大丈夫。有つたとしてもこの場合、大抵その

用事は無かつたことになるので心配しないでほしい。

夕方のスーパーと言えば歴戦の主婦でごつた返すイメージがある。けど小鳥遊さんに連れられて入ったお店は、沢山人がいるものの買い物を投げ出したくなるほど混んでる訳でもない、丁度良い感じの店だった。

カゴを持つ役目は当然、俺。誤解無きように言つておけば、小鳥遊さんがメモを片手にカゴを持つたところを良いカッコしたい俺が奪い取った。

そこまでさせるつもりは小鳥遊さんに無くとも、俺はある。問題は俺の力があまり強くないことだけど……一度言い出した手前、こうなれば意地あるのみだ。

「レバー肉は……これくらいでいいかなあ」

セール対象品！ と黄色のシールが貼られたパックを三つほどカゴへ投入、ついでとばかりに近くにあつた別の肉も突っ込まれ、この時点でカゴは一つが埋まり、二つ目へと突入していた。もちろん、これも俺が持っている。満杯のカゴを持つ右手が痛い。もしかしなくとも、家族全員分だこれ。もうほとんど終盤とは言え、俺の意地は崩壊

寸前よ！

「んー、やっぱ片方持つよ？」

「いやほらこれ全然つ余裕だから」

嘘です。きついっす。

「日下部君つてあんま嘘が上手じやないよねー、いいからいいから！　付き合わせた上にカゴ全部持たせるなんてカツコ悪いじやん！」

なんのことだか、と目を逸らしている間に二一つ目のカゴをぶん取られてしまった。我ながら情けないとと思うけど、小鳥遊さんはすつきりしたかのようにカゴを携え、意気揚々と次の売り場へ向かう。

どうやら気に病ませてしまつたようだ。カツコいいところを見せたいのは俺の我儘で、小鳥遊さんにとっては引っかかるつて嫌だつたらしい。

「でもありがとうねー、一人じや絶対無理だつた！」

「家族全員分だよね？　ひまりさんがいても辛かつたと思うけど」

「ひまりはああ見えて、他の子に比べたら力あるんだよねー……」

「マジ？」

「うんマジ」

本人の与り知らぬところで女の子としては微妙な評価を、実の姉から暴露されたひま

りさんに心の中で合掌しつつ、食パンを指して小鳥遊さんのカゴに放り込む。これで最後かな。

「結構お肉あるよね？」

「肉つてよりレバーがねー、ほら、バンパイア私吸血鬼だからだと思うんだけどしょっちゅう血が足りないような感じになつてね」

「ああそれで」

貧血にはレバーがいい、みたいな話は俺も知っている。造血作用？ だつたかな？ それならば納得。まさか本当に人から血を吸う訳にもいかないだろうしな。

レジにカゴを二つ、俺が先に入つて後ろは小鳥遊さんだ。お金を払うのは小鳥遊さんだから、お会計を済ませる内にサッカーレジへ持つていく。ちなみに袋詰めはまだしない。上手い袋詰めの仕方を俺は知らないからね、下手に詰めてダメにしちゃ悪いし。

「あ、お肉はこつちに全部詰めちゃうね、これはそつちかなー」

「ほいほい、あ、食パンはそつちのがいいよな？」

「ん、そうだねー」

量が量だけに時間はかかるものの、小鳥遊さんの指示もあつて袋詰めはスムーズに進んだ。最後にレジ横へカゴをぶち込んでお仕舞い!!

「いやー助かつたよーありがとー！」

「どーいたしまして」

「じゃ、私の家行こつか！」

「えつ」

「えつ」

正直に言うと失念していました。確かに袋四つも持てないよなあ……

固まつた俺に小鳥遊さんが不安げにこちらを伺うが、単純にそこまで意識を回してなかつただけなのでもうちよつとだけ待つてほしい。

すーはーと息を吐いて、とりあえず平常心で。

「そ、それじゃあ、お邪魔します」

「まあちよつと歩くけどねー」

ちよつとつつかえた。小鳥遊さんはまつたく気にしてないようで、袋を持ったままノリノリで拳を作っているけど、俺はちよつと恥ずかしかつた

ああ、この緊張もなかつたことにしたい……

小鳥遊ひかりを話したい

「けどいいの？ 家まで行っちゃって」

「へーきへーき！ マツチーだつてもう呼んでるんだし！」

夕暮れの道のり、両手にかかる重さもこれから行く場所を考えれば気にならない。な
れない、と言つたほうが正しいけど。

「いや、町さんは女の子で亜人^{デミ}じやん……俺男だよ？」

「それなら先生もこの前來たし！」

心配しすぎだよ、と言いたげにケラケラ笑つているが、俺は町さんでもなければテツ
先生でもないのでそこはどうなのよ。

俺が緊張してゐるものもあるけれど、まだ四月の終わりなのに異性の家にお邪魔するつて
早すぎじやないだろうか？

「友達を家に招くだけなんだからー」

「そんなものなのか……？」

まあお買い物のお手伝いだし、何か不都合があれば尻尾を巻いて逃げてしまえばい
い。

別に何も身構える必要はないとかつてはいる。けれどこうして緊張しているのはこれが、俺にとつての一大イベントだからだ。経緯はどうあれ、好きな人の家にお邪魔するなんて数か月くらい早いイベントだと思う。

小鳥遊さんの家はいたつて普通の一軒家だつた。白塗りの二階建て、表札は漢字の下に線を一本引いて TAKANASHI。たーだーいまー！ と元気よくドアを開け放つ小鳥遊さんに続いて控えめな声でお邪魔します。挨拶は昔から大事、初めてなら尚更。

小鳥遊さんの声に釣られて奥から出てきたのは、白髪が似合つている眼鏡をかえたダンディーなおじさんだつた。ちなみにエプロン装備で、何か家事をやつていたんだなとわかる。

「おかえりひかり……おや？」

「友達連れてきた!!」

「連れてきたなんて言つてるけど、そのお友達の両手には買い物袋がぶら下がつてゐるみたいだね？」

「ひまりの代わりに手伝つてもらつた！ ひまりは委員会のお手伝いでどうしても手が離せないんだって!!」

「ほーう……あつと、立ち話で彼を待たせてはいけないね、君、娘を手伝ってくれてありがとう、お茶を出すからあがつていきなさい」

「あ、はい、お邪魔します」

どうやらお父様だつたようです。

荷物もいい加減重たさを感じるようになつたので、お言葉に甘えて靴を脱ぐ。適当に整えたあとに小鳥遊さんの後に従者の様に付いていく。

リビングに着けば買つてきた荷物は全部小鳥遊さんが入れるとのことでの、本当はそれも手伝うと言つたのだけれど、そこまでは申し訳ないと断られてしまった。

なので適當な椅子に座つて、テーブルに肘をついてリビングをちらちらと見て暇を潰すこととした。

しかし、父親が出てくるとは意外だつた。てつきり母親か、共働きで誰もいないと思つていたからだ。そこは深く考えなくともいいところだろう。

「はいお茶」

「あ、ありがとうございます」

横にお茶の入つたグラスが置かれ、向かいに小鳥遊の父親が座る。ちょっと話相手になつてくれるかい？との言葉に断る理由もなくうなづいた。

「ひかりは友達って言つてたけど、名前を聞いてもいいかい？」

「日下部 春明、です」

「日下部……？」

「あ、亜人の日下部さんはたまたま苗字が一緒なんです」

「おお」

「小鳥遊さんのお父さんも日下部さんのこと知ってるんですね」

「それはもちろん、娘と同じ亜人だからね。日下部さんのご両親とは、話をしたことがありますよ」

亜人ちゃんの保護者同士の連絡網、と言つたところか。色々苦労することもあるんだろうし、そういう意味では亜人が生徒に三人もいるというのは本人や両親達にも、何かあつた時のために真っ先に頼れる相手として安心できるのだろう。

「そうだ、学校でのひかりはどうかな？」先生から聞いてはいるけど、同じ年から見て、ちゃんとやつてると思うかい？」

「俺は同じクラスではないのでそこまで詳しくは言えませんけど……」

「おや、そうなのかい？」じやあ言える範囲で良いから、何かある？」

俺がクラスは違うことはとても意外だつたようで、少し間を開けてから、それでも何かと言われ顔を逸らして考え込む。

改まつて何か、と言われると何を言えばいいかわからない。あ、でも言えと言うならば、

「町さんや日下部さんと、とても楽しそうにしますね」

「ああ、それは高橋先生も仰ってたね」

「それによつと混せてもらつてますけど、元気を貰つてますよ」

「ひかりがうるさくしてないといいんだけどね？」

「あはは……大丈夫ですよ」

まあ若干、若干ね？ うるさい時もあるけれど、大体はちゃんと限度をわかつていてやつているから平氣です。ちゃんと線引きもしてくれてるし。

あと言うならば、やはりこれだろう。コップに入つてお茶で喉を潤し、軽い音を立てて置く。

「あとこれは本人には内緒にしてほしいんですけど」

「うんうん！ 何かな！」

これは本人に聞かれたくはない。どうやら食材を入れ終わつた小鳥遊さんは着替えるためにリビングから出ていつたらしく、ナイスタイミングと声を潜める。お父さんの方はノリノリで声を小さくして——このテンションは親子だなあ——「ちよつとある事に遭遇しまして、それについては詳しく言えないんですけど、とても強い

芯を持つてるなつて」

「ほう？」

「だから尊敬できる人です、とても」

「そうか！ そうかそうか！」

ちよつと恥ずかしくなつて目を逸らす。そんなに嬉しそうにされると言つた方も無性に恥ずかしくなつてしまふではないか。

「いやあ、嬉しいね。娘の良い話を聞けると言うのは。ひかりが降りてくるまで、もうちよつと話をしてもいいかな？ 今度は私が話すことになるけれど」

親から見た小鳥遊さん、それは俺も気になる。答えはもちろん、「ええ、もちろんです。聞かせてください」

小鳥遊浩二は突つ込みすぎる

「その時のひかりったら傑作でね、ぜーつたい嫌だ！　なんて言つて離してくれなかつたんだよ」

「その場面を想像すると微笑ましいですねえ……」

「そりだらうそりだらう？　親の蠶殻を抜いてもひかりは可愛くてねえ」

「いい加減にしてよ！　私の横で恥ずかしい話するのやめてくれない!?」

「何を言つているんだひかり、恥ずかしい話なんて一つもしてない、私にとつては大事な話だ」

「そうそう、小鳥遊さんや、家族の思い出は大切だ」

「本人の、私が、恥ずかしい思いを、してるんだけど？」

小鳥遊さんが抗議の声をあげるものの、俺とおじさんはどこ吹く風。途中でお茶を注いだり注がれたり、まさかの意気投合で昔話は結構続いていた。

ちらりと時計を見れば、お邪魔した時より一時間は過ぎている。来る前に緊張していた自分？　そんなものは消えたよ。

「俺は有意義な話が聞けて満足している」

「私は不満しかないんだけど？」

「そこは価値観の違い、かな」

「血を見たいならそう言つてくれればいいのに」

「のーせんきゅー」

ぐつと拳を振り上げた小鳥遊さんには、流石の俺も空気を読む。結構容赦ないからね、保護者の前でも小鳥遊さんなら、俺をパンチングマシーンに見立ててくる確信がある。それは流石に勘弁願いたい。

「お友達とは、仲が良くて何より」

「ええ、小鳥遊さんとはいつも楽しくお話をさせてもらっています」

「その割にはちよくちよく失礼なことを言つてくるよね？」

「友情の裏返し的な？」

張り手で真っ赤に腫らすわよなんて言われますと、俺の方はごめんなさいをするしかない。

おじさんはそんな様子をニコニコと、お茶を片手に、本当に楽しそうに眺めていた。
そしてその場を堪能しながら、ふと気づいたのか、

「お互いに敬称が付いてるのは不思議だねえ」

「えつ」

「えつ」

「息もピツタリだし、うーん、なんで二人はお互いを『小鳥遊さん』、『日下部君』なんて他人行儀な呼び方をしてるのかなア」

——なんでも何もタイミング逃しました。

小鳥遊さんはと言うと、おじさんの言葉にきよとんとするも、「んくく」と間延びした声を響かせたあとに俺の方を向く。その表情を見れば何を言いたいかわかる。そういう言えばなんでだろうね? つてね。

「うーん、私はいつでも変えていいけどー、でも日下部君が変えないままだとねー、温度差あるみたいになるから」

「だ、そうだよ春明くん」

「うーん、じゃあ試しに呼び方変えてみますね」

変えると言つても敬称を取るだけだ。苗字の敬称略なんて友達が出来たころからやつていたことだつたので、特に何の労力も必要ない。

「小鳥遊ー」

「はーい、なにかな日下部ー」

「なんでもないでーす」

ほらこの通り。

打てば響くようとはのこと。小鳥遊さん——小鳥遊の返事に軽く頷き、どうでしょ
う？ とおじさんへ得意げに笑う。

完璧なやりとりにおじさんも満足しているのか、温かい目で俺達を見ていた。うんう
ん、仲が深まる瞬間はいいねえと誰に向かって言つているのわからない台詞を添えて。
ただまあ、次に放つた一言は余計だつたんじやないかな。

「じゃ！ 今度は名前で呼んでみよう！」

「は？」

この人つてもしかして踏み込みすぎるタイプか。思わず素の返事をしてしまつた俺
は悪くない。

小鳥遊も流石に予想していなかつたのか、「それは口の出し過ぎだつて！」なんて怒つ
ている。うん、俺もそう思います。流石にさつきまでさん付けしていく相手を名前呼び
するには、ちょっとばかり俺の気持ちがもたない。

ましてや小鳥遊は絶賛片思い中の相手なのだから、なおさらだ。

「おおつと、ごめんね。中々息の合つたやりとりをするものだから、つい、ね」

「はあ、そう、ですか」

「おとーさん、そういうところはちょっと抜けてるの」

不満そうに言う小鳥遊の表情に、前科があるということを察せて同情した。それでも父親を嫌つていらない辺りが、良い家族だなあと伝わってくる。

「ごめんごめん」と謝るおじさん。前も同じやりとりをしたと小鳥遊が言えば、何年も前の話じやないかなんて返す辺り、おじさんはデリカシーがある方ではないらしい。

「ただーいまー」

「おや、ひまりが帰ってきたようだね」

「んつと、結構長居しましたね、俺もそろそろ帰ろうかなあ」

「ふむ、ちょっと話しあぎたかな? 重ねて言うけど、ひかりの手伝いをしてくれてありがとう」

「ありがとー! えへへ!」

「友達のお手伝いぐらいどーつてことないです」

「これは紛れもない本心であり、しかし一部であつた。小鳥遊のためならこの程度、手伝いですらない、声をかけられた時点での回答は Yes かはいか、そんな話。

軽いお辞儀をするおじさんに俺も軽く頭を下げ、ひまりさんと入れ違いになる形でリビングを出る。

「あ、やっぱり居ましたか」

「なん……だと」

「すれ違いざま、こちらを見て意地の悪い笑顔を浮かべたひまりさんに足が止まつた。
『やつぱり』と彼女は言つた。まるでここに俺がいるのを予想していたように。どう
いうことなのか。いつの間に小鳥遊はひまりさんへ連絡していただろう。
「姉から連絡は貰つていませんよ。けれど、日下部さんがいなかつたら、クラス委員のお
手伝いが徒労に終わつっていました」

この時、俺は学校で浮かんだ疑問が綺麗に解消された。何かおかしいと思つていたが
つまりは、そういうことだつた。なんでかは知らないが、この妹、一芝居しやがつた。
そうだよな、あんな沢山の買い物があるのに放課後に予定を入れるわけがない。い
やあ、原因がわかつてスッキリした。

「最近ちよつときこちなかつたみたいなのでこうしましたが……どうでした?」
「あ、ごめんそれもう解決済みだから」

「……はい?」

すみません、そんな能面みたいな表情しないで貰えますか。俺が勝手に気まずくなつ
て勝手に解決したんですすみません。

「今度、何か奢らせていただきます」

「ファミレスのパフェで許しましょう」

「はい」

その程度でひまりさんの機嫌を直せるならいくらでも奢ろうと思う。

【幕間】 小鳥遊家は語りたい

「そうだひかり」

「ほ？」

一家四人で夕食を囲みながら、父親の小鳥遊浩二は、レバニラ炒めをつづいている娘のひかりに気になっていたことを聞いた。

「今日連れてきた男のお友達だけど」

「……へえ！ ひかりが男を連れてきたって!?」

途中まで喋つて、浩二は隣にいる人物に台詞を遮られた。

彼女は一人で小鳥遊一家を養う大黒柱、浩二の伴侶は二人の娘のこととなると、仕事を部下に任せて飛んで帰つてくるくらいには親バカだつたりする。

食い気味の母親にひかりは心底嫌そうに顔を顰め、浩二にふざけるなど言いたげに頬を膨らませて抗議の意を示す。

「友達だよーと・も・だ・ち！」

「それでも今まで男友達は連れてこなかつただろう？ 今ビックリしてると私は」

彼女の言葉は心の底からそう言つっていて、実は浩二もそれには同意していた。

確かにひかりは友人を作るのが上手いが、それにしたつてまだ進学して少し経った程度。同性の友人はともかくまさか異性の友人を呼びこむとはと、顔には出さなかつたが帰宅を迎えた時は驚いていたのだ。

「そう言えば私も気になつてたけど、どうしてお姉ちゃんは日下部さんを頼つたのよ」「んー……マッチーはずっと頭持つてゐるし、ユッキーはちょっと距離を置きたそうにしているから、こういう頼み事つて出来ないから……」

「でもクラスの女子の友達とかいるでしょ？」

「いや、ちようどそこに日下部がいたし。まあクラスの女の子に頼むのも悪いかなーつて、だから元々日下部を探してたの」

「なるほど、あれ？ 日下部さんのこと、呼び捨てにしてるじゃない」

「え？ うん、成り行きで！」

「飯を食べながら双子の娘は会話を咲かせ、それを見て娘の母親は楽しそうに「名前は日下部と言うのかー」と記憶を刻んでいる。

浩二から見て、今話題に出ている日下部という少年に関しては良い印象を持つている。やはり娘の話に付き合つてくれたことが大きい。ひかりが気を許してゐるものあつて、ついつい熱く語つてしまつたがそれに嫌な顔をせず、それどころか楽しそうに続きを促したのだから。

「その日下部、という少年とここまで仲良くなるなんて……惚れたかい？」

「お母さんはすぐそつちに持つていきたがるんだから！ 違うって!! ……うーん、私も不思議なんだよねえ……」

「お姉ちゃんとあんなすぐ話せるようになつてるのは私もビックリした」

「これがウマが合うつてことなのかなつて」

なるほど、と浩二は頷く。漠然と呟かれた娘の言葉がすとんと心に落ちてくる。二人の会話を思い返すと、確かにそんな感じだつたなど。

このあと我が家の大黒柱が更に根掘り葉掘り聞いてくるため、普段より食事の時間が伸びたことを追記しておく。

「と言うことがあつたんですけど

「さいですか」

小鳥遊家にお邪魔した翌日、ひまりさんが唐突にそんな報告をしてきたので反応に

困った次第。

どうですどうですか？ と言われましても、あ、そうですかとしか返せない俺を許してほしい。

「よかつたじやないですか、姉に『ウマが合う』なんて言われて」「いやまあ嬉しいけどさあ……」

「そんな微妙そうな反応してますけど顔ニヤけてるからね」

H A H A H A 、 n i c e j o k e ……あ、鏡見せないでください自分でもわかつてますからハイ。

「けどひまりさん、よく小鳥遊が俺を頼るつてわかつたよね」

「え？ ええ、町さんと雪さんはお姉ちゃんが言つてた通りですし、クラスの女子よりは日下部さんが方が男つて意味でも頼りやすいって姉なら考えるかなと」「よくそこまで読めるわ……」

「双子ですから」

それでもすげーよ。

まあ、なんというか、小鳥遊に頼られるつてのは嬉しい。小鳥遊の困つてるところを助けるのは自分もやる気が出るし、お手伝いの体で一緒にいられるし。

「大丈夫です、私は日下部さんに協力しますから」

「……な、何の話ですかな？」

「そんな露骨な誤魔化しは、自白と同じですよ」

「いやいや」

「姉のこと、好きなんでしょう?」

「しー! 声がでけえよバカ!!」

一瞬時が止まつた。次いで、ここが学校の廊下であることを思い出して、思わず口を手で塞いでしまうまで一秒、どちらかと言うと、そのあと俺の声の方が大きかつたりするけれどそれに気付く余裕などない。

周囲が何事かと俺達の方へと視線を集め、それで冷静になるまでが二秒、ひまりさんに思いつきり睨まれて腕を叩かれるまでが三秒。いやでもいきなりそんなことを言うひまりさんも悪いと思う。

「いきなり何をするんですか!」

「まあ落ち着け、変なことを言うひまりさんが悪いんだ」

「だからって女の子の口を手で塞ぐのもどうかと思いますけど!?」

そこはすまんかったって。

「……やっぱりひまりさんには気付かれちゃうか」

「確証はありませんでしたけどね? 今の反応でわかりました」

「こいつ今度は力マカけやがったのか。そんな力マにまんまと引っかかって悔しい反面、いつも開き直つてひまりさんを味方に付けることが出来て、幸運だつたとも考えられる。

悔しさ一割を含ませて「よろしくお願ひします」、「ええもちろんです」と鈴の音のような声が帰つてくる。

「つてかいいの？ 大好きなお姉ちゃん取られちやうけど」「みなさいん！ この人がー！」

「俺が悪かつたああああ！！」

最後にちょっとした反撃をしたのは、藪蛇だつたようだ。

亜人好き教師と語りたい

「この屁理屈亜人^{デミ}好き教師———ッ!!!」

「それは否定しないが——！」

叫び声を響かせながらテツ先生へと背を向けて走り去るひまりさん、それに愕然としながら否定しきれない先生。どうしてこうなったのか。

いやね、さつきまでは良い雰囲気だったんだよ。先生がめっちゃ先生してて。

——ひかりは人から血を吸いたい気持ちはあるがパックで我慢している、またバンパイアの性質を上回つてなお臭いの強い食べ物が好き。そう言つた『人間性』があいつのバンパイアらしさであり、人間としての個性だ。

——「らしさは生まれ持つた『性質』ではない、『性質』を踏まえてどう生きるか。それはひまりさんからテツ先生へ向けた疑問。バンパイアという亜人^{デミ}の性質にばかり目を向けていて、姉自身のことはどう考えているのかと。

テツ先生は真面目な空気を感じ取ったのか、自分の考えを丁寧に伝えた。

——『亜人^{デミ}の性質』だけ見ていると個性を見失う、『人間性』だけ見ていると悩みの原

因に辿り着けない。どつちも大切だ、バランスが大事なんだ、そう俺は考えている。先生はそう締めくくつて、俺とひまりさんは二人そろつてその言葉を噛みしめていた。何も言えることがない。いやほんと凄いなって。

流石テツ先生、学生時代から亜人に興味があつたのは伊達じやない。亜人の家族であるひまりさんが何も言わないのでだから、それがどれほどか俺だつてわかる。ただまあ、そのあとがちよつと締まらなかつただけで……

「で、先生」

俺もちよつと先生にお話し、したくなつたんだ。ひまりさんに問い合わせられてる時、恐る恐る俺の方も見ていてから先生もわかつてるのは間違いない。

だけど俺は先生に恩がある、だからちやんと聞くぐらいはしないといけないとと思う。

「小鳥遊をハグしたこととは？　襲つたことについて弁明は？　今ならまだ通報は勘弁しますから」

「違うんだつて、ほんとに……誤解なんだ」

「誤解とは？」

「ちゃんと全員ハグしたんだ！」

「明日教頭先生にチクリます」

「違う！ 元々小鳥遊が私だけハグされてないって言つて抱きついてきたんだ！」

「それも羨ましい！ やっぱり教頭先生に言いつけてやる!!」

小鳥遊が、自分から抱きついてきた。なんて夢のような体験をしてやがるこの教師！
そのタイミングだけ俺と代わってくれよ！

本音が漏れてんぞ！ とテツ先生が叫んでいるが俺には知ったことではない。うご
ごご、テツ先生がそんなことする訳ないとわかってるからこそ！ 小鳥遊からハグしに
きたつて事実が！ 姦ましい!!

「それより日下部」

「なんですか？」

「日下部はどうなんだ？ ひまりさんの話聞いて」

「……実を言うとそんなこと考えてなかつたんです」

いや本当に。最初は確かに亜人デミだつて認識はあつたし、変なことを口走らないよう
しないとつて意識もあつたんだけど、最近はそれがなくなつていて。ただ小鳥遊ひか
りつて女の子とペラペラ喋つて恋して、ちょっとドキドキしたり？

そんなことを言つてみるとテツ先生はそうか、としか返してくれなかつた。

「えつと、いけなかつたですかね」

「悪い事じやないがな、ただ、絶対に『亜人の性質』も頭の片隅には入れておくといい。

そうすれば普段気付けないことも気付けるはずだ

「わかりました。意識して出来るといいんですが……」

「ちょっとずつでいい、ひかりとしての魅力と、バンパイアとしての魅力、二つが合わされば……もっと好きになれるだろう？」

「……亜人つていいですね」

ドヤ顔で宣うテツ先生。確かに、ただでさえ可愛い小鳥遊が「あ、こここの仕草つてバンパイアだからかな」とか。陽射しが苦手だつてのは知つてるけど、それでぐつたりしてるところとかバンパイアの亜人デミでいてくれてありがとうつてなるもんがあ。

他だと……あ、吸血衝動とかつてあるらしいし、その時なんか我慢してゐるなーとかわかつたら微笑ましいよね。そこでちょっと我慢できずに甘噛み風にかつぶりしたらと考えると……あ、これはいい。欲を言えればかつぶりされるのが俺だつたらなおよし。

「…………い、もどつてこーい！」

「は！」

「だ、大丈夫か？ 軽く意識が飛んでいたみたいだが」

「いえ、ちょっと噛まれたいと思つただけです」

「……それ、本人の前で言うなよ？」

「え？」

「バンパイアの纖細な理由だ」「は、はあ……」

理由はよくわからないけど先生が言うならまあ、そうなんだろう。変な事を言つて小鳥遊の好感度が下がるのは嫌だし。しかし纖細な理由とは一体なんぞや。

まあいざれはこう、噛みつかれて、血を吸われる感覚を体験してみたいんだけどね。好きな人に血を啜られるつて本当、想像がつかないんだけど。

「ああそうだ」

「まだ何か?」

「ひかりのこと小鳥遊つて呼ぶようになつたんだな」

「先生は良いですよね……いつも名前で呼べて」

「呼び方なんてどうでもよくなテいか……?」

「よくないです! この屁理屈亞人デミ好き教師!」

「勘弁してくれ……!」

佐竹裕介は舞い上がる

話をしよう。特別な話じやがない、一人の友人の話だ。

佐竹裕介は、日下部雪と一緒に遊ぼうと誘いを出し続け、その度に断られて、それでもめげなかつた。

何度も何度もアプローチをかけ、それでも断られ続けて、そしてある時、日下部雪の抱える特殊な理由が関係してるのでないかと仲間内で話になり、そこからは佐竹も自重することにした。

そんなことがあつた過去、そして今、佐竹の夢は成就することになる。

「佐竹君!!」

「……日下部?」

息を切らせた少女が無駄話をしている俺達へと叫ぶ。そんなに火急な用事なのだろうか。

しばらく息を整えている雪女の少女に、三人は焦ることもなく言葉を待つ。

「その、今更になつちやつたけど、前に私が倒れた時、すぐに声をかけてくれてありがとう、お礼を言うのが遅れてごめんなさい」

「お、おうそんなん気にすんな」

「あ、あと何度も遊びに誘つてくれたのにそれも邪険にしてしまつてごめんなさい。それで……」

それは過去のことへの感謝と謝罪。佐竹はそう言えば何も言われてなかつたなと気付く、つまりそれくらいには気にしてなかつたのだ。

お誘いだつて、純度百パーで、助けたんだからちよつと遊ぼうぜなんて片隅にも考えてなかつたわけで。

「こ、こんど、遊びに行かない？ カラオケとか……」

それはさておき、こうして佐竹はこうして日下部さんからお誘いを受けることとなつた。

「お、おお、いいけど……その、良いのか？ ズつと断つたのは何か理由があるからと思つたからなんだけどよ……」

だからこうなつて嬉しい反面、今までと正反対の展開に、もしかして無理をしているのではないかと佐竹は心配になつた。

見ていた感じ悪い奴じやない、心根は優しい女の子なのだから。もしかしたら断り続

けるうちに良心が痛んで無理にでもなんてことだつたら、自分自身も楽しめない。

「あ、それは、そうだつたけど……大丈夫！ 解決したから！」

「……そ、そうかっ！ ならいいぞ！ カラオケでもなんでも……つつつつしやあああああー！！」

だがそれは佐竹の杞憂であつた。悩み事はもうないのだと、とびきりの笑顔を佐竹に向ける。見惚れるような美しさのそれに佐竹は凍つたかのように動きを止めた。

雪女なのだから、人ひとり凍らせてることなんてわけないってことだろう。

しかしいち早くそれから復帰すると、ぐつと膝を曲げ、その場で飛び上がる。喜びを隠さないのが佐竹という人間の性格だった。

と言うのが今日あつた出来事。まあ佐竹の喜びようは、玉碎していた回数の一部を間近で見ていた俺達は納得だ。

日下部さんが去つたあと、未だに喜びに浸る佐竹に太田と二人で拍手しながら、おめでとうなんて言葉を送つて、そのまま放置しておいた。

多分あれ、しばらくそのまで復帰に時間かかるだろうなーつて予感あつたし。教室への帰り道、横合いから聞きなれた声が飛んできた。

「あ、ちょうどいいとこにいるじゃんー」

「ん？ おつ、小鳥遊か」

「今度暇？」

「今度つて何時？」

「明後日、放課後にマッチーやユツキー達と遊びに行くんだけど、よかつたらどうかなつて」

明後日……放課後は基本暇だから大丈夫かな。もちろん、何か用事があつても小鳥遊の誘いを断るなんてよほどのことがない限りはあり得ない。

答えはもちろんイエス、「じゃあ明後日、下駄箱の前集合ねー」と手を振りながら小鳥遊は予鈴と共に慌てるようC組へ戻っていく。

「なんか、誘うタイミング重なつてない？」

「……ん？」

言われてみれば確かに、太田の言う通りだ。と言つても日下部さんは何時かまでは言つてなかつたし、まあ被つても別にいいだろう。

まさか佐竹もサシのデートだと思つてるわけじやない……じやないよな？ いやあ

いつの浮かれ具合だとなんか不安になってきた。

「うーん、まあ仮に被つたとして、春明は小鳥遊さんと遊ばないなんて選択は

「しないしない」

「だよね……即答するくらいだもん」

「あ、太田はどうする？」

「あれ？ いいの？ 僕も行つて」

「そりやあお前、小鳥遊さんとのデートならともかく、日下部さんや町さんも来るんだし、小鳥遊だってマズければ俺が一人のところで誘うだろ」

「なるほど……じゃあ一緒しようかな」

「こつちもこつちで重症だ……なんて呟きは聞こえないことにする。何、某国曰く恋と戦争では手段を選ばないらしいしこれくらい、大人しい方だろう。

まあ、もしそうなつた場合は佐竹を慰めて昼飯奢るくらいはしようかな……

「なんで……」

佐竹の絞るような声が響く。

「なんでお前らがいる……！」

まるで赤点取つたらお小遣い減額よと言われた後のテストで見事真っ赤な点数を取つた時の如く、佐竹は擦れた声で俺と太田を睨みつける。

「まあその、なんだ、小鳥遊から誘われてな……」
 はい、見事に被りました。この場には俺ら三人組と亜人ちゃんズの三人、あと知らない二人がいて、その二人は亜人デミちゃんズとわいわい話している。

「僕は春明に誘われて」

膝を曲げ、腕をだらりと下げた佐竹の姿に涙を禁じ得ない。こいつ、もしかしなくてもデートだと思っていたのか……：

亜人デミちゃんズから今日は楽しもうねーなんて歓迎されているのが余計に哀愁を誘う。その時に精いっぱいの笑顔で応えたあいつを誰か褒めてやつてほしい。

「今度飯奢るよ佐竹……」

「ああ、デートなんて嬉しい夢だった……」

人の夢と書いて偽り。頑張れ佐竹……

二人はなかよし

「小鳥遊、最近良い事あつた？」

「あ、わかる？」

えへへ、と笑う彼女。この間皆でカラオケに行つた前辺りから妙に機嫌が良く——主に日下部さん辺りを見て——そう思つた次第。

「うん、日下部さんが小鳥遊や町さんのこと、名前で呼び始めたでしょ？　だからそれ関連かなつて」

「せーかいつ！　詳しくは言わないけど、私達親友になりました！　的な」

「今まででは？」

「友達だつた、かな？」

「さいですか。日下部さんも小鳥遊を「ひかり」、町さんを「京子」なんて楽しそうに言うもんだからね、その時の俺はおや？なんて思つてたり。

ひかりつたら、京子がこんなことを、とか。それまで一応話はするけど、どこか硬さが残つていたのにそれが全部消えてるんだから。

「なんにせよ、良かつたじやん」

「ありがとつ！　あ、それでねー、三人で話してる時に先生がやつてきて、目ざとくそれに気が付いてニヤニヤしてた！」

「先生……高橋先生、のことだよな？」

「そそ」

「あー、先生そういうの好きそだもんね」

「それで、ユツキーに先生が私のこと名前で呼んだとこに突つ込まれたり」

「ほお……」

「それは俺も実に興味があるなあ……？　あの変態亜人^{デミ}好き教師をここへ連れて来い！　その話を俺にも聞かせろ！」

もつとも、その突つ込まれたあとのことは、俺が興味を示したからなのか、全て小鳥遊が語ってくれた。名前で呼ばれすぎて他だと違和感が酷い、らしい。

「小鳥遊」と呼ばれればお説教でも来るのかと身構え、「ひかりちゃん」と呼ばれれば子供のような反応を求めているのかと思つてテンションをあげてしまう。
「つてかそもそもテツ先生はなんで小鳥遊のこと下の名前で呼び始めたの？」
「あ、それは私からお願ひしたの？」

「は？」
「え？」

「あ、ごめん続きをどうぞ」

「？ ほら、私って妹のひまりがいるじゃない？」

……ああ、そうか双子で苗字が同じだから、差別化かな？

「そそ、紛らわしいから名前で良いよーって言つて。それでセンセーは私達を名前で呼び始めたってわけ。まあひまりの方はちゃん付けだけど

ぐぬぬ、なんと羨ましい。いやもう、それしか言えないです。

しかしその理由ならば俺も小鳥遊をひかり、と呼んでもいいんじゃないだろうか？

そんなことをふと思いつき、ボソリと呟いてみると予想していなかつたのか、小鳥遊はまあ、そうねときよとんとした後に、何とも思つてないような表情を浮かべた。

いや、そこは普通男に下の名前呼ばれるなんて、つて照れるところじゃないの？ ……あ、もしかして中学とかでもそうやつたから慣れちゃつた……のか？

「こうやって学校変わると最初は苗字で呼ぶんだけど、仲良くなると男子も女子も皆、ひかりつて呼ぶようになるよ？」

「ふーん……」

「ほらほら、呼んでみる？」

「……い、いや、ちょっと、恥ずかしいなあ！」

この亜人デミ、なんてことを言いやがる。そんな不意打ちをかまされ、上擦つた声で首を

横に振る。「ひまりのことは名前で呼んでるくせにー」ハイソウデスネ。でもさん付けだし、あとそんな恥ずかしがるような感情も抱いてないから、なんていうか抵抗もないんだよね。

ただし小鳥遊、オメーは駄目だ。つつかえた俺を見て、愉快そうに口を歪めてからかつてくる、小鳥遊はそんな奴なんだ。

「へーえ？ 呼ぶのが恥ずかしいんだー？」

「まあそりやあ、ね」

「ほほーう、ならほら、呼んでみなさい!!」

「どうしてそういうんだよ……」

「日下部の恥ずかしがるところ、見てみたいでーす！」

こいつ、俺で遊んでやがる……：

しかし一方的に遊ばれるのは困る、なのでちょっとした仕返しをしようかなと思う。全力で羞恥の表情を消すと、顎に手をあて、そうだなあと考えるフリをする。

「じゃあほら、俺が名前を呼んだら小鳥遊も俺をさ、名前で呼ぶならまあ」

「マツチーとかユツキーみたいな感じだよね、オツケーオツケー！」

「そりやああだ名だろ、ちゃんと、春明つてな」

「うげ……」

「まさか恥ずかしい訳じやないだろ？」

「……ま、まつさかー！ ばつちこーい！ いつでもいいよ！」

この不審な態度、あらぬ方向へ向けられた視線、どう見ても真っ赤な嘘です、本当にありがとうございます。

それならば立場は同じである。俺がちよつと恥をかけば、向こうだって同じくらいの恥を見せてくれる。逃走の危険？ 逃がすわけないだろ。

「……でもこれ改まつて言うと、なんかこれじやないつて感じしない？」

「そもそもうだね。うーんじやあ引き分けにする？」

「そうだなあ……」

そうだね、なんて言うとでも思つたか！

氣を抜いたのか息を吐いて安堵している小鳥遊に向けて、まるでずつとそうであつたかのように――

「ま、ひかつ……ひかりがそう言うなら引き分けでいいと思うけど？」

「……ゲホッ！ ちよ……！」

はいちよつとつつかえました、俺には無理だつたよ……

もつとも、充分奇襲効果は見込めたようで、息を整えながら恨みがましい目で俺を睨んでいる。いやいや、最初にそうなるように仕向けてたのは小鳥遊だから、仕方ないよね

?

終わつてしまえば、あとは楽なもの。どうだ、と勝ち誇つた笑みを向ける。次は小鳥遊の番だぞ、とも。

「卑怯じやんそれ！」

「どこが？　ちゃんと名前で呼んだしな？」

「うう……こんなはずじゃあ……」

じやあどんなはずだつたんですかね。俺としましては肩を落とし、何とか逃れられな
いかと模索してゐるその姿を見れて嬉しく思う。

じつと、小鳥遊を見つめ、逃がさねーよ？　と笑いかければか細い声で意地悪、と
言葉の抵抗が返つてくる。自業自得なんだよなあ。

「ほれほれ」

「は……はる——」

——鳴り響く軽快な音、無粋な邪魔者の名は予鈴だつた。

あわあわと口をパクパクして数秒、やつと言いかけたところだつたのに、なんと勿体
ない。

じやあ私はこれでえええ！　と脇目も振らずに教室へ戻つていく小鳥遊の姿に舌打
ちをする。

「……今更恥ずかしさが出てきた……顔、赤くなつてねーよなあ？」

冷静になつてから羞恥がぶり返してきた。いつもより若干熱い気がする顔をぺたぺたと触りながら、俺もA組へと戻る。

流石にもう一回面と向かつて言えつてなつたら勇気の撤退をさせてもらおうかな。

小鳥遊びかりはやり返したい

あの日の声が耳に残る。いつものちょっとしたやりとり、その延長線上で、ちょっと不意を突かれただけ。

いつものようなトーンで、自然な流れで『ひかり』と名前を呼ばれて。後々思い返してみると、ぎこちなかつたのだけれどその時の私は気付けなくて、思いつきり狼狽えてしまつた。

中学生の頃から、親しい相手は男女関わらず『ひかり』なんて呼ばれていたからなんともないと思つていたのに……

ついでに言えば、返しで名前を呼ぶのはとても心臓に悪かつた。名前は言われ慣れていても、言い慣れてはいなかつたから。

結局チヤイムが鳴つて途中で逃げちゃつたけど、あのままだつたら私はまともに顔を見れなくて、会話だつて出来なかつたはずだ。

次の日には彼は元に戻つていて、妙に意識しているのは私だけかと、ちょっと理不尽さを感じたり。いいもん、意地でもやり返すんだから。

「ひまりー！ 私先に行くねー！」

「お、おねーちゃんどうしたの……？ 今日は何も行事ないよね？」

「ひまりが私のことどう思ってるのか、よおおくわかった！ 毎日手伝つて貰つてるわけじゃないのに！」

「私より先に起きて、手を貸す前に全部終わつてることなんて数えるくらいしかないんだけど？」

「んもー！ 先行くね！」

いつもはひまりに髪のセットを手伝つたりしてもらうけど、こうして早起き出来た日は、当たり前だけど全部自分でやつている。……大体は髪型が髪型だから、手を貸してもらつてるけどね。

靴を履いてドアを開け、駆け足で道を走る。清々しい朝、地面を蹴る軽快な音に足が更に軽くなる。

学校へ近づくにつれて同じ制服を着た人が増えていく。まだ早い時間だから、その数もまばら。私が普段通る時間はいっぱいいるけれど、流石にそれより何十分も早いと流石に少ない。

校門前の緩やかな坂を一息に駆け上がり、校門を過ぎた辺りで息を整えて校舎へ入る。数週間も経てば流石に慣れるもので、迷わず教室へ。

「おつはよー！」

「はよー」「おはー」「おはようー」

「あれ？ ひかりさん早いねー」

「今日はちよつとねー」

クラスメイトと話しながら、カバンから教科書ノート筆記用具と机に移していく。その過程でまた歴史の教科書を忘れてしまったことに気が付き、ひまりに怒られるなあとちよつと気分が沈む。頼めば貸してくれるけど、そこにお説教が必ず付いてくるのがひまりだつた。

いや、それよりはまずこんなに早く登校した目的を果たそう。授業は後ろの時間だから、その前に借りればいい。

ちよつと友達に断りを入れて、隣のクラスを後ろのドアから覗き込む。うーん、いない。朝一番にやつてやろうと思つたけれど、対象がいないのならばしようがない。廊下で待つていた友達にありがとお礼を言つて、その場でちよつとした雑談を始める。

「何々、彼氏ー？」

「うえつ！？ ち、違う違う！ 友達だよー友達！ つてか隣のクラス見ただけでなんでも彼氏つて話になるのよー！」

「えー、ほら、ひかりさんつてA組の佐竹君や日下部君と仲が良いでしょー、あと太田君」

「えー、ほら、ひかりさんつてA組の佐竹君や日下部君と仲が良いでしょー、あと太田君」

いや、その三人と仲が良いならマツチーもユツキーも彼氏になると思うんだけどな。
 「それもそうか」と笑う友達に、私は息を軽く吐く。まつたく、狼狽えた自分が馬鹿
 みたいじゃない……

「で？ 実際のとこどうなの？ 日下部君とは一緒に帰つたりしてるでしょ？」
 「つ！ それはー、そ�だけどー……」

とか思つたらこれだ。危うく咽むせそうになつて、なんとか耐える。
 ニヤニヤする友達に、なんてことを言うのと口を尖らせて抗議する。続けて「そんな
 んじやないよ」と。

「の割には毎日喋つてるじゃない」

「よ、よく見てるねー私のこと」

「廊下で喋れば誰だつて目に入ると思うけど」

そもそもそうだった。

けど、そんなに言われる程喋つているだろうか……と思ひ返してみる。

朝のホームルームの前、授業の合間の休憩、お昼休み、放課後、確かに毎日どこかの
 タイミングで最低一回は話してた。放課後は先生のとこへ行つたりするけど、それ以外
 は日下部の方から話しかけたり私から行つたり。
 さらにさらに思い返せば……あれ？ もしかして入学式から毎日何か喋つてる？

うあー、全然意識してなかつた。本當にもうそれが当たり前になつてゐるんだし。

「友達と毎日喋るなんて当たり前のことじやん」

「そうだけどさ、こう、雰囲気が違うみたいな?」

それはまた大雑把な答えたつた。でも言いたいことはわかる。私だつて日下部をちよつと特別視してるのは否定しない。

本当に、話しやすいのだ。亜人デミだよつて言つた次の日に亜人のことについてちよつと調べてくれたり、あとはその、うん、佐竹君に亜人の話で私だけ言外に可愛くないと言われた時に褒めてくれたり、とか――

その時のこと思い出して、思わず首を振る。あんなに真正面から何の他意もなくべた褒めされたことなんて体験したことなかつた。初めてのこと、だつたから。

「どうしたの?」

「い、いやなんでもない!」

「あー! もしかして日下部君のこと考えてた?」

「ち、違うし! もー!」

勘の鋭い友達だつた。バツチリと言ひ当てられて返す言葉が出てこない。それもこれも全部、日下部が悪いんだ。

「ほら、噂をすれば」

「はいはい……」

指された方に目を向ければ噂の当人、日下部の姿がそこにあつた。眠そうにしながらも学校指定のバッグを持つた手を肩に置きながら歩いてくる。

友達と話しているからなのか、私の方を一瞥したあと挨拶の代わりなのか軽く手を上げて、そのまま横を通り過ぎる。

その時、閃いた。今完全に油断している日下部に、仕返しをするチャンスなんじやないかって。

何時ものように、ずっとこう呼んでるようにと、へいじょーしんへいじょーしん。

「——おはよ、春明」

あ、転んだ。

起き上がるこことすらせずに、こつちをお化けでも見たかのような顔をする日下部に、私はとても満足したのだつた。

日下部春明は懐かれる？

「あれ？ 転入生、か？」

「え？ ……あ、そ、そうです」

「そ、そうか……」

現在放課後、ぶらぶらと学校内を歩いていたところ、廊下で泣き声が聞こえたのでそれを放つておけず、声をかけた次第。

綺麗なブロンドの髪をした少年で、俺の声に反応して顔を上げたのだが、控えめに言つてイケメンだつた、放置しておけばよかつたな。

見ない顔だし制服も違うので他所から転入してくる人なのかと思つたけど、とても不自然な笑顔で肯定されて思わず言葉に詰まる。

一つわかった、この人は嘘が下手だ。

「あー名前は？ 俺は日下部、日下部春明つて言うんだけど、迷つてるなら職員室送ろうか？ 俺も用事あつたし」

「く、クルツです。職員室……そうですね、お願ひできますか？ 逸れちゃつた人がいるんですけど、どこに何があるのか全然わからなくて……」

うーん、高橋先生を見つけるのが一番いいんだろうなあ。一応クルツさんって不審者だし、そうでなくともとりあえず先生に引き渡して、逸れた人を放送で呼びだしてもらうなりすればいいだろう。

その場合クルツさんがちょっとだけ恥ずかしい目に遭うだろうけど。高校で迷子の案内されるなんて笑いものだからなあ……

「いつから授業に参加するの?」

「……そ、それを今日聞きに来たんです」

「へー……ところでクルツ君ってどこの国なのかな?」

「あ、産まれは日本なんです、父がドイツなんですけど」

「あ、それでこんなに日本語上手いのか、なるほどね」

ちよつと興味本位でつついてみれば隠す気のない笑みを返してきて、それが居た堪れないもんだから話題を別のことへと移す。

あんまり変に突っ込んでヤケになられたら困るしね、せめて近くに先生がいないと困る。

ドイツは行つたことあるの? まだですね、いつか行つてみたいんですけど、そんな会話をしつつ歩いていると、見慣れたジャージ姿が視界に映る。

白い線の入った赤いジャージ、髪を後ろで一つにまとめたその姿は間違いく佐藤先

生だ。

クルツさんに「ちよつと待つてて」と伝えて、佐藤先生のところへ向かう。「あ、佐藤先生佐藤先生、迷子拾いました」

「ま、まい……？」

「転入生だそうです。一緒に来た人と逸れちゃつたらしく、まずは職員室かなつて案内しての途中だつたんですけど」

「あらそういう事ね。じゃあ私が送るから、日下部君は帰つていいわよ」「はい、それじや、あとお任せしますね」

チラリと見ればクルツさんはその場から動かず、特に表情も変えず佐藤先生と俺を見ている。こうして見ると何か悪さを企んでるようには見えないんだけど。ほら、ちよつと目が合つたのか控えめに手を振つてるし、うーん。

とりあえず、懸念事項も伝えておかなきやいけない。ちよつと声を小さめにしておいて、と。

「あとその、転入生つて言つたんですけど……」

「……何かワケあり？」

「どうやら嘘っぽいです、めつちや顔に出てました。人と逸れて泣いてたくらいなので悪い事をやれそうな人じやないとは思うんですけど」

「……次からちゃんと不審な点を見つけたら離れること、いいわね? 演技って可能性もあるんだから」

「言い終わると、佐藤先生は険しい顔をして俺を審める。はいその通りだと思います。本当にわかってるんでしようね?」

「わかつてますつてば、ほらあまり待たせてもいけませんし」

「……またくもう」

溜息を吐く先生を後ろに、クルツ君の元へと向かうと佐藤先生を紹介する。

「クルツです、と礼儀正しくお辞儀をするのを見ていると、やっぱり悪い人には見えないんだよな。」

佐藤先生もそんな姿に毒気を抜かれたのか、ちょっと戸惑いつつも少し頭を下げている。

「じゃああとは佐藤先生が連れてつてくれるから」

「えっと、日下部さんは……?」

「うーん……」

「……」

「……まあ、職員室まで一緒に行こうかな?」

「あ、ありがとうございます!」

「日下部君！」

すみません佐藤先生、目を潤ませてじーっと見つめられてそれを見捨てられる程俺の精神は強くないです……。

クルツさんすっごい笑顔なんだけど何これ、懐かれた？ 何歳くらいなんだろうな、すっごい幼く見えるんだけども。そして佐藤先生の視線が怖い。舌の根の乾かない内にさつきのお説教を無視しちゃったからしようがないと言えばそうなんだけどと、そんなところへ日下部さんと町さんが仲良さそうに歩いてくる。一人がこちらに気付き、軽い挨拶をしつつ「何してるのー？」「まあちよつとした野暮用みたいな」「ふーん」なんて軽いやり取りを交わし、最後にまた遊ぼうねーなんて言つてそのまま歩いて行つた。

「あの女の子……」

「ああ、デュラハンだからねえ
「あの子が……ですか……」

遠ざかる町さんを後ろからぼーっと眺めるクルツさん。その視線は興味以外にも別の意味が含まれている気がした。

悪い感情は含まれていないんだけど、なんだろうね、わからん。
佐藤先生が純粹に亞人に興味があるの？と聞いたその瞬間、

「……いえ別に」

その顔は俺が声かけた時とまつたく同じで。

佐藤先生もなんとも言えない表情を俺に向けてきた辺り、俺の言いたいことをわかつてくれたんだと思う。

こんなに露骨な不審者がいるわけないし、放つておけないよね、色んな意味で。得意げな笑みを佐藤先生に浮かべると、「日下部君はあとで反省文ね」という有難いお言葉が。なんですか。

「不審者、ですか……?」

「ええ、ひかりが不審者を校内で見た、と。見たのがひかり^{アッ}なんで色々証言盛つてるかもしないんですけど、一応注意を」

「盛つてる、とは?」

「クマみたいに大きくて、けがもじやもじやで、獲物を狙う獣みたいな目だつた、だそうです」

「……それは、なんとも」

反省文に頭を抱えているうちに物騒になつていた。テツ先生が言うには、不審者が校内に現れたらしく、しかもそれを見かけたのが小鳥遊だと言う。なんか不審者の特徴がまんま猛獸なんだけど、それ小鳥遊は大丈夫なんですかね。

「先生」

「お？　日下部か、どうした」

「小鳥遊は、大丈夫なんですか？」

「……ちゃんと姿を確認した後に全力で逃げたそうだ」

それは良かつた。きちんと俺を見て言つてくれたテツ先生は、そのまま後ろへと視線を向けて、「誰？」と佐藤先生を見る。

事情を説明していくうちに、テツ先生がちらちらと俺を見ては呆れたような目をするのはやめてほしい。時々はあつて溜息ついてるし。

「不審者、ですか？」

「ん？　ああそうみたいだね、ここには先生が二人いるし大丈夫だと思うけどね。ただちょっと友達がそれを見かけたって言うから。逃げた後に力合わなきやいいけど」

「……どうですか。なら、ボクが、なんとかしてみせます」

「は？」

クルツさんが両手を構えて意氣込んでいる、のはいいんだけどとてもなんとか出来る

ような体格じやない。というか不審者に返り討ちに遭いそうだ。

やめとけ、と言つても大丈夫ですの一点張り、誰かクルツさん止めてあげてくれ。

あーそうだ、とりあえず元の職員室へ行くという目標を達成しよう。職員室まで行けば何か起ることもあるまい。

テツ先生や佐藤先生も、この場で喋っているよりはと動き出す。「その不審者がクルツ君の逸れた相手の可能性もあるのよねえ」なんて佐藤先生がぼやいているが、クマみたいに大きくてもじやもじやで獣みたいな目をする同行者がいるわけないじやないか。

なんてことはない曲がり角。佐藤先生が一番最初に踏み込み——角の先からテツ先生を一回り大きくした人物が出てくる。そのシルエットに見覚えはなく、もしかしてこれが件の不審者かと他人事のように思つた。

……じゃなくて佐藤先生が「危ない！」へ？

大男にぶつかりかけた佐藤先生の手を、クルツさんが思いつきり引っ張る。バランスを崩した佐藤先生をテツ先生が胸で受け止めて……つてサキュバスに直接触れて大丈夫なのか？

そんな懸念を他所に姿勢を低くして突撃したクルツさんが地面を蹴つて飛びかかる。右足で首への鋭い一撃、そのまま腕をロツクして地面へ叩きつける。少々エグい音と共に大男は廊下と熱いキスをした、と。痛みを訴える大男の悲鳴が怖い。

ちなみにテツ先生は悟りを開いたかのような顔で佐藤先生を気遣っていた。テツ先生
生ばねーな。

「どうですか！ これで日下部さんも安心でしょう？」

「え？ あ、うん、と言うか凄いねクルツさん」

「…………う、宇垣さん？」

「ウガキさん……？」

「ウガキさん？」

「ウガキさん？ 佐藤先生、知ってる人なんですか？」

いでででででと悲鳴が途切れない大男、何かに気付いた佐藤先生がその大男に恐る
恐る声をかける。

テツ先生と、クルツさんと、俺がそのまま真似して、得意げな顔から一瞬で真っ青にな
なつたクルツさんがか細い声で確認する。

「よお、クルツう～～～急にいなくなつたと思つたらどうした？ 急に。ん～～？」

随分と恨みの籠つた声だつた。痛みがまだ残つてゐるのか怒りなのか判別に困るけ
ど、顔を震わせてクルツさんを睨んでいる。

先輩ッ!? やらかしたと言わんばかりのクルツ君の叫び声。それに続く三人のオウ
ム返し。

どうやら佐藤先生の言う通り、不審者はクルツさんが逸れた人のようですね。

「えつと……知り合いの、刑事さんです」

「刑事!!」

しかも不審者を狙う方でした。疑つてすみません。
……え?
先輩ってことはクルツさんも刑事……?

放課後は語りたい

——あーじゃあ日下部、とりあえずもう大丈夫だから、あとは先生で引き受ける。

——日下部さん、ありがとうございます。あ、良かつたら連絡先交換しませんか？

——反省文はあとでね、日下部君

というわけでクルツさんの連絡先を入手。また会いましょうなんて言われたし、そんな断ることでもないことだつたので快く承諾した。懐かれて悪い気はしないよね。しかしやることはなくなつたし、いよいよ帰るかなあ。

「あー日下部！　日下部！　大変なんだけど!!」

「不審者の話なら解決したぞ」

「……ほ？　なあーんだ」

手を振つて走つてきたのは小鳥遊だ。焦つている理由はわかるので、解決したこととついでに刑事だつたことを伝えた。

良かつたあと大きく息を吐き、そして直後に動きを止める。そして不安な表情を浮かべておろおろと、

「刑事……何かあつたの？」

「いや、なんか佐藤先生の知り合いだつたみたいだけど。どうしたんだろうなー、連れもいたし」

「知り合い……そして連れ？」

「そ、クルツさんって言うんだけど。凄かつた。小鳥遊の見た人を一瞬で地面に叩きつけたからなあ」

「な、なにそれ」

何それと言われても、そうとしか言いようがない。飛んで蹴つてどしーん。一瞬だつたなあ。相手が不審者じやなくてクルツさんの先輩で、めつちや謝つてるのを見なれば尊敬してたよ。

この後どうするかーと聞いてみればセンセーとお話するから待つよーと返つてくる。

俺も気になつてたから一緒にいるかな。いや小鳥遊と喋るつてのも、もちろんあるんだけど。

「あ、そうだ、お父さんが日下部に会いたがつてたよー」

「あれ？ でもこの前行つたばかりじやなかつたつけ」

「いつも荷物置いてちよつと話して帰つちゃうから、一回ぐらいご飯一緒にしようつて

「なんで俺そんなに気に入られてんの？」

いや、あれからも何回か小鳥遊に呼ばれて、買い物付き合つて荷物持ちやつてるけどさ。あれくらいでご飯頂くのもなあつて。

ほらほらそんなこと言わずに！ つて押してくるのを遠慮するのつて、結構精神削るんだなつてよくわかつたよ。小鳥遊もノリノリで一緒に食べようよつて言つてくるしさ。

ただそうなると親にも当然説明しなきやいけないわけで。もう小鳥遊のこと知られたらそれで何日それをネタにからかわれるか、それが嫌なんだよね……

ニヤニヤしながら一から十まで聞き出す、俺の親はそれをする性格をしているから、そくなつたら精神がもたない。

「ほら、この前のつて量増えてるじやない？ 日下部がいるお陰なんだよねー」

「それつて俺が用事入つてたらダメなんじや？」

「その時は一部だけ買って来たらいいって言われたのよ。だからくれぐれも無理して付き合わせないようについて、酷くない？」

「ははは、俺だつてちゃんと用事ある時は断つてるのにねー」

「……断る回数より付き合つてくれる回数の方が多いよね？ それもあるんじやないかなあ」

頬を膨らませて自分の父親へと不満を表して、俺にはどうしてそんなに来てくれるの

? と首を傾ける。

たまたまだよと言うものの、本当の理由は言うまでもない。予定が空いてることに関しては、たまたまだけどね。

「ま、そんなわけで、うちのお父さんの方が気にするようになつちやつて。ご飯ぐらい御馳走しないと気が收まらないってさ」

「うぐ……まだ片手で数えるくらいだし、そんな気にしてることでもないと思つたんだけど

「日下部が気にしなくても、こつちが気にするんだよ! だから今度は一緒に食べよ!」
ばしばしと肩を叩いて、いつも以上に押しの強い小鳥遊に意思が揺らぐ。

……うーん、そこまで言われたならもうしようがないかなあ。元々、小鳥遊と一緒に飯も食えるわけだし、悩ましい選択ではあつたんだ。

そうだ、別に友達の家で御馳走してもらう、とだけ言えばいいのだ。性別まで言う必要なんてどこにもない。

「じゃあ今度ね」

「やつた! ふー、これでお父さんも少しは静かになるよ」

「そんな言いぐさをするて、どれだけ言われたのさ」

「日下部が帰つたあとは必ずと言つていいほど、あとは最近になつて毎日」

「……何が小鳥遊のお父さんを駆り立ててるんだろうな」
「私が知りたいくらいだよ」

廊下の壁に背中を預け、その隣で小鳥遊も同じ様に壁に寄りかかつた。
それからしばらく無言のまま時間が過ぎる。というか、先生へとお話しするのはどう
したんだ。

「あ、そうだねー、そろそろ行つてみようかな?」

「何処にいるのかわかるの?」

「うーん、どつかの部屋に入つて行つたのは見えたから、そこかなーつて
いや、それここにいていいのか? 入れ違いになつたらまた探さなきやいけないわけ
だけど。

その時はそのまま帰るから、とは言うけれどそれじやあなんのために残つてたかわ
らない。

やけにのんびりしてゐる小鳥遊が、こつちーと歩いていく先は……うん?
喫煙室?
しかもちようどそこから先生と刑事さんが出てきていた。

ぐつじよぶ俺、もうちよつと遅ければ入れ違いで会えないところだつた。一言二言会
話して、ん?

何かに気付いたのか止まる動き、すんすんと鼻を鳴らして数秒、心底嫌そうに「くさ

い」。

煙草は嫌いー！ そんな叫びを残して小鳥遊はあつという間に消えて……え、ええ、待つてた意味ないじやん。

「つと、そこいるのは……」

「あ、日下部です。日下部、春明です。刑事さんは……」

「おお、宇垣つてんだ。クルツの世話、あんがとな」

「いえいえ、話してて楽しかったですから」

うちのもんが悪かつた、と言われば困惑しかない。「早紀絵には言つといたからはんせーぶんは無しだぞ」宇垣さんに滅茶苦茶感謝した。

「ところで、刑事……宇垣さんはどうして今日ここへ？」

「あー、ちよつとした野暮用だ。ま、悪い事があつたわけじやねーよ」

「そうですか……それはよかつた」

「君はさつきのバンパイアのおじようちゃんと仲が良いのか？」

「はい、自分で言うのもなんんですけど、めっちゃ仲良くします」

「ううかー、と宇垣さんはどこかほつとしたような、柔らかい笑みを浮かべる。この人も亞人が好きなのだろう。佐藤先生という亞人を知り合いに持つてているからなのか、それとも元からなのかはわからない。」

スマホを取り出し、どこかへ掛けたかと思えば相手はクルツさんらしく、もう帰るから喫煙室の前まで来いよと言つてすぐに切つていた。

「ああ、クルツとも仲良くしてくれよな？ 感情がちいとばかし顔に出るだけで悪い奴じゃあねえからよ」

「あ、はいそれはよく知つてます……あと、凄い正直者ですよね」

「そう、そうだつたな……」意味が通じるのか頭に手を当てて大きく息を吐く宇垣さん。感情が出るのは悪い事じやないけれど、出過ぎるのは考え方のだよね。

それから程なくしてクルツさんが小走りでこちらへやつてきて、宇垣さんに頭をがしがしと撫でられ両手を振つて抗議を示す。

それが微笑ましくて、年の離れた兄弟みたいだなあなんて感想が浮かぶ。なんかところどころ本気で嫌がつてる気がしなくもないけどきつと氣のせいだろう。

野郎共の試験明け

これはどうしようもないこと。俺も佐竹も、奮闘及ばず一部を赤色の世界に落としてしまう。

それでもテスト前に多少は勉強したお陰か、ギリギリ崖に捕まつて落とさずに済んだものがいくつか。それらを見比べて二人で安堵。

「いやーあぶねーあぶねー」

「片足どころか全身突っ込んでるのもあるけどな?」

「春明もそだろ……」

全科目の点数が書かれた細長い用紙をお互いひらひらと振り、補習と追試はとりあえず置いて達成感に身を任せる。

祝、中間テスト全科目返却。これで点数がどうなるかドキドキしたり、結果が判り切つてる科目で蒼褪めたりせず済む。

「僕はまあそこそこかな」

「それでそこそこなのか……」

赤点ゼロ、総合点数が400近い太田の謙遜も俺らにとつてはただの自慢だ。俺の力

の籠らない声が響く。

佐竹も俺も、一部の教科で点数を稼いだので総合点数はそこまで悪くない。うん、苦手な科目が致命的過ぎたんだよ。

四月からもう何度預けたかわからない椅子に背中を預け、ふと後ろの席の女の子に目を向ける。

「日下部さんは、どうだった？ テスト」

「あ、私は中々、かな？」

要領を得ない回答だった。

あ、これは気を遣われているな、と思った。俺の後ろだから、今までの会話が聞こえていたんだろうからね。

「総合何点だつた？」

「え？ えーと……」

「春明、あまり『ごちや』『ちや』聞くなつて」

「つと、そうだつた。ごめんね」

「いいよいよー。あ、そういうえばテストの成績上位者が発表されてたけど見た？」

佐竹の嗜める声に同意し、日下部さんの話題へと食いつく。発表つてーと、廊下に貼られていたアレか。

それならばついさつき見に行つた。そしたらびっくり、ひまりさんが二位に町さんが五位。うちのクラスからだと藤川つて奴が四位だつたかなあ。

知つてる人がああいうのに乗つてるのはなんというか、新鮮な感じだつた。ひまりさんは勉強が出来そう、というのは話しててなんとなく思つてたんだけど、実際に目の当たりにすると、やつぱり衝撃というかなんというか。

「小鳥遊の妹つて頭いいんだなー」

「ね」

「ひまりさんはなあ、なんというか小鳥遊を反面教師にでもしたのかなんなのか」

「日下部君も結構言うよね……」

いや成績表が来る前にちよつとその話を小鳥遊としたんだけど、漫画的表現の汗が幻覚で見えるくらいには酷い反応だつたから。

そう言えば、佐竹や太田はひまりさんとあまり絡んでなかつたと今更思う。いや話したりはしてるよ？ でも俺とか小鳥遊を抜きにしてつてのは見たことがない。

ひまりさんの成績を見た二人が驚くのも知らなければ当然か。

「小鳥遊妹に教えて貰つたりとかは……」

「それは多分無理だと思う」

佐竹がふとそんなことを言い出すも、すぐに日下部さんが首を振る。うん、俺も一瞬

考えたんだけどね？

「ひかりがその、点数が良くなくて」

「だよねー、テストの話をしたがらなかつたもん」

「それじゃあ小鳥遊さんの妹さんは、小鳥遊さんの勉強を見るのに手いっぱいだろうねー」

四人揃つて溜息。ただし俺と佐竹は五十歩百歩な成績なので強くは言えなかつたり。高橋先生がテストまで真つ赤にしなくともなつて呆れてたよーとは日下部さんの余談。誰が上手いことを言えつて言つた。

「それでひかりつたらお説教回避したくて『まかそ』うとしたら高橋先生に見捨てられちやつて……」

「テツせんせーはそこらへんキツチリしてゐからなあ」

「教師してるとこはちゃんと教師してゐよね」

「あ、そう言えば私達三人で勉強会やつたりするけど、皆はどうする？」

勉強会……良い響きだ。馬鹿二人には渡りに船とも言える。

そこに太田を含めて男三人で顔を見合させ、まずは佐竹が一言。

「いや、俺は遠慮しとく。そつちの方が集中出来んだよなー」

「佐竹に同じく。俺は赤点取つたのがマジで勉強しないと追試も同じ道を辿りそうなん

だよな」

「僕はこの二人に勉強教える役目があるからね、それに僕だけ行つてもちよつと気まずいし。誘つてくれてありがとう」

続けて俺と、二人が断つたことで太田も申し訳なさそうに頭を下げる。

というか小鳥遊がいるのに俺が集中出来るわけないよね。ちよつとしたことからおしゃべりが拡大したりして、それが周りに広がつて、皆の勉強の邪魔をしちゃいけないし。

流石にそこまで不真面目ではない。ふざけるところはふざけるけれど、締めるところは締めるのだ。

そつかー頑張れーと応援を貰つたものの、予定は未定だつたりする。うん、これから決めるところだつたんだよ。

どうせ暇だし、うーん小鳥遊の家で飯食うのは追試とか全部終わつてからかなあ……
「太田が勉強できる奴で助かつたね」

「俺らはダメなとこ、とことんダメだからなー」

ま、だからこそ得意科目や比較的出来る教科だけ勉強したんだけど。そのせいで英語とかもう壊滅的だ。

成績表をクリアファイルに仕舞い、身体を預ける先が椅子から机へ、顔をべつたりと

くつつけ脱力。

「これでも人並みには勉強してるからね、中学でも友達に教えてたし。あと教えたことを吸収していくのが、見てて好きなんだ」

「ほー……」

「教師にでもなるのか?」

「そういうわけじゃないけれど……教師、教師かあ……」

——将来は目指してもいいかな。

へえ。

本気の顔でそう呟いた太田は、しかしその瞬間我に帰ると「あ、目指せたらだけど!」なんていつもの空気に戻っていた。

「いいじやん教師。目指してみたら?」

「もーちよつとした冗談だよ」

「いやー教えるのが好きならいいんじゃねーの? まあ教師つて大変そうだから絶対つてわけじやねーけどよ」

本人は頬を搔いて照れているが、あんな太田は初めて見た。だから佐竹だつて茶化さない。

「じゃあ生徒第一号は二人つてことで」

「お手柔らかにお願いしたいなあ」

「二人とも赤いのは20点台だからミツチリやるよ?」

「うへえ……」

ちなみにテストが赤くなつた俺らの末路なのだが、勉強会のあとは太田先生の容赦無さに顔が青くなつた。

教え方も上手く、わかりやすい説明は助かるのだが俺らが理解したと見るや、次へ次へ進んで時間を忘れさせるのは勘弁願いたい。

日下部春明は力になりたい

「あれ、町さんどうしたんだろう」

「え？」

今日も小鳥遊とくだらない会話をしながら時間を消費している時、何気なく見た窓の先で人気のない校舎裏に行く町さんの姿を視界の端に捉えた。

心なしかその足取りはいつものようなきちんとしたものでなく、どこかふらふらして危なつかしいものだった。

「何かあつたのかなあ……」

「マツチーが？」

「うん、なんかね、こう？　ちよつと変だつた」

「ふうん……」

急にそわそわし出す小鳥遊、非常にわかりやすい。気になるならさつさと行けばいいのに、もしかして俺に遠慮でもしてるんだろうか。

あー、えーと、そのー、なんて煮え切らない様子に思わず笑みが零れる。
だから一言、さつさと行きなつて。

「ごめんね？」

「いいつていいつて、いつだつて話せるじゃん」
「うん！」

ぱつと笑顔を浮かべ、駆け足で消えていく小鳥遊に満足。あのまま喋ってても気がそぞろでお互い楽しくないだろうし。

うーん、そうしたら余計なお世話かもしれないけど、テツ先生でも探しますかね。

亜人デミちゃんのことなら先生が一番だし、そうでなくとも普段から町さんを見てるテツ

先生ならきっと上手くやつてくれるだろう。

ただなあ……この広い校舎の中ですぐ見つかるのか……？

割とすぐ見つかった。

職員室で教頭先生が荷物の運搬をお願いしたと、行先の教室を教えてくれたのだ。

そこにいるかはさておき、そう時間も経つていないとのことなので怒られない程度に廊下を走り、その教室へ急ぐ。

そこが見えた時、丁度着いたばかりなのか、先生がドアを開けるために奮闘している

ところだつた。

「手伝いますよー」

「……日下部か」

ダンボール二箱を持つててはドアも開けづらいだろう。さつとドアを開け、先生がそのまま入つて机に上に荷物を置く。そのダンボールを試しに持つてみれば結構な重量で、それ二つを軽々と運ぶテツ先生の力にすげえとしか言えない。

先生、もしかして巨人の亜人とか言うオチないよね？ 結構体格もいいし、生徒から見たらほんとデカいし。

手伝いますよと申し出れば最初は断られたものの、話があるんでそのついでですと言えば先生も断り切れなかつたようで箱の中の本を渡してくれた。

「これはどこに？」

「そつちだな。……しかし急にどうした？ 話ならオレの作業を手伝わなくともいいだろう？」

「え？ いや、見てるだけって言うのも気が引けますよ？ もちろんそれだけじゃないんですけど、ちょっと気になることがありますまして」

「？」

「あ、いや町さんなんですけど」

あ、動きが止まつた。

「何か知つてゐるんですか?」

「まあ、ちよつとな……」

なんとも曖昧な言葉。

うーん? 先生を呼んだ方が良いかなと思つたけれどこれは……もしかして先生が原因、だつたりするのかな?

予想もしていなかつた可能性が出てきてどうすればいいか迷う。

そのまま悩みながら片づけをして、先生も黙々と作業をするもんだから無言の空間が形成される。そのお陰で段ボール二つ分の荷物はすぐ終わつたのだけれど。

「あーその、さつきの町の話なんだが

「はい?」

「いや、どうしたのかと思つてな」

やつぱり先生は気になつていたみたいだ。

小鳥遊と話していたら町さんが元気なさそうに歩いていつたこと、その先が誰も行かなそうな校舎の影だつたこと、小鳥遊がそれを追いかけいつたことを話した。

俺はそれで先生を探してたんですけどね、と最後に付け加えるとテツ先生は申し訳なさそうに頭を搔いた。

ちよつとしたトラブルがあつた、そうで。何があつたのかは言わなかつたけど、それでこの後に探すつもりだつたらしい。

何もしなくても、先生と町さんは話せたのか。でもやつぱりあのまま帰ることなんて出来なかつたし、例え無駄だつたとしてもこれでいいんだ。

「ありがとな日下部」

「いやいや、別に結果は変わらなかつたみたいですし」

「そうでなくてな、友達のために動いたつてのが大事なんだよ。ひかりと話してたのにそれを終わらせてまで町のところへ送つたんだろう？」

「あのまま話しても上の空になりそうでしたし、町さんだつて俺の友達ですから」

そんな大層なことは考えてなかつたので、テツ先生に褒められるとなんかこそばゆい。

そもそも誰だつて同じことをしたと思うんだけどなあ。

テツ先生が教室から出る時に、「あ、俺がやつたつてことは内緒で」と付け加えたのは、なんか恥ずかしくなつたからである。

「思つたよりセンセー来るの早かつたなー」

お互い謝つて大団円、校舎へ戻る途中、私はそう呟く。

急いでマッチーを探し出して話を聴いて、センセーならばすぐにやつてくるだろうって思つたらすぐに足音が聞こえてきて、それに紛れて先生の荒い息遣いが耳に入ったので、慌ててマッチーの頭をギュッと抱きしめて逃げ場を無くした。

いたいた、とこちらを見るセンセーに「はて?」とは思つたのだけれど、それよりはすぐに二人が話し始めたから、気を見計らつてセンセーにマッチーを渡して……二人が仲直りしたタイミングで身体の方をいじつてちよつと明るい雰囲気にしてみたり。

それでちよつと怒られたりもしたけれど、これはしょーがない。

「ああ、中身自体は……すぐ片付いたからな」

「でもよくここがわかつたよねー?」

「……オレも学生時代に落ち込んだ時は人気のない場所へ行つたからな、もしかしたらと思つたんだ」

どこか他所へ視線を向ける先生に、第六感が反応を示す。むむむ、この様子は何かを隠していると。

ちよつとその部分を突いてみたい。けどセンセーもそこは言う気がなさそうに切り上げて、マッチーとわいのわいのしているんだから、そんな氣も失せてちやつた。

マッチーも笑顔、センセーも笑顔、私もハッピー！

そう言えば私の様子を見て、日下部がすぐに背中を押してくれたのは本当に嬉しかった。理解されてるなーって。

友達つて、やつぱりいいなあ……なんてね。

日下部春明と雨

「あ、傘忘れた」

「ん？」

ざあざあと降る雨。梅雨と言えば登下校時の雨に悩まされる時期。

朝に見えていた綺麗な空はどこへやら、昼飯の前くらいからあれよあれよと雲が青空を覆い、それが仕事だと言わんばかりに雨粒を投下してきた。

全ての授業も終わり、さあ帰るかと靴を履き替えたところで、隣の小鳥遊がバッグを漁つて困ったような表情を浮かべている。

「いや、天気予報見てなかつたの？」

「見てたけど……ちよつと遅れそうになつたからそこで忘れちゃつたのかも」

どうしよーと空を見上げて途方に暮れているが俺にとつてそれはチャンスだ。

傘を忘れた女の子、それに対しても傘を持つている男、その女の子が男の好きな人ともなれば、次に言い出す言葉など一つしかあるまい。

もちろん、それを言うには勇気が多少ばかりいる。早まる鼓動に収まれなんて思いながら――

「しょうがねー 「おや、ひかりは今帰りかな」
 「あ、おとーさん!!」

はいお疲れさまでした。

後ろから聞こえてきたそれは、俺にとつても聞き慣れたそれで、小鳥遊には頼れる肉親のもの。

何故ここにいるんですか……小鳥遊が傘忘れたことに気が付いて迎えに来たのだろうか？

「どうしてここに？」

「昼にLINE送つたけれど、お迎えだよ。京子ちゃんに言つてないのかい？」

「……い、言つたよ？ うん、そうだつた！ マツチーのお迎えだつたね!! えへへ!!」

あー、なんだこの、嘘が下手だよね小鳥遊つて。

確かに首と胴体が別れている町さんは、片手が塞がる雨の日は危ないかもしねれない。

片手は傘、もう片手は首で塞がつてゐるから、万が一転んだりすれば即ち頭部を地面に強打することになる。雨で地面も滑りやすいし、そりやあ傘以外にも手段はあるけれど、滑るのには変わりないからね。

最初は学校指定の手に持つタイプだったカバンも、少し経つたらリュックになつてたな。ちょっとのことが大事になるから、用心するに越したことはないというお話か。

「ひかりも乗つていくかい？」

「……いや、いいよー私は歩いて帰る！」

車のキーらしきものを摘んでふりふりと揺らすおじさん。俺は一人で帰るかとやや落胆していると、意外や意外、小鳥遊はおじさんから目を逸らしてそれを断つた。

え？ 傘忘れたんじゃないの？ 俺何も言つてないしそのままだと雨に濡れて帰るつてことになるけどいいのか？

「いや小鳥遊、お前傘」

「私は日下部と帰るよー」

「そうかい……？ 春明君、ひかりをよろしくね」

「……わかりました」

いや、別に言うよ？ 言うけどさ、でもその前に選択肢があるんだからさ、それをおじさんに教えようと思つたんだよ。

めっちゃ睨まれた、余計なこと言うなつて言外に含んだ表情だつた。俺の声を遮りながらそれを向けられちゃあ、何も言えない。

結局おじさんはそのまま行つちやつたよ。どうすんだこれ。

「……」

いやなんか言えよ。

「一緒に帰らないの？」

「おとーさん運転が荒いから」

「いやでも」

「いーの！ ほら一緒に帰ろ！」

「傘は？」

「？ 入れてくれるんじゃないの？ さつき言いかけてたの、それかなつて思つたけど違う？」

「……違う」

違くないけど、恥ずかしい。

呆気らかんと言つてくるが、小鳥遊にとつてはそうでも俺にはそうじゃない。めちゃくちゃ恥ずかしい。

というか聞こえてたんですね、思いつきりおじさんに遮られてたけど、よく聞こえたな。

ほらほら！ と急かすように背中を押す小鳥遊、はいはいとため息をついて傘を広げる。

途端に雨が傘を叩き、耳障りな音が鼓膜を打つ。しかし、不快感よりは隣に小鳥遊が

いることの嬉しさの方が勝る。

好意を寄せて いる女の子と雨の日に相合傘、いえーいと隣に入つてくる姿に頬が緩むのを抑えられない。むしろ、それを我慢できる奴がいたら凄いと思う。

「どうか濡れた方がマシって思う程運転が荒いのに町さん乗せていいの？」

「な、何事も経験だし？」

「こいつ鬼か。いや確かに吸血『鬼』だけどさあ。

「ちゃんと町さんに謝るよーに」

「言われなくとも解つてるし！」 というかお父さんも流石に私達以外を乗せるなら安全運転するでしょ！ 多分！」

「確証はないのか……」

「それよりほら！ ちょっと濡れてるじゃん！ もつと寄つて寄つて！ ちこち寄れ！」

「いやいや充分近づいてない！ これ以上寄るの！」

一つの傘に二人は、流石に荷物の関係もあつて厳しい。俺は荷物を濡らしたくないから、荷物をかけてる肩と傘を持つ手が同じだ。もちろん必要以上に近づきすぎないようについて予防線もある。近づきすぎても俺の心臓に悪い。

そんなんだから反対側はちょっとはみ出てるし、当然そこは容赦なく雨が濡らすわけ

だけど、小鳥遊はそれを目ざとく見つけてぐいぐいと距離を縮めてくる。ちこち寄れなんて言つてる本人が近寄つてくるのはありなんですかね。

「入れてもらつてゐるのに傘の持ち主が濡れてるなんて悪いもん」

「いいのいいの、小鳥遊が濡れるより平氣だよ」

「わ・た・し・が・気・に・す・る・の」

「はい、すみませんでした」

あ、これ逆らつたらあかんやつや。

観念して受け入れるが、雨の匂いに紛れてこう、女子特有の良い匂いが、漂つてくる。え？ この状態で帰るの？ 小鳥遊の家まで？ え？ なんの試練だこれ。

「雨つていいね！」

「俺はそうでもないけどな……」

そりやあ相合傘に慣れれば雨もいいかなつて思うけれど、このときめきに慣れることがなんて、あるのだろうか……

雨よりも、そつちに悩む俺の横で、小鳥遊は惚れ惚れとする笑みを浮かべて会話を弾ませるのだつた。

「ひかりちゃんのお父さんって、とても安全運転なんですねー」「うん？ そりやあ人を乗せてるからね、たまにひかりにもつと早くなんて言われちゃうけどね」

「私は良いと思います。変な運転よりよっぽど」

「はは、ありがとうね。じやゆつくりだけどいこうか」

小鳥遊ひまりをからかいたい

「おはよー！」

「おはよー……う……？」

本日の小鳥遊は普段のこれどうやつてんだ的な一対の出っ張り髪型を止め、両サイドの髪を結んで垂らした、所謂おさげと称されるそれに変わっていた。

どうしたのかと聞いてみれば、ひまりさんと髪型をチエンジしてみたそうで。衝撃の方が強かつたから気付かなかつたけど、なるほど改めて見れば確かにひまりさんが普段しているヘアースタイルだ。

「どうどう？ 似合つてる？」

「うん」

「そ、即答しちゃう？」

「……ま、まあ、な？」

「何が『まあ』なの……？」

「はーいそこイチャイチャしないー」

「してない！」

いや新鮮味があるというかな？ 普段からあの髪に慣れていたから、それ以外を見て動搖してるのもある。それを抜きにしても、こう……妹の髪型を姉がしているのが良いし、純粹に似合っている。普段の髪型と一日ずつ交互にしてもいいんじやないかな？ そんなんだから深く考えず間髪入れずに答えてしまったし、気付いてまた動搖して、どうしたものかと思つていたら横からひまりさんが溜息を吐きながら割つて入つてきた。

小鳥遊が顔を赤くして抗議の意を示す。それをいつものことだと言わんばかりに、ひまりさんは右から左へ流していく。

……ところでひまりさんや。

「ふーん、チエンジしたなんて聞いたけど、ほーう」

「何ですか」

「姉妹の仲が良くて何よりだね」

「ぐ……し、しようがないんです！ お姉ちゃんが同じことしたら私も遅刻するなんて言うから！」

それでムキになつて、そんなわけないじやんと髪型を真似て、せつかくだから小鳥遊もひまりさんのを真似たのか。

俺を威嚇するひまりさんだけど、その行為が更に微笑ましさを加速させるつてわから

ないのか？

見ればちよくちよく通りかかる他の生徒もひまりさんに視線をやつては、次に小鳥遊を見て得心が行つたかのように口の端を上げながら歩いていく。

それがわかっているからこそ、ひまりさんも大きい声で言えない。大きな声を出せば余計に注目を浴びるからだ。

「ひまりつたらそれでも全然時間に余裕あるから凄いよねー！」

「誰かさんが遅いだけじゃないの？」

「もしかして私のこと言つてるの？ ふーん？」

「お姉ちゃんいつつも私に手伝わせてるじyan……昨日だつてズボラつて認めてたし」

昨日。昨日と言えば、ちょっと佐竹達や日下部さんとも話題になつたのだが、あの優等生の小鳥遊ひまりが廊下を全力疾走したという噂があつた。

というか、太田がそれを目撃しており、その後をテツせんせーが追いかけていたらしいのだが……丁度本人もいることだし、聞いてみよう。俺も気になつていたのだ。

「ああ、ひまりさん昨日どうしたの？」

「はい？」

「いや廊下走つてたつて聞いたけど何があつたの？」

「私だつてたまにはそういう時もありますけど？」

「めっちゃ全力つぽかつたって聞いたけど」

「……ちよつとした勘違いをしただけです」

そつと目を逸らしているその姿は、全力で何かを隠したがっている様子だつた。小鳥遊は隣でニヤニヤしてゐるし。

あー、ひまりさんが廊下走るなんてよつぽどなことだもんね。悲しいかな、一人だつたら隠し切れたかも知れない。しかし隣にいる姉の反応で、おおよその検討がついてしまつた。

「そつか、小鳥遊に関係する大事なことだつたかー」

反応は劇的。

「し、知つてて聞いたんですか!?」

「いや単純に小鳥遊が隣で笑つてるから」

「うぐ……」

ま、細かいところまで聞くつもりはないよ。教えてくれそうにもないし、何よりも顔を片手で隠している隙間から、いつもと比べてやや赤みがかつた頬が見えているから、これ以上の追撃はいらない。

俺はそんなひまりさんの珍しい姿が見れて、充分だからね。あまりやりすぎても反撃が怖いし。

「で、その髪型だけど」

「その話題引っ張ります？」

「似合つてるなーって」

「……ありがとうございます」

これはちゃんと、伝えないと。なんか恥ずかしがつてたけど、いいじゃない堂々としていれば。姉妹で髪型変えたりするのは変なことじやないと思うけど。

そう言つてみれば、そこじやないんですけどねと、拗ねた言葉が返つてくる。

「あー！ それさつき私にも言つてたじやん！」

「だからなんだよ……」

「ひまりは渡さないんだからね！」

別にいらぬけど。

横からぎゅっとひまりさんを抱きしめて睨んでくる小鳥遊。少し褒めたくらいでこれは過剰ではなかろうか？ むしろ俺が欲しいのは睨んでくるお前だお前。

思わず、溜息が出る。結局いつ言おうかと思つて、でも今の距離感も好きだから失敗した時のことが怖くて中々踏ん切りがつかない。

せめて夏までは、なんて思つてはいるけれど、それが出来るかどうかはわからなかつた。

「……口下部さん？」

「ん？」

「いえ、なんかぼーっとしてたみたいで」

「立ちながら寝でもしてた？ ちゃんと睡眠はとらないと駄目だよ？」

「ああ、いやごめんちょっとね」

時間にしてちょっとのことだつただろうけど、それでも焦点の定まつていない目をしていれば氣にもなるのだろう。

訝し気に呼びかけるひまりさんに、今考えることじやあなかつたかなと頭を搔く。小鳥遊も結構真面目なトーンで言つてゐるから、いらぬ心配をかけてしまつた。

「ちょっと、とは？」

「大事なことなら相談に乗るよ？ 頼られるのは好きだし！」

「まー、どうにもならなかつたら頼むかもね」

そう言つてくれるのは有難いが、その『ちょっと』が相談に乗つてくれる本人のことなので始末に負えない。ひまりさんはそこらへん察してくれたのか、特になにも言つてこなかつた。

どうにもならなかつた時は頼む、なんて言つても本人にそれを言うつてことは覚悟が決まつた時。どんな反応をするのかな。

「お姉ちゃんに日下部さんが相談事する時、ですか」

「おいやめろ、それ以上はいけない」

「私、そんなに頼りない!?」

「あ、いや違うそうじやない！」

「じゃあどういうことなの?」

説明説明ー！ とやたらと食い下がつてくる小鳥遊、あーこれ面倒なやつだ。
狙つた獲物を逃さないバンパイアらしさをここで発揮するのは止めて欲しい。
チヤイムで強引に逃走は出来たけど、ムキになるのは実に姉妹だなと思つた。

人間たちは語りたい

ふと、考える。そう言えば、あまり吸血鬼^{バンパイア}のことで話はしていなかつた。

というか、亜人^{デミ}の体質で話したことはあつただろうか？ 思い返してみれば、そんな記憶は少ない。

普段は昨日のテレビがどーとか、家族がどーとか、授業がどーとか、そんな会話ばかりだつた。吸血鬼^{バンパイア}の体質がどーのとか、吸血鬼だからこうだつたりするの？ とか。

「だらつ！」

割り切れない感情を滲ませた佐竹の声とともに、ボールが宙を舞う。

放課後にサッカーでもやるかーと集まつた今、俺は現地集合だつたが佐竹と太田は途中でテツ先生と遭遇したらしく、人が足りないからと巻き込もうとしたらしい。教師をなんだと思っているんだこいつは。

その時に、教頭先生とも鉢合わせたらしく、それでテツ先生が色々、言われたらしい。亜人^{デミ}ちゃん達のことで頑張りすぎなのではないか、だからテツ先生を頼りすぎている、自重すれば他の人も頼るようになる、ゆつくりでもそうして悩みを解決した方が自然なのではないか……

その場で教頭先生に反論した佐竹とは反対に、太田は教頭先生の言葉に肯定を示していた。

「確かにすぐ解決出来るのはいいことだと思うけどさ、でも毎回テツ先生ばつかだから、例えばテツ先生がいなくなつた時にどうするんだろうねって」

「そん時は俺らがいるだろーがよー」

「僕たちはそのつもりだけど、亜人ちゃん達がそれをすぐ出来るかなんてわからないよ？」

——だから、そう言う時のために今からでもつてお話しやないかな。

言いたいことは、わからないでもなかつた。テツ先生は先生だから忙しい時期はあるし、例えはちょっとと体調不良でいなくなつた時、ピンポイントでデミちゃん達に深刻な悩み事が発生した時に、果たしてそれを言える相手がいるかつて問題。

俺達は亜人ちゃんの友達だ、頼られれば諸手を挙げて協力する。それでぱぱつと解決して遊びに行きたい。いや別に俺達でなくてもいい、良い先生は他にもいるんだから、先生に頼るとか。そういうことがその時に出来るようについて。

「そしたら、俺にも相談してくれんのかな……」「さーなあ……」

ほんやりと佐竹が誰かに思いを馳せる。きっと日下部さんだらうが。

「あ」

「ん？」

小さな球体が飛んでくる。それは綺麗な放物線を描いて、佐竹の背中へ critical hit! 逆くの字に曲がって数十センチ飛んだ佐竹の姿はある種の芸術を感じさせる姿だった。

飛んできた先を見れば、赤みがかつた髪とキツイ目をしている女子生徒がシユートした体勢のまま固まつていて、その一步後ろでストローを咥えながら控えめな表情で手を振る女子生徒——木村 静香きむら しづかと井森 敦美いもり あつみがそこにいた。

あ、わりいと軽く謝つて近くの木で作られたテーブルへ座る二人に、俺達も反対側へ座つて会話を駄弁りだして、井森のさつき何の話をしてたの一から太田は都合二回目の説明をする羽目になつた。

「ふーん、そんなことがねえ……そういうアタシもないなあ相談されたこと」

「そりやそーだ」

奇しくも佐竹と意見が一致する。違ひはそれを声に出すか出さないか、だが。

そりやそーだろ、男勝りな性格でガサツを地で行く木村に相談するとしたらもう世界

が滅亡する時なのではないか。

「あ、？」

「す……すみません……」

危なかつた、声に出してたら俺もあんなガン飛ばされてたのか。

「日下部も顔に出てるから、ブツ飛ばす」

「ほんとごめんなさい」

魔王からは逃げられなかつたよ……表情でわかるとかエスパーかよ。

そこからはわいのわいのと亜人アミちゃん達がどうやつて相談してゐるのかとか、何を相談してゐるのかとか、そんなお話で時間を潰す。

ただ、流石に小鳥遊がトマトジュースのことでのテツ先生に相談へ行つたりはしないと思ふけどなあ……

「あのさあ」

「ん？」

「亜人のこと、その……同じ人間だと思つていいのかな？」

それは唐突だつた。井森が、本当に小さく言い放つたそれは、不思議なくらい俺達の耳を打つた。

太田が凍り付き、木村ですら言葉を濁して窘めて、佐竹は立ち上がりつて抗議を示す。

どういう意味なのか、どうしてそれを言つたのか、それが俺は気になつたから続早くと言わんばかりに井森を凝視する。

井森だつて亜人(デミ)ちゃんと遊んだりしてゐるから、そんな軽い気持ちで言つたわけじやないんじやないかつて。

「亜人は普通の人間とほとんど“変わらない”って言つてたけど、それはつまり“違うところがある”ってことでしょ？ そういうところ、理解して挙げなくていいのかなつて」

あー、なるほど。何を伝えたいか、それで全員がほぼ同時に気付いた。

——妄信的に同じ人間だと思つてゐる相手に亜人(デミ)特有の悩みを相談したいと思う？ それつて怖くない？ 本当はもつと気軽に相談したり、亜人(デミ)のことで語りたいのかもしれないのに。

「私たちはアイツらのこと何も知らないんだなつて……てなことを……思つたりしてました（）」

途中から注目に氣付いたのか、吐露しそぎたのか、いつもの氣の抜けた雰囲気を戻してパックジュースを飲みだす井森。

ただただ、皆がそれに圧倒されて、「かもな」という咳きだけが漂う。
「日下部はどーなのよ、仲が良いでしょ？ 小鳥遊とかにそういう相談事とかされたり」

「ないぞ」

「へ？」

「いやだから、ない、一回も」

「マジ？」

「マジ」

マジ。語る程吸血鬼バンパイアのこと話したことがあるかと言わると、ない。話の流れで
ちよつとは喋つたりするけども。

それが予想外だつたのか、佐竹と太田はお互い顔を見合させている。

「きつと全部テツ先生に持つてつてるんだろうなあ……俺は別のことで頼られてるし
……」

「別のこと？」

「小鳥遊家の買い物のお手伝い」

「えつなんだそれ」

いやそのまんまだが。放課後に呼ばれて、俺がその時暇だつたら食材とか生活用品とか買ひに行つて家までの荷物持ちするつてだけだ。

そう説明すればこれまた一同が微妙な表情で、言葉に困つているのが俺でもわかる様子だつた。

特に難しいことでもないと思うんだけどな、ま、まあ亜人^{デミ}ちゃん相談事をされたいとは、思うけど。

「わからねー、距離感がわからんねー」

「うーん、独特だねえ……」

わからんねーも何も、そんなもんだと思うけどなあ。同意を求めてみるも、佐竹はいやわからん、太田は曖昧に首を傾けるだけ、木村と井森はうさん臭いモノを見るかのような視線を向けてきやがる。

どうしたものかと途方に暮れている時、視界の端に踊つたその姿は俺にとつて救世主だった。

「小鳥遊ー！ 小鳥遊ひかりさーん!!」

「はーい！ なんでしょうかー！ やつほー!!」

「どうやら俺と小鳥遊の関係が理解できないらしい」

「友達かなー？ ……うーん？ うん！ 多分！」

「ほらな？」

「いや何がだよ」

「うん、これで誤魔化せるわけないよね。この救世主はポンコツだつたようだ。解散！
「あ、そだそだ、なんかさく先生の様子が変だつたんだけどさくなんか知つてる？」

小鳥遊が腕を組み、唇を尖らせこちらを伺う。その話は丁度さつきやつたばかりだつた。

佐竹がおずおずとテツせんせーと教頭先生のやりとりを搔い摘んで伝える。その間、一言も喋らず終わるまで黙っていた小鳥遊は、しばらく考え込むと、名案でも浮かんだのか、ウインクをして佐竹にお礼を言いながら走り去つて行つた。

——ありがとうサタツケー！

「サタツケー……」

「……」

「なんだそりや!? あだ名か? なんかモンスターみたいじゃんか! なあ!」

「ああ、うん」

言葉は不満そうに、しかし顔はだらしなく崩れていて、まるで見せびらかすように笑つている様はあだ名を付けられた嬉しさが全開で、うん、とても喜ばしいことだと思うよ?

「おめでとう佐竹……！」

「両手を握りしめて我慢してゐるね」

「コイツは相当わかりやすいよな」

嫉妬の怪物に飲みこまれないようにするのが大変だった。

高橋鉄男に当たりたい

「先生、お話があるんですけど」

「その振りかぶった腕を降ろしてから話そう」

最早止まれぬこの思い。テツ先生には悪いが本気で数発殴りたい気分だつた。

いや、悪くはないんだ。テツせんせーは亞人に理解があつて、大人で、先生で。だから小鳥遊もその線引きを理解しているからこそ簡単に出来たのだと、そう思いたい。

「だあああつて！ 教師が！ 生徒に！ ちゅーしてもらつたとか！」

「おおつとそれ以上は駄目だ。どこで聞いたそれを」

「昨日、本人から……」

「ひかりが言つたのか？」

「まあ口を滑らしてつて感じでしたけど」

テツ先生はさも意外そうな顔をするが、あれは事故のようなものだ。いや、ほんと衝撃的だつた。小鳥遊は本当に小さく漏らしだけなんだけど、それを俺が運悪く拾つてしまつたというか。

その時はもう何て言うか笑いしか出てこないというか、佐竹と木村が怯えた目をして

いたのが印象的だつたというか。どうかしてたよあの時の俺は。

「^{デミ}色々考えさせられた翌日、木村がまず言い出して、井森が追随した。
「^{デミ}亞人ちやんのことをもつと知ろーぜ」

「友達なんだしさ、頼られないってのも寂しいじやん」

次に佐竹が大いに乗り気で、太田も関心を隠し切れない声色で同意した。

「いいなそれ！ そうすればお前らもあだ名つけられるんじやねーか!?」

「佐竹はちよつと黙つて、ほら春明がまた暗黒面に……それはそれとして、僕も賛成、『ちよつと違う面』を知らないと、ずっとこのままだからね」

言葉に出すまでもなく春明も賛成だつた。

あとは思い立つたが吉日、女子二人から^{デミ}亞人ちやん三人へ招待状が飛んでいく。佐藤先生は悩んだ末に、諦めた。佐藤先生は先生だから、ちよつと誘いづらいというのもある。あと忙しそうだつたし。

^{デミ}亞人ちやん達もそういう事ならと嬉しそうに快諾して、放課後に昨日集まつた場所でわいのわいのと交流が始まつた。訳もわからぬまま巻き込まれた小鳥遊びまりは、口ク

な事情も説明されずに呼ばれた結果であつて、呼んだのは春明だつた。ついでに言えば姉の小鳥遊びからも「放課後にここしゆーごー」となんともお粗末なお誘いをかけられていた。

最初は一人の亞人に皆で質問形式で色々教えてもらつて、そのあとは個々で自由にお喋りが始まり、そうして今は……^{デミ}

「日下部、ちよつと肌とか触らせて欲しいなー」

「うん、いいよ？ 冷たいと思うけど」

「……こんなに冷たいのね、あと肌がすべすべ」

「そ、それは偶然かな？」

「どんなお手入れしたらこうなるの……」

井森敦美と小鳥遊びまりが日下部雪と、

「町の顔とか持つてみたいな」

「ち、ちよつと重たいから落とさないでね？」

「責任重大だな、とけつこう重つ！」

「あはは、人間の頭つて体重の約10%ぐらいの重さつて言われてるからね、そりや重いよ。町さんがガツシリしてるのはそれを常日頃から持つてるからだろうね」

「太田、おめーデリカシーないな」

「何で!?」

「木村さん、私は大丈夫だから!!」

木村静香と太田淳一が町京子と、

「吸血鬼って噛みついて血を吸うつてのが一般的だけどさ、あれ、首以外はどつか噛みつきたいなーとか思つたりしねーの?」

「それなら腕とか! 噛みつきたい衝動はたまに来るの、その度に首を噛むのは大変だし鬱陶しいから、その点腕なら綺麗な肌も見えてると視覚的にもプラスだつたり。それでこの前せんせー達と噛みつきたい腕選手権をして点数付けしたりしたよ!」

佐竹裕介が小鳥遊びかりと、それぞれが好きなように語り合つて冗談を飛ばし合つていた。心なしか、亜人^{アヤミ}ちゃん達の笑顔もいつもより増している気がして、佐竹なんかは小鳥遊もけつこー可愛いじやんと呴いていたり。春明にとつては今更なことであり、小鳥遊の笑った顔は魅了効果が付いているんだぞと付け加えたいくらいだった。

さて、春明はその中で一番最後、当然ながら小鳥遊びかりと佐竹裕介に混じつて参加していた。他の亜人^{アヤミ}ちゃん達に比べて長く時間を割いているのは、しようがない。——佐竹に悪気はなかつた。語らいの流れでそれを聞いただけだし、それ自体はなんでもないこと。そもそも春明だってその流れに乗つたのだから誰も悪くはない。

「じゃあ俺の腕はどうよ？　噛みつきたい度何点？」

ぐいと佐竹が制服の袖を捲る。それを小鳥遊がぺたぺたと触つたりぐいと力を込めて押したりして、

「うくくくん……………4点！」

ひでえ。思わず言葉が出てくるくらいには低評価だった。「100点満点だよな？」佐竹の一縷の望みをかけた声も、「ううん、100点満点！」とバツサリだった。その鋭さたるや吸血鬼の牙に勝るとも劣らない。

春明が理由を聞いてみれば、美味しそうじやない、ユツキーミたいな肌じやない、柔らかさが足りない、良い匂いがないと散々だつた。

佐竹は今度こそ地面上に手をつくことになつた。容赦ない言葉に心が抉られたようだ。
「まあなんだ、どんまい佐竹。ところで……」

——小鳥遊的に俺の腕はどうなんだ？

まず、小鳥遊の時間が止まつた。

ぐいと差し出した腕を見て文字通り、表情が、呼吸が、身体が、全ての動きが止まつた。いや、目だけは止まつていなかつた。

最初に手首を凝視していたそれは、やがて腕を辿つて肩に至り、そのまま制服の隙間から見える首へと移つて、数瞬の後に評定を待つて小鳥遊を見つめる春明と視線がかち

合った結果——静かに爆発した。

「ぜ」

「え」

「ぜ、ぜろ、てん……」

「春明ー!! 気をしつかり持て!! まだ致命傷だー!!」

「いや致命傷じや駄目でしょ」

佐竹の絶叫と、何事かと町の顔ごとこちらを見た木村の的確な突っ込みが響き渡る。死にたい、4点を宣告された佐竹を鼻で笑つていたら、それ以下の点数、というかまったく良いところなし。

意中の相手にそんなことを言われるなど、この世の終わりより恐ろしいことで、それ

を今まさに体験している春明の胸中など、想像すら生ぬるい。

春明の世界は文字通り終わり、周りがなんか騒いでいるという認識はあるが何を喋つているのかわからない状態で、しかしそんな状態でも小鳥遊の声だけは集音マイクもビツクリな性能を發揮して拾つていた。

「先生にチューするより恥ずかしいってどういうことよお……」

哀れ春明はラスボスの前に今度こそ死を迎えることとなる。

「おい！ なんか笑い出したんだが！ 戻つてこーい!!」

「……もうこのまま放置でよくね？」

「道理であんな空気になつていたのか」

「先生見てたんですか？」

「まあ教頭先生と一緒にな。というか声かけたんだが、覚えてないのか？」

まつたく覚えていなかつた。そう言えば途中から参加者が多くなつたような感じはしていたけど、それがテツせんせーだつたかどうかを覚えていない。重症にも程がある。

それはさておき、こうして今ここにいるのはそのラスボスに一矢報いるためだつた。流石に翌日まで死んでいられる程親は甘くない。もうずっと寝ていたいと早朝に起こした反乱が、恋愛小説の一冊を持ち出して鈍器代わりに一発、さつさと学校行けの一言と共に鎮圧させられた。

「0ですよ0、10とか100とかじやなくて、0。どうしようもなくないですか」

「オレに言われてもな……ちなみにオレは赤点だつたぞ？」

「赤点でも0よりは上でしょ！」

「いや赤点だから0点もあり得るんだが」

「屁理屈はいらねーですよ」

「ああ、うん、すまん」

学校へ行けば反乱の罪は不問になると有難いお言葉を頂戴し、昨日のダメージを負つたまま学校へとやつてきた。

佐竹や太田はやる気のない挨拶に気持ちを察したのか特に変わらず接してくれたが、木村や井森からは元気出せとジュースを貰い、ひまりさんはもう哀れで仕方がなかつたのか必死に慰めてくれた。その行動がまた心に響くんだよ……

小鳥遊の顔なんて当然まともに見れるはずもなく、心配そうな声に大丈夫の一言でそそくさと教室へと逃げてしまつた。

「ふむ、でもまあ、そうか」

「何か?」

「いいや? 思うところは色々あるが、それを言うには立場がな」

「わ、大人っぽい」

「失敬な」

言いたい、けど言つてはいけない。そんな空気を纏う先生は、しかしそのもどかしさとは別に楽しさを含んでる気がした。

理由を聞いても、さあなのー点張り。優しい先生はどこへ行つたのやら。こつちにとつては死活問題だと言うのに。

「はあああ！ 夏前には小鳥遊に告白しようとか思つてたのに！ お先真つ暗ですよこれ！」

「気持ちはわかるがあまり大きな声出すなよ？ いくら放課後で人が滅多にこない場所とは言え、もしかしたら誰かが来るかもしれない。それこそひかりが来てこの会話が聞かれたらどうなるんだ」

「それなら抜かりはないですよ、ちゃんとひまりさんから小鳥遊は今日用事あるらしいって聞いてますから」

それを警戒しない俺ではない。ひまりさんに小鳥遊の動向は聞きだしている。用事があるならここへは来ないはずだ。実際、こうして訪れてからそこそこ時間が経つているが、小鳥遊はおろか誰かが来る気配すらない。

「まあ、それならいいが」

「それより生徒に抱きつかれた拳句、ちゅーまでされた先生の釈明を聞きたいです」

「頬ならセーフじゃないか……？」

「苦しい良い訳ですね、ギルティです」

「アソツも特に深い意味もなく、勢いでやつたみたいだつたが」

「そうかもしれないんですけど、俺にとつてはそれでも羨ましいですよ！」

つまりは嫉妬だ。あだ名を付けられた佐竹に、小鳥遊に色々なスキンシップを取られる先生に。

こうして先生に喚いているのも、ただの八つ当たり。きっと先生も、それを解つて付き合つてくれている。

高橋鉄男は良い教師、その立場に、ちょっと甘えたかつた。

ところで、吸血鬼の亜人デミである小鳥遊びかりは、妹から『五感が凄い』と言われている。

吸血鬼が暗闇の中で獲物を襲うために発達したそれは、現代に至るまでも失われるごとなく、程度の差こそあれ吸血鬼の亜人デミ人に受け継がれていく。

高橋鉄男は気付かない。日下部春明も気付かない。

生物準備室の扉の少し先、階段を登ってきた存在に、人間である二人は気付けない。ただし、その登ってきた存在は、二人の語らいをその鋭敏な聴覚でしつかりと捉えていた。

捉えて、しまつた。

——はああ！ 夏前には小鳥遊に告白しようとか思つてたのに！ お先真つ暗ですよこれ！！

心臓が、跳ねる。

何かの聞き間違えなんじやないかと疑うその叫びは、しかし普段から聞き慣れた声だからこそ幻聴でないと脳が裁定を下す。

小鳥遊ひまりに用事があるからと伝えたが、その用事こそ高橋先生への相談事だった。

登るために動かしていた足が回れ右をして降りるために動き出す。最初はゆっくりだつたその足取りも、一階に辿り着くころには早足になり、校門を出た頃には全力疾走へと変わっていた。

意図せぬことは言え、盗み聞いてしまつたことに胸が罪悪感で溢れていく。

どうしていいかわからなくて、ただ身体だけが動いて、心がぐちやぐちやになつて。

そうして息を切らして、靴を脱ぎ捨てて、父親の声も無視して自室のベッドに身体を投げる。

小鳥遊ひかりは、自分の心がわからない。こんなの、経験したことがないから。

昨日、日下部春明の腕を見てちょっとでも吸血衝動が湧いてしまつて、それがとても

恥ずかしくて。

その翌日にこれだから、小鳥遊びかりはそれを整理する余裕なんてどこにもない。食までに元に戻らなきやと思うも、それが出来るかどうかわからない。

小鳥遊びかりは、何もかもがわからなかつた。

夕

日下部春明の校舎裏

最初に異変に気が付いたのはやはり小鳥遊びまりだつた。

一日二日三日、ここまではまあんなことあつたし……と氣のせいで済ませた。しかし四日五日となると、流石に氣のせいで済ますことが出来ない。

佐竹や太田に事情を聞いても、三日経つた辺りから立ち直つたというか割り切つてたぞーと言われ、いよいよ何が起きているのかわからなくなる。

次に異変に気が付いたのが、日下部雪と町京子だつた。

小鳥遊びかりの様子がいつもと違う。言葉はいつもと変わらないのだが、纏う空気とか言葉のテンションとかが、違う。

本人に聞いてもしらばつくれるばかりで、困つた二人は妹のひまりに事情を説明したもの、ひまりもそれがわからず調べている途中で、何かわかつたら教えて貰うことにして待つことにした。

一番最後に、佐竹と太田が気付いた。

二人はひまりから声をかけられて、やつとここ数日に渡つて覚えていた違和感の正体を知つた。あいつ、確かに俺らとばつか喋つてやがる、と。

もうどうしようもなく、拉致していい？　と本気100%で聞いてきたひまりに二人はそれを推奨すらして結果を待つ。

「日下部さん、校舎裏」

「ちよつと顔が本気すぎやしませんかね？」

こうして、日下部春明は小鳥遊ひまりに拉致られることとなつた。

「その、な？　なんか話しづらくてさ」

「気持ちはわかりますけど」

「まあシヨツクだつたけど、よくよく考えれば別に振られた訳じやないし！　ちよつと、こう、確率が……下がつただけだし……」

昼休み、人気がない場所と言えばやはり校舎と壁の間の日陰部分と決まつていて、ここに春明とひまりは、それぞれ壁と校舎に背中を預けていた。

向かい合う二人が話すのはやはりここ最近の異変——春明と小鳥遊が最近喋つてないんじやね——についてである。

しかし春明自体はもう立ち直つていると言う。後半部分は若干声が小さくなつているが、話しづらいだけで話すことは別に問題はないとのこと。

「むしろ、小鳥遊が俺を避けてるんじゃないかなって一昨日辺りから感じてるんだけど、気のせいであつてほしい」

「……すみません、ちょっとそこかなつて部分は私から見てもあります」

その時の春明の顔たるや、約一週間前の再来と言つても過言ではなく、慌ててひまりがフォローに走るほどであつた。

「で、でも！ なんかこう、嫌いになつたとかじやなくて、うーん？ 日下部さん、お姉ちゃんに何かしました？」

「してないしてない……口クに会話してないのに」

「そもそもお姉ちゃん自体、あの日からおかしいんですよ」

「どういうこと？」と春明が聞けば、ぼーっとすることが多くなつたとか、私の腕を噛む頻度が増えたとか、デザートを私に譲つたとか、早起きするようになつたとか。

最初はともかく、後ろ二つがおかしいとはどういうことかと問い合わせたくなるレベル。……聞かなくとも想像は付いてしまうのが春明は悲しかつた。

「私にも相談してくれませんし、こんなのは初めてです」

そう締めくくつたひまりの顔は、不安と悲しみが混ざつた面持ちをしていた。

その原因を担つてているのではないかと自覚している春明はそれに対してかける言葉が見つかるわけもなく、ただ口を閉ざす以外にない。

実はこの時、ひまりはその翌日のことを話そうか迷っていた。自分が帰つてきた時、父親から姉の様子がおかしいと聞かされ、こつそりと様子を伺えばベッドに突つ伏して微動だにしない姉の姿を確認した。

恐る恐る声をかけてみれば、やつと自分の存在に気付いたように慌てて起き上がり、ちよつと寝ていた、と笑う。それが嘘だと見抜けない程ひまりの目は節穴ではない。

——結局、ひまりは言わないことにした。今の空気から昨日の今日で二人が会話しているとは思えないし、高橋先生に聞けばいいと思いついたのもある。

「日下部さん的にはどうなんですか？」このままでいいなんて

そんなの、聞かれるまでもなく、

「思つてないに決まつてる。ほんとはこう、テツせんせーにしたスキンシップ全部俺にしてくれつて言いたいけど、とりあえず今まで通りに戻りたい！」

「欲望だら漏れですね、一応目の前に妹である私がいるんですけど」

「そういうやそーだ」

小鳥遊びかりのことに関するては、正直だつた。

立ち上がつて力強く宣言したそれを聞き、ドン引きしているひまりの姿にすごすごと体育座りへ戻る。割とガチな引き方をされるのは辛い。

「変態的なことはさておき」

「おい」

「お姉ちゃんも日下部さんと話してると楽しそうにしますし、私だつて元に戻つても
らいたいんですけど」

「本人逃げない？ ちゃんと聞いてくれるかな？」

不安げに訊いてみれば、ひまりは首を横に振つて否定のニュアンスを示す。今の状態
なら、逃げそうですね、と。

双子の妹にそんなことを言われてしまつては、春明としてもどうすればいいのかわか
らなくなつてしまふ。

「そこはこう、手をぎゅっと掴んで」

「学校でそんなことすんの？」

「……翌日には一年全員に噂が回つてそうですね」

なにせ、人の色恋沙汰に関しては三度の飯並に関心があるお年頃である。

思春期の男子生徒としては、周りに囁き立てられるのは春明としては遠慮したかつ
た。別に佐竹とか太田と、町とか日下部とかに囁き立てられるのなら、いい。皆は友達
だし、少なからず理由を知つてゐるからだ。

ただ規模が大きくなると、羞恥の感情が許容量を超えてしまう。きっと朝から放課後
まで、休み時間ごとに誰かしらから一言かけられたりとか。祝つてくれるるのは嬉しい

が、何事も限度がある。

じやあ誰もいないところでとなるが、そうなると逃げられた場合に亜人アメニとしての能力をフル活用された場合、捕捉出来る自信がなかつた。それはひまりもわかつて いるよう で、どうするかと頭を悩ませていた。

「いつそ私が一つ芝居でも打つちやおうかな……？」

「俺の姿が見えた瞬間逃げそう」

「あ、じゃあ私達の家とか」

「もしもの場合俺の逃げ場がないし、おじさんにどう説明するんだよ」

そう、万が一というのも大事。やる前から失敗した時のことを考えるなどと言われるかもしぬないが、少なくとも小鳥遊家で話し合いをした場合、拗れた時が怖い。外やどこかの店ならば精神が耐えられなければ逃げられる。しかし小鳥遊家となると、不安定な精神でおじさんに挨拶などしようものならその後二人に事情を問いかけないとも限らない。

二人で気まずくなる分には、もうしようがない。しかし余波をそれ以外にまで広げるのは春明の望むところではなかつた。

「そんなに深く考えなくてもいいじゃないですか……」

「俺が気にするの」

「そもそも今まで買い物に来てくれたのに突然来なくなつた時点でおとーさん色々聞いてくると思いますけど」

「あ」

「そう言えば、そうだった。なんてこつたい。春明は出てくる溜息を抑えることが出来なかつた。

「でもうん、これは自分でどうにかするさ」「出来るんですか？」

「やるしかないっしょ。俺と、小鳥遊の問題なんだから」

二人で、解決するべきことなのだ。ここでひまりの力を借りる程、春明は他人任せにするつもりはなかつた。これからがあるならば、喧嘩だつてするかもしれないし、その度自分で片づけられないというのは、格好がつかない。

あとはひまりさんに相談したなんて小鳥遊が知れば怒つた顔でひまりを巻き込むなとか、そんなことを言われそうというのもある。

「逃げられたら？」

「トラップや待ち伏せも辞さないし、どうにもならなくなつたら手をぎゅつとでもするさ」

春明の手が、虚空を掴む。案外、どうにもならない時はすぐ訪れそうだ。改めて数日

も話していない事実を認識すると、もう話したくて話したくて仕方がない。

あの遠慮のない会話がしたい、小鳥遊の笑っている顔が見たい、買い物をしながら夕飯の献立を想像したい、その後で小鳥遊の家でまつたりしたい。

ひまりはその姿に「そうですね」と相槌をしながら満足そうにうなずいた。

「その時は積極的に噂を広めますね」

「広めるとまでは言つてないんだけど?」

「いいじゃないですか。全学年に知られれば、お姉ちゃんにちょっかい出す人なんていなくなりますから」

実にイイ微笑みだつた。

春明は一瞬考え込む動作をして——親指を立てて異議なしと言わんばかりの笑みを浮かべる。小鳥遊の妹にここまで応援されたならば、止まる理由はない。

「ま、じゃあ明日からちよつと迫りかけてみようかな」

「今日の放課後とかでもいいじゃないですか」

「それはちよつと早すぎる」

いやほら口を改めて的な意味で。言い訳をすればジト目が返ってきて、「このヘタレめ」と。いや戦略的な意味でヘタレではないと春明は言い返したかつた。

「私が相談に乗つたんですから、ちゃんと捕まえてくださいね？」

「乗つたつて言うより乗らせたつて言つたほうが良いと思う、あの喧嘩するぞみたいな顔して校舎裏とか言われたら誰も逆らえないと」

「お姉ちゃんとのけんかで鍛えられてますから、買いますけど？」

その時の気迫たるや、後に春明はその時を振り返つて、「心臓が止まりそうだった」と漏らす程だつた。

小鳥遊びかりの渡り廊下

小鳥遊びかりはわからない。

そりや、そういうことだつてあるだろうと考えてはいた。いつか身を焦がす程の恋に巡り合うかもしれないと思つていたし、近くに町京子という、高橋先生に恋してゐる友達がいて、その様子を見ていたから早く来ないかなーなんて待ち遠しくなつたりもした。けれど、けれどこれは余りにも早すぎるんじやないだろうか。

——はあああ！ 夏前には小鳥遊に告白しようとか思つてたのに！

あの台詞が、声が、ふとした拍子に脳内で繰り返される。それが数日続いているのだつた。

聞き間違えだつたらこんなに悩まず済んだ。

ただの友達ならば気のせいで済ませられた。

けれど、小鳥遊びかりにとつて日下部春明はただの友達と言ひ切れる程、仲が浅くはない。

まだ三か月。されど三か月。学校のある日は毎日毎日なんともないことで話して、ちよつと前からは食材や雑貨の買い出しまで一緒にするようになつて。

ただ相性が良いなんて感じていたあの頃から、最近ではこのまま関係が続いていけばもしかしたらもしかするかもしれないなんて気がしていた。短くともこの学校を卒業するくらいには、と前置きは付くけれど。

「うううう！　どんな顔して話せつて言うのよ……」

枕に顔を埋めながらバタバタと足でベッドを叩く。ちょっとした挨拶や一言二言なら大丈夫。けれど今までみたいに、休み時間や学校が終わつたあとに目的もなくずっと喋るというのは、無理だ。気を抜けば、あの言葉が浮かんできて、途端に思考が止まってしまう。

そんな状態を晒せば、何事かと訝しがられ、こちらに寄つてくるかもしれない。万が一そんな時に肩でも叩かれれば、醜態をさらす自信が小鳥遊びかりにはあつた。

「それに……」

仮定、もしもの話、そのまま告白されたとして自分はどうするのだろうか。例えば教室で、例えば帰り道で、例えば自分の家で、正面から真剣な顔で「好きだ」なんて言われた時に、どんな返事をするのか。考えても考えてもわからない。

少し恋愛と言うものを漠然と捉えすぎていたのかも……なんて思つて來たところでふと、天啓が降りて來た。

「恋愛……？　マッチーがいるじゃん！」

そうだ、わからないならば聞いてしまえばいい。恋愛ならマッチーが現在進行形でしているではないか。妹のひまりは……そんな話は聞いたことないし別にいいや。とりあえず行動の指針が決まったことでベッドから跳ね起きる。時計を見れば既に夕方を過ぎた時間。

「おかーさんごはーん！」

腹が減つてはなんとやら。荒々しくドアを開け、一段飛ばしで駆け下りる。明日の昼休みの予定が決まった瞬間であった。

「え？ 恋つてどうなのつて？」

「そうそう！ ちよつと気になつちやつて！」

そのまま翌日、いつもお昼に集まる渡り廊下でお弁当の蓋を開けながら、友人の町京子にひかりは切り出した。もう一人の友人である日下部雪は、今日はC組の二人とご飯を食べるらしく、ひかりにとつて丁度良く二人で話せる状況となつた。

町はご飯を運んだ箸をそのまま口に含んで、ひかりの真意を探るように視線を送る。その視線に含むところがあるのは、ひかりもわかつているがそれを口に出すのは認めた

気がするので何も言わない。

そのまま数秒、箸を弁当に戻しおかずのミートボールを一口。それを飲みこんでからたっぷりと時間をかけて、町は微笑んだ。

「うーん、例えばちょっと空いた時間にその人のことを考えたりとか」

「ふんふん」

その時のこと思い出しているのであろう、目線が自分から空へ移った町の言葉に相槌を打つ。

「その人がいなくなつたらって考えたら胸がこう、ぎゅーっとなつたり」

「ふーん」

想像する、もし彼がいなくなつたらと思うと——それは嫌だ。

「何気ない仕草の一つ一つが気になつたりとか！」

「おー……」

腕とか見ると隙あらばまた頭を抱きしめてもらいたいなつて思つたりするよーと町は言う。それはデユラハン視点だけれど、吸血鬼視点としては、ここ最近確かに別の意味で腕が気になる。あと首筋。

「あと話しててすつづく胸が温かくなつたり、かなあ。楽しいのは当たり前なんだけど、それよりもこう、なんていうのかなあ……上手く説明できなくてごめんね？」

「ううん！　いいのいいの！」

申し訳なさそうに視線を向けてくる町に、慌てて両手を振る。今だけでも、ひかりにはとても参考になつた。なるほど流石は先駆者。ただただなるほど、と思わせることばかりだつた。

今までのを総括するに、『そう』なのだろうか。なにせ、町の言う事すべてが当てはまつてしまつているのだ。いやでもそう判断するにはまだ――

「けどそつかあ……ひかりちゃんも、恋したんだねえ」

「うひや!?」

それはもうアツサリと、ご飯を食べる時に割り箸を割るほどの自然な声で町が爆弾を落とした。

ちようどそのことを考えていたひかりからすれば堪つたものではない。肩を大げさに揺らし、弁当が落つこちそうになるのをなんとか両手で持ち直して軋みが聞こえてきそうな動作で視線を町の頭へ向ける。

「いきなりそんなことを聞いてくるから、そうかなつて思つたんだけど
「ち！　違うし！」

「そつかー、最近日下部君とぎくしゃくしてゐなつて思つてたけど、何かあつたんだ？」
「人の話を聞いてよ!?」

まるで身体だけしかないかのように無視される。いや、頭はその身体の上にあるから聞こえているはずなのに、このデユラハンはわかつててそうやっているのだ。

拳句、相手も彼だと決めつけられ、ひかりはいよいよ声を荒げる。怒っているわけではなく、単純にどう反応すればいいか困るのだ。

「ひまりさんだつて心配してんんだから、早く元に戻りなよ？」

「そんなの！……む、むりだよ」

否定しようとして——諦めた。ひまりが心配してたと聞き、更にそれを伝えた町も気遣わしげな様子だったからだ。不安にさせちゃってごめんねと言いたいところではあるが、前みたいに戻れるなんてひかりは思っていないから、自然と弱弱しい声になる。何せ、決定的な一言を聞いてしまつたのだ。一言一句詰んじれるくらいに脳内で再生される程の強烈な言葉を、吸血鬼の亜人^{デミ}の鋭い聴覚で、はつきりと。

「どうして？」

「どうして、つて……」

こんなのは、言える訳がない。本人の名譽のためにとかそれ以前に、恥ずかしすぎて無理だ。

言葉に詰まつたひかりに、町も無理に聞き出そとは思っていないのかご飯を食べる手を止めない。

「……もしだよ？ もし恋愛してるとしてだよ？ もり噛みつきたくなったりするよ？」

「それがどうしたの？」

「恋愛、不利にならないかな？」

「ひかりちゃんが吸血鬼バンパイアだつてこと、知つててずっと友達だつたんだし、それにこの前なんか腕の採点だつてしてもらおうとしてたでしょ？ 吸血鬼バンパイアだからつて不利にはならないんじやないかな」

もちろん、有利にもならないけどね——自分の不安に対しても大人の姿をしていた。

「そもそも！ 私がデートしたいつて悩んでた時に『デュラハンだからどうしたの？』って言つた挙句、無理矢理先生とデートさせたのひかりちゃんじやん！」

「そ、それはそうだけど……」

あの頃は恋愛を知らなかつた。ただ知識でそうなのだと思つていただけで、実際に自分が同じ状況に陥つた時、なんと不安なことが。

自分が吸血鬼バンパイアなことは胸を張つて言えるし、他の人にこうだと言われたところで受け流すのは簡単だ。

でも、もし彼に何か言われたらと考へると怖い。そんなこと言う人じやないと知つて

いても、答えがわかつていても、怖いものは怖い。だから自分から行動が移せない。

招かれなければ家に入れなかつた吸血鬼みたいだな、なんて自分のことながら呆れてしまう。面と向かつて、直接言われなければ不安は取り除けない。そういうところまで発揮しなくてもいいのに。

「日下部君が声かけた時に逃げないでね？」

「うつ！」

「ひかりちゃん……」

「さ、流石にマッキーに相談乗つてもらつてるのにそんなことはしないって！」

相談してなかつたらずつと整理が付かずに逃げてたかも、というのは否定しない。何を言い出すかわからないし、そうやつて何も考えずに言つたことで傷つけてしまうかもしけなかつたし。

でも今はちよつとでも自分の気持ちに整理が出来たし、こうやつて力になつてくれた町の手前、逃げ続けるのは町にも失礼だから、しない。

「でも予想外だつたなー」

「え？」

「ひかりちゃんが異性を好きになつたらぐいぐい行くかと思つてた」

「どうなのかなあ……私にもそれはわからないや」

——だつて、今は彼のこと以外を考えるのは出来そうにないもん。

町の意外そうな声に、ひかりは曖昧な言葉で返す。もつとも、言葉に出さないだけでそれは永遠にわからない方がいいなあと思つていた。

「……あれ？」

昼休みの残り時間も少ない。町に比べて食べる速度が色々あつて遅かつたひかりはそれらを一気に胃袋へと収め、箸を挟んでごちそうさまをしたあと何気なく視線を向けた場所、窓を隔てた先の廊下で件の彼と自分の双子の妹が楽しそうに話しているのを見つけた。

人がこんなにも彼のことで悩んでいるのに、その彼と来たらあろうとか、妹と楽しそうにしている——そんな光景を見たひかりはその心を瞬時に別の感情へと昇華させた。

「よおおおおおくわかつた……！　一度じっくりと話し合う必要があるつて……！」

ぎりぎりと歯を食いしばる。ベクトルが違えど、こんなにも怒りの感情が大きくなつたのは久しぶりだつた。

数日まともに会話しないだけで、他の女の子に鞍替えですかそうですか、しかも自分の妹とはどういうことだと。

その様子を見ていた町京子は、その時が来た場合に助けを求められても断固として首を突つ込まないことを決意する。
デュラハンの亜人デミとして、馬に蹴られるのは絶対に避けたかった。

小鳥遊びかりに伝えたい

帰りのホームルームも終わって、クラスの面々も自由に過ごす中、春明はすぐ帰らずにいつもの相手と話していた。

内容はもちろん昼休みのこと。春明の友人達も、事情をある程度知っているとは言え小鳥遊びまりに不穏なトーンで呼び出されたともなれば、気にならないわけがない。「で？」小鳥遊の妹から呼び出された結果は？』

「あの時の春明の顔は見物だつたよねー、真っ青つてああ言うんだなって」

「む、無理して話さなくともいいよ？」

野郎二人は興味津々に、それに対しても雪女はこちらを気遣うように笑う。確かにあの時の自分は変な顔をしてただろうと振り返る。ただ、あの昼休みで色々確認出来たからこそ今は清々しい気持ちでいられる。

自分の心が再確認できた、人に言われてようやつと現状を理解して、そうして数日の中にまともに関わってないと自覚した瞬間、気持ちが溢れてもどかしさすら覚えた。

「隠すことでもないよ、とりあえずすぐに仲直りする」

「無事告白が成功したら飯でも奢つてやつから」

「告るつて決まつたわけじやないんだけど」

親指を上に向ける佐竹へ、冷静に突つ込みを入れる。そう、仲直りすると決めただけで、そこから先――想いを伝えると決めたわけではない。ちょっと話し合いして、今までの気軽な繋がりに戻るだけ。

そうしてから夏までに告白出来たらいいなあと春明は考えていた。いつもの関係だつて居心地が良い、自分が我慢できなくなつた時が決意の時だと、楽観的に捉えていた。

少なくとも春明はそのつもりだつたし、三人の友人も、本気で今日明日のうちにそんな話が出るとは思つていなかつた

ドアが荒々しく開かれる。

春明を含め、残つていた少数のクラスメイトも何事かと音の出所へと顔を向ける。十数人の視線を一手に受けたその存在は、一瞬氣まずそうにするもすぐに持ち直し、荒々しい足取りでA組の教室へと侵入、必要以上に地面を鳴らしながら、春明へ最短距離で向かつってきた。

「校舎裏へ来なさい」

「凄く血の繋がりを感じる言葉だなあ」

太田の、傍観者のような台詞が耳に響く。

「ひまりにもそうやつて呼ばれたんだ？」

「ま、まあ」

絶対零度のその声に、同じ温度の視線を向けられた春明は居心地悪そうに頷く以外に選択肢はない。確かにひまりにもそうやつて呼び出されたが、それと何の関係があるのか。

「じゃあ付いてきて」

じゃあつてなんだじやあつて。

その疑問を口にする前に、腕を強い力で掴まれて引きずられるように教室を後にする。助けを求めるように友人へアイコンタクトを送れば、気楽そうに手を振る姿が映り、絶対あとで殴ると心に決めた。

連れていかれた場所は、生物準備室。そこにいたテツ先生に大事な話があるからと真剣な声で伝えた小鳥遊に、テツ先生も空気を読んでこの場所を貸し出してくれた。去り際の、あとで全部説明しなさいと言わんばかりの顔がはつきりと思いだされる。ごめんなさい先生、自分も良くわからないんです、と心の中で謝罪。

そうして部屋に入つて小鳥遊が先生の使う黒い椅子に、春明はソファの端っこに座り、背筋を伸ばして向かい合う。

「で？」

「で、とは」

口火を切つたのはもちろん小鳥遊。

「ウチのひまりとの関係、吐いてよ」

「いやそう言われてもただの友達だけど」

「へえ？」

意味ありげな小鳥遊の声。何が言いたいのか、さっぱりわからない。

「その割には、随分と仲良さそうだよね？ 昼休みに、あんなに楽しそうにしてさ？」

「あ、見てたの？」

「たまたまね。あんなにへらへらしてだらしなさそつな、初めて見た！」

語気が強めな小鳥遊に、はて自分はそんなに顔が緩んでただろうかと思い返す。

確かにある種そんな気分でいたことは間違いない。しかしそんな顔に出ることかと言われると……少なくともだらしないと言われるまでの表情をしてたかどうかは、疑問が残る。

得意げに指摘してくる小鳥遊には悪いが、そんな顔をしていたとは到底思えない。

「いや、そんな顔してた？」

「ひまりとすつごい楽しそうに昼休み話してたでしょ？」

「まあ、実際ひまりさんと話すのは楽しいし」

そこは、否定しない。友達と話すのは、楽しいものではないだろうか。そりやあ気分しだいでつまらなくなるだろうが大体は楽しいものであり、それを責められるような口調で問い合わせされることではない。つまり、小鳥遊の意図がまったく見えない。

自然、言葉も若干ぶつきらぼうになる。言いたいことがあるなら、はつきりと言えばいいのに。

「……私と最近疎遠だからってひまりにかまけるの？」

「は？」

素だった。その論理の飛躍は見事と言う他なく、春明は心の底から疑問が声に出てしまつた。

確かに小鳥遊とは最近ぎくしゃくしていた。けれど、だからと言ってひまりさんと話してたのは別だ、むしろあれは春明が呼び出されたので、かまつてきたのは向こうである。

そんな態度が気に入らないのか、捲し立てるように小鳥遊は思いを吐きだすかのように言葉していく。

「確かにちょっと私は避けてたけど！」

「はい」

「でも！ それは私が悪いんじゃなくて！」

「いやそれは」

「日下部が悪い！」

腕を組んで視線を逸らす小鳥遊に、春明は途方に暮れる。別に、そんなに怒られるようなことではないだろう。ひまりさんと話すのは今まで良くあつたし、小鳥遊と少しばかり顔を合わせていないとそこまで言われようとは。

いくら考えども答えは出てこず、かくなる上はと直接聞くことにした。逃げられたら追つてやると思っていた昼下がり、その数時間後に向こうから飛び込んできたこの仲直りのチャンス、無駄にするわけにはいかない。

「じゃあ何が悪いんだ？」

「何つて……」

小鳥遊がぐいと寄せていた顔を一気に離し、柔らかい背もたれへ寄りかかる。それからたつぱり十数秒、口を開けたり閉めたりして、やつとそれは出てきた。

「聞いたやつなんだもん」

「えつ」

「その、日下部が、先生と話しているところ」

視界が真っ白になつた。そのまま今すぐにでも逃げ出したくなる身体をなげなしの精神で抑える。

直近の会話と言えば、あれである。何故、どうして、用事があつたんじやあと疑問が駆け巡るも、今度はこちらが口をぱくぱくとさせるばかりで言葉が出てこない。

「そんな、なんで……」

やつと出たのはそんな疑問だけ。

「ちよつと先生に相談ごとがあつて、それで……」

迂闊だつた、ひまりさんに用事があるとは聞いていたが、その内容までは伺つておらず、知らなければ後日に回すくらいはるべきだつた。

後の祭りと言えば後の祭り、あの会話を聞かれてしまつたならば、春明はもう頭を抱える他ない。

「待つて、理解が追いつかない」

「日下部が、その、先生に私のことで」

「いやそれはわかつてゐる、そうじやなくて現状にね？」

盛大に、今この場所で、小鳥遊に想いを告げるんだと叫んだあの日。テツ先生は「小鳥遊が来たらどうするんだ」と言つていたが、よもやあれがフラグだつたとは。

話の流れで行けばワンチャン、明日がターニングポイントになるかもと思った矢先がこれ。明日どころか数時間後だった。

背もたれに身体を預け、押し黙る小鳥遊を真似るように春明も身体をソファへ投げ出す。考えるのを放棄したい、頭はオーバヒート直前であり、熟れたトマトのような色をしているのは想像に難くない。

ああ、なぜ自分は生物準備室でこんなことをしているのか、思考を切り替えようすればこれも良くわからない。もうちょっとどう、帰り道とか公園とか、そんな場所でもいいではないか。

身体を倒したまま、視線だけを小鳥遊に向ける。「なによ」とぶつきらぼうに返つてくれる。

「ああ……もうとりあえずさ本当に違うから」
「ふーん」

「聞いてたならわかるよな?」

軽い返事、信じていなければ明白。それどころか、

「……ひまりだつて『小鳥遊』だもん」

「俺、ひまりさんは苗字で呼ばないんだけどなあ」「と惚ける始末。

それで色々察する。あ、これ言わないと駄目なやつだ。こうなれば腹をくくるしかな
い。

すう、はあ。静まり返った教室に、春明の呼吸音が行きわたる。

「小鳥遊」

「ひまりはここにいませ〜ん」

「この吸血鬼め。

「ひかりさん」

「他人行儀だね」

「……ひかり」

「うん」

「俺、ひかりのことが大好きだ」

「わ、私、わた、しも……はるあき、のこと、すき」

「結局、ひまりと何話してたのよ」

「ん
?」

仲直りをすつ飛ばして見事結ばれた二人は、ソファへ並んで座っていた。春明はひかりに、ひかりは春明に。お互いがお互いに身体を委ねて、未だ頬の熱は冷めない。力の抜けた声で聞いてきたのはひかりの方だった。告白に成功した春明は、そう言えばそんな話だったことを思い出す。

「姉の様子がおかしいってひまりさんがな、何かしただろつてA組まで来たんだ」「そ、そう」

「で昼休みの間に色々話して、捕まえてでも仲直りしてやるつて結論に至った。見たのはその後かな?」

うん

ひかりの声が更に小さくなる。これは、勘違いだつたのだとやつと解つてくれたのだ
ろう。

「つまり嫉妬」

「わー！　言わなくていいよ！　駄目！」

慌てたひかりの、綺麗な手が春明の口を覆う。唐突に口を塞がれた春明は、抗議の意味を含めて睨むが中々手を放してくれない。

仕方がない、この手は取りとくなかったがと建前に、本心ではノリノリで口を覆つて
いる手を舌で軽く舐める。一瞬で手が口から離れ、ふうと一息つく。

「ひやつ、な、なな！」

「いや離さないのが悪いだろ」

「だからって、舐めるのはどうなの？」

「勘違いで引き摺られた挙句、ここで問い合わせられたことに比べればマシじゃないかな」
うぐ、とひかりが胸を抑える。勝手に勘違いをして、勝手に嫉妬して、その感情のま
まに相手を問い合わせる——他人から見ればどう考へても擁護しようがない。

それが巡り巡つて今に至るのだから、何が起ころかわからぬ。しかし改めて言われ
るとやはり辛いのか、沈黙の後にやつと一言。

「随分余裕じやない」

それは八つ当たり気味の言葉。

「そりやあ好きな人が彼女になつたんだし、喜びを噛みしめたつて良いでしょ」
どうだ、と得意げに言えば半目になつたひかりが一言。

「つまらない」

声と裏腹にその顔は満足そうで、その表情が春明にはとても輝いて見えた。

232 小鳥遊びかりに伝えたい

【エピローグ】日下部春明は共にしたい

その後のこと少し話すとすれば、まずひかりが提案した。

「ちょっとだけ恋人同士つて秘密にしない？」

「え？」

「やっぱり、恥ずかしい」

乙女心は複雑らしい。きっと、自分を連れ出した時は色々余裕がなかつたからこそ、ああまで駄目も振らずに行動できたのだろう。

それが一段落ついて、余韻に浸つて冷静になつた今、整理する時間が欲しいのだとひかりは遠慮がちに言つた。それに合わせて、学校では前見たく、名字で呼び合おうといふことも決める。

「でもテツ先生には言わないと駄目だと思うよ」

「駄目かな？」

「部屋の主を追い出してまで借りたんだから」

「……う～わかつた」

どうやらひかりはその辺をわかりつつも、先生には言いたくないらしい。見える程の

葛藤の後、渋々と言つた様子でスマートフォンを操作し、連絡を取る。

滑らかな指の動き、それから数分してようやく主が戻つてくる。

「せんせーごめんなさい」

「ちよつと驚いたが、大体察したから気にするな」

大人の対応だつた。先生が、とても優しい目をしている。

「こうして二人並んでるってことは悪くはなさそうだな」

「あ、うん、その」

「付き合うことになりました」

誰かに報告すると少しは羞恥心も出てくるようで、春明は視線を逸らして報告する。その逸らした視線が、ひかりとぶつかつて余計に恥ずかしい。

テツ先生は「そうか」と一言。次に春明を見て、「よかつたな」と祝つてくれた。

「ありがとうございます」

「え？　ちよつと待つて、春明、先生に相談とか……」

「うん」

春明と先生のやりとりに引っかかるものがあつたのか、割り込んできたひかりの言葉に春明は首を縦に振る。

徐々に赤くなる顔、別に先生に相談するくらいと春明は考えていたが、ひかりにとつ

てはそうでなかつたらしい。

「ど、道理で先生の目が最初の頃と比べて優しいと思つた！」

「最初の俺はどんな目をしてたんだ」

「春明もなんで先生に相談しちゃうかな！ 恋愛観で人をからかう先生なのに！」

「だつて亜人アミ^デのことと言つたらテツ先生みたいなとこあるし」

「訂正しておくとオレもからかうつもりは一切ないぞ」

最初はおっさんみた的に根掘り葉掘り聞かれた事実は伏せておく。ともかく実際に相談相手がいるのは春明にとつても心強く、この前のことだつてやり場のない感情の受け皿になつてくれた先生には感謝しかない。

きっと、この先生がいなければあのまま臆病になつて、もつと元の関係に戻ることですら時間がかかつていた予感があつた。

「ふむ、そうだな。ひかりの言う通りの行動をするとすれば——血を吸うのとキスをするのはどつちが簡単なんだ？」

「ま、まだどつちもしてないし！」

「先生、それはさすがにどうかと」

やはり先生はおっさんだつた。頼りがいはあつてもデリカシーがないのは、先生唯一の欠点かもしれない。

「あ、俺はどつちもいつでも言つてくれればウエルカムだから」「春明も大概だよ！」

朝起きて、頬を抓つて、痛みを感じて思う。昨日のは夢ではなかつたんだな。その一幕を母親に見られ、軽い精神ダメージを負つたものの、それ以外は概ねいつも通り。

下駄箱で太田と挨拶を交わし、今日は早いねなんて言われながら教室へ向かう。確かに、いつもはもうちよつと遅い。けれど今日はいつもより早く起きたために、こうして時間つぶしの兼ね合いも含めてやつてきた。

「佐竹と日下部さんが来たら、昨日のこと話してもらうよ？」

「ああうん、佐竹はとりあえず一発殴るな、見捨てやがつて」「あれを止められるのなんて誰もいないと思うけどなあ……」

それとこれとは別である。祈りでもしてくれれば、寛大な心を發揮したかも知れない。しかし佐竹はあろうことか笑つて手を振つたのだ。その後がどうであれ、この部分だけで見れば殴りたくもなる。

途中で日下部を見つけ、今日の時間割について少し話したあと、やはり日下部も気に

なるのか、話題は昨日のことについてだ。苦笑いで佐竹が来たらな、とその勢いを受け流す。

「でも、余裕そうだし仲直りは出来たんでしょう？」

「ああ、それは、うん」

実際には仲直りどころか一気に進展してしまったのだが、それを伝えるのはもう少し先だ。

「春明ー、ごめん、ちょっと現国の教科書貸してー」

教室の外から聞こえた高い声に春明は仰天する。もちろん、自分を名前呼びする女子生徒など学校ではただ一人だ。問題は、それはしばらくしないようにとつい昨日決めたことなのだが。

何が言いたいかと言うと、今までそう呼んでたかのような気軽さでひかりが——その申し出をした本人が、ドアに寄りかかりながら春明と呼んでいた。

「おまつ」

「はる……？」

「あき……？」

太田と日下部が意地悪い顔になる。教室も静まり返り、そこでやつとひかりは自分の失態に気付き、「あーえーとー」なんてもごもごしながら180度身体の向きを変え、そ

のまま消えて行つた。

後に残されたのは、特ダネを掴んで興味津々なクラスメイトと春明のみ。ひかりが逃げなければ二等分できたのに、いなくなってしまったためにその一身を受けることになり、肩身が狭い。

「ふうーん?」

「惚けたりしないよね?」

「まあ、その、付き合うことになります……本当はあいつの提案で少し秘密にするつて話だつたんだけどな」

「ふふつひかりつてば迂闊なんだから。おめでとう、日下部君」

「良かつたね春明」

「ああ、うん、ありがとう」

こうなつてはクラスメイトのうち、普段あまり話さない人までも口々に「おめでとう」だの、「末永くな」だの、「羨ましい」だの好き放題言つてくるから困る。祝われて嬉しくないわけはないが、やはり容量の問題なのだ。

——遅れてやつてきた佐竹が事情がわからず、疑問を近くの生徒にぶつけて答えるてもらい、ニヤつきながら春明に話しかけた結果、頭に良い一撃を貰うまあと数分のこと。

放課後にもなれば、朝の話題はお互いの友達全員に周知されるもので、二人で話していると、春明かひかりのどちらかの友人から「付き合つてゐるの?」と聞かれ、今更隠し立てしてもしようがないので頷けば「おめでとう」と返つてくる。

その声は鋭い武器となつて二人に突き刺さる。祝福の剣は吸血鬼パンパイアだけに効果があるものではないらしい。そのことを春明は今日体験した。

「私のクラスでも噂になつてたわよ」

「うう」

「お姉ちゃんのせいじゃない。あ、日下部さん、おめでとうございます」

「もう聞いたの何度もかなあそれ」

下駄箱の手前でひまりと遭遇した春明は、最早聞き飽きたその言葉にまともな返事をする気力すらない。

それはひかりも同じようで、頭を抱えてひまりと目を合わせようとしない。みんな勘違いをした翌日だからというのもあるだろう。

「まさかお姉ちゃんがあんな積極的になるとは、恋もわかりませんね」

「連行された時は何事かと思つたけどな」

「結局どうしてそんなことに？」

「ああ、それは……」

ちらりと見れば、言うなと言わんばかり強い眼差しを浮かべるひかりがいて。苦笑いしながら「秘密」と答える以外に春明の選択肢はなかつた。

「……ですか、まあいいですけど。お姉ちゃんも元に戻りましたし」

「ごめんね」

「いいです、無理に聞くつもりはありませんから」

「うん。ひまりさんも、色々ありがとうね」

例えば昨日のことだつたり、ちよつとした家でのことだつたり。ひかりに関するお世話になつたと言えばテツ先生より、むしろひまりが一番だつた。

亜人アミのことはテツ先生に、ひかり個人のことはひまりに。そうして、今まで来れた。「私の好きでしたことですから」

「はい、二人しかわからないことを私の前で話すの禁止ーー！」

横からひかりが腕を掴み、ひまりと春明の距離を一步分引き離す。その様子がおかしいのか、口に手を当てて笑い出すひまりに、ひかりがムツとする。

ちよつとした嫉妬をされるのは、春明も嬉しいもので、しようがないなあと思いつつ

そのままひかりの隣に立つ。

「じゃ、私は図書館に寄るから。お姉ちゃんはゆっくりどうぞ」「妹のくせに生意氣！」

「双子だからほとんど変わらないじゃない……」

「じゃーねーひまりさん」

そうして靴を履き替え、下駄箱から校庭へ。そのまま校門を出て、目指すのはひかりの家だ。昨日もそうだった。彼氏として、放課後くらいは送りたい。

友人から一言二言しか話してない知り合いで、色んな人に言われたからか、昨日とはまた違った気持ちになる。なんというか認められたというのか。

その意味では秘密にする予定だったのが、ひかりのミスで一気に広まつたのは大きいかもしれない。本人にはとても言えないが。

「皆には参つたなあ……」

「まあいいじゃん」

「よくない、わけではないけどね？ マツチーもユツキーもどうしてそうなつたのか聞いてくるのが……」

「ああ、説明するのって恥ずかしいよね」

ひかりの勘違いだけは伏せて、昨日の出来事を友人達に何度も説明した春明も、それ

は共感できることだった。

「でも、私嫌いやなかつたから」「ん？」

「だからね、何か疚しい気持ちがあつて隠そつて言つたわけじゃないの」

その言葉に、春明は不覚にも笑つてしまつた。そんな疑いなんて欠片も抱いてないと
いうのに。だから安心させるようにはつきりと、ひかりの目を見て言う。

「そんなこと、欠片も思つてないから大丈夫」

「ほんと？」

「ほんとほんと」

「なら、よかつた」

心の底からホツとしたように息を吐いたひかりは、一步進んだあとその場でくるりと
一回転、そのまま足を止めてこちらへ振り返る。

「私、腕とか首とか噛みたくなるし、行動に移さないだけでたまに血を飲みたいなつて思
うけど」

「いいよいよ、これから俺の血は全部ひかりのになるな」

「そ、そこまでは聞いてない！」

なんというか、今更だつた。それを言ってみれば「確かに今更かも」なんて返つてくれ

る。

春明にとつて、それらは然したる問題ではなかつたのだ。入学式にひかりから話しかけられて、それからどうしたことか次の日もわざわざ来てくれて、それからクラスも違うのに、不思議と毎日顔を合わせるようになつて。自分が恋心を自覚したあの日からは、全てが小鳥遊びかりをより魅力的に見せる一因になつた。

真つすぐな心が、何気ない笑顔が、ちらりと見える八重歯が、名前の通りに輝く髪が、日の光を浴びて怠そうにする様子が、やたらと高いテンションが、自分から振つたのに不意打ちで名前を呼んだ時のあの赤くなつた顔が、友達のために動く姿が、ひまりに怒られてしゅんとしてるところが。

「よし！ じゃあ買い物いこつ」

「荷物持ちは任せろ」

「ちなみに今度はお母さんも一緒するつて言い出してるから」

「流石に一回だけ一緒に終わりは効かないかあ……」

「その一回にピンポイントで居れなかつたから尚更……諦めて春明」

春——高校に上がつた自分を待つていたのはそんな生活だつた。

関係が変わつた今、これから今まで見えてこなかつたひかりが見られるようになる。だからもつともつと側にいよう。そしてまだまだ好きになりたい。

じき
夏が
来る。